

山 嶽 寮

甲南山岳会通信第57号

2002年9月



山 嶽 寮

甲南山岳会通信 5 7 号

2 0 0 2 年 9 月

	会長就任のご挨拶	武田雄三		1
随 想	六甲山麓からの便り	鷺尾 顕		2
	最 後 の 冬 山	茂木光隆		4
	日本アルプスの発見 ーその虚像と実像ー	雨宮宏光		6
	女 の 腕 ま くり	鶴木 洋		12
	大杉谷から大台ヶ原	福田信三		13
紀 行	2000 年～2001 年 歩きから	雨宮宏光		17
	シムシャルトレッキング	鈴木頼正		22
	チ ベ ッ ト 紀 行	雨宮宏光		30
	徳 本 峠 紀 行	廣瀬健三		31
	還 暦 登 山	安井 正		32
	ヒンズーラジトレッキングとルパルピーク 登頂	米山悦朗		34
会 員 短 信	総会・慰霊祭への出欠はがきから			42
追 悼	小林大二郎君の御霊に捧げる	小川守正		49
	故高倉達雄君を偲んで	津田昌男		51
	追 悼 ー 高倉達雄氏 ー	朝山 崇		52
	ふるいつつあんの思い出	芦田匡平		53
	倉藤考次君を偲ぶ	廣瀬健三		54
	ク ラ さ ん	飯田 進		55
	神前正博君を偲ぶ	柏 敏明		56
	神前正博君のこと	井本 洋		58
	神前正博君の思い出	奥山正紀		60
報 告	定 時 総 会	山本真博		62
	会 計 報 告	山本恵昭		63
	75 周年記念事業収支報告	村上與利一		64
	行事報告 慰霊祭／木曽福島報告	大森雅宏		65
	山 嶽 寮 書 評			67
ホームページから	垂直と水平の旅人	南里章二		68
	パキスタン余話	飯田 進		70
	甲南中学山岳部 2001 年夏山報告	神戸謙司		73
	大台ヶ原 東の川 中の滝登攀記	池内友宏 他		76
	鈴ガ沢東股遡行記	森本全彦 他		78

会長就任のご挨拶

武田 雄三 (昭39 経)

本年は甲南山岳部創部 77 年、人間で云えば喜寿の年、又甲南山岳会創立 71 年目を迎えます。

私の生まれる前から存在し日本の山岳界に多大の貢献を果たした人材の輩出と幾多のパイオニア・ワークの実績を持つ甲南山岳会の会長という大役を仰せつかる事となりました。もとより浅学非才の身に於て皆様のお役にたてるかどうか心配では有りますが、御受けした以上クラブ・ライフのより一層の充実にベストを尽くす所存であります。

私自身大学卒業後約 25 年間山岳会と疎遠の時がありましたが、ある年同期の村上君よりユーサン最近なにしとんや、偶には総会に出ておいでや—の誘いに現役時代散々先輩諸氏にご心配を掛けながら長らくご無沙汰をした後ろめたい気持ちの整理がつかぬまま勇を鼓して総会に出席しました。香月名誉会長をはじめ先輩諸兄や山行を共にした仲間達が気持ちよく迎えてくれ、極々自然に復帰する事ができました。

まさに山岳会は、私にとって何物にも代え難い憩いの褥であると実感、爾来空白の時間を取り戻すべく又、山岳会の維持発展の為尽力されて来られた諸兄に対するお礼の意味も含め積極的に山岳部・山岳会に関与させて頂きました。最近の会運営にあたりましては、牧野前会長の並々ならぬご努力と丁寧なまでのご指導の下、若い仲間が積極的に役割分担を果たし理想に近い体制が整って居りますので此処にご紹介させていただきます。

会 長	武田 雄三 (昭39 経)
副 会 長	大関 和夫 (昭37 経)
	村上 與利一 (昭39 営)
	安 井 正 (昭40 経)
事 務 局	井上 知三 (昭48 文)
会 計	山本 恵昭 (昭56 理)
山嶽寮編集	山本 真博 (昭48 理)
	大森 雅宏 (昭53 文)
現役指導	八 木 健 (昭58 理)
	田中 一也 (昭63 経)
ホームページ	塩 崎 将美 (昭41 経)

事業計画

1. 会運営一般事項

年次総会開催 物故会員慰霊祭 (4 月)

木曾福島集会 山嶽寮の発行 (10 月)

2. 月例会の開催

会員／部員間の意見交換と会員の活動報告の場として従来どおり開催します。

日 時 毎月第一金曜日 午後 6 時

場 所 芦屋 ホテル竹園内 ラ・ルー

(場所については変更することもあります。

会長または副会長にご連絡ください。)

これらの既存事業の他に会員相互間の更なる親睦を図りたく、アウト・ドアーにての手軽な活動を行いたいと考えています。

最後と成りましたが、本会の運営に携わられた香月名誉会長、鷺尾元会長、河崎元会長、牧野元会長、並びに諸先輩方々に深甚の謝意を申しあげます。

— 随 想 —

六甲山麓からの便り

鷺尾 顕 (旧15文)

散歩を日課とし悪天候でない限り、住いの周辺を気のむくまゝに歩く。花を見、鳥の声を聞き、車や人の流れを傍に見て漫然と歩く。先日の總會の席上、赤松二郎さんが昨秋、令夫人と共に徳沢ロッヂから奥又の池迄、往復10時間で踏破した旨、話され、ブラックでの慰霊祭には高座の滝迄同行するのが精一杯の我が身を振り返り、体力の衰えについ弱気になりがちな昨今。唯々感服するばかり。157歳を数える赤松さんご夫妻の快挙に深く敬意を表したい。

散歩の道すがら、四季の移り変りを肌で感じながら歩く。どの花も季節を違はず咲く自然の攝理の美しさに感歎し、季節を伝える自然の息吹きは生きる喜びと悲しみを告げてくれる。甘酸っぱい沈丁花に弥生の訪れを知り、爽やかな木犀の香りに秋を味わう。草木の四季の変化は自然との貴重な対話である。

季節の移り変りの慌しさは言葉を越えている。季節は地球の温暖化が進みつつ年毎に回帰する。一方、時間はとどまることなく流れ去ってゆく。その流れ去る時間に季節が添うとき、季節は流れを掠めて、そこに渦をつくる。

甲南時代、高等科一年の1938年、一

学期の期末試験が始まったばかりの7月5日、梅雨末期に起った集中豪雨により六甲山系は大規模な山崩れが発生し、壊滅的災害をもたらした住吉川は、再び1967年7月梅雨前線による豪雨となり影響を受け、雨量に関しては1938年災害と大差なかったが、その間長年に亘る砂防工事により災害を未然に防ぎ、その界限の変貌は著しい。

「住吉川、清流の道」

1963年、白鶴美術館の南、住吉川の落合橋辺りから河口に至る迄の河川敷を利用した土砂運搬トラックの専用道路が延2.7kmに設けられ、川尻に埋立の人工島を造成するため1969年迄六甲の山々から土砂が運ばれた。一日に平均約千台のトラックが延190万回、河中道路を往復し、土砂の量は約800万立方米に達した。この人工島は、今六甲アイランドとなり、住宅、学校、商業、倉庫、コンテナ・ヤード等地域が区分され、活気を呈している。嘗てトラックの通った道路は土砂運搬の役割を終え、1974年からは清流の道として住民に利用され、自動車、自転車の乗入れが禁止され、気楽に歩けるのが有難い。水を求

めて飛んで来て川原に憩う野鳥、ルリビタキ、カワセミ、シロハラ等を目にし、週末には新落合橋辺りの川原のあちこちで、賑やかなバーベキューパーティが見られる。

「石仏と地蔵」

住いの近くには、台座に文禄3年（1594年）と刻まれた六地蔵の石仏が、高さ15米を越す樺の木の下にひっそりと鎮座している。又、白鶴美術館の南の有馬道路の傍には御影石の切出しや水車場へ米を運ぶ牛車の行き帰り道中の安全を祈って建てられた地蔵が祀られている。側に10米位の柿の木が繁っているので、地元では柿の木地蔵として親しまれている。台座に嘉永6年（1863年）の銘がある。丁度アメリカのペリー艦隊が日本来航の年である。

毎年、旧盆の終る8月24日には、石仏と地蔵では逝く夏を惜しむが如く地蔵盆が行われ、その正面に提灯が吊るされ、当日の夕刻には石仏や地蔵の前の空地にビニールシートを敷き近在の年配の婦人達が集り、輪になって坐りご詠歌を唱え、祈りが終わった後、地元の子供達が石仏や地蔵に供えられた菓子、果物等を貰って帰る鄙びた風景が見られる。

「猪が出没する」

時折、住いの周辺に猪が出没。以前は六甲山奥に棲息し、住宅地に現れることはなかったが、山麓の開発が年と共に進み棲息場所が狭められた結果であらう。六甲山麓に形成された居住地域は1936年頃は標

高40米位迄だったが、1955年には230米の地点に迄上昇し、1996年現在、340米を越えるに至り、市街地が山間部に拡がっている。（註1） 甲南時代、奥池、篠の木山等にキャンプした当時の記憶を辿れば、稀れに野兎を見たが猪に出会うことはなかった。

猪は庭を荒らしたり、塵芥集積場を散らかし、人に噛みつくこともある。不心得な一部の住民が住宅地に出没する猪に餌付けし、人間の食品の味を覚え、住民の棄てた食料の残滓を漁り、不意に人間に襲いかかつて来ることもあり、人身被害が増えていると聞く。このため神戸市は猪対策に乗出し、5月1日から全国でも珍しい「猪からの危害防止に関する条例」が出来た。人間が不遜にも猪の生活領域を乱していることは事実だと思う。猪が人馴れし住宅地を徘徊しないよう本来の姿に戻し、自然の生態を崩さない配慮が必要であらう。

往時、田口二郎さんが当地に立寄られ、少年時代を過ごされた住吉川魚崎周辺の逍遙に同行した際、関東の火山灰の影響を受けたどす黒い土に比べて、六甲山麓には御影石の風化した白い砂の明るさがあり、心が和むと述懐されたことを想起する。六甲の山々は、山麓に住む者にとって自然の安らぎを与えてくれているのだらう。

（註1）建設省六甲砂防工事事務所「六甲ニュース」平成8年11月号に依る

「南里章二君のアフリカ紀行」

去る5月18日、南里章二君が本山村甲

南会（註2）で「アフリカの全体像が見えて来た」長年に亘るアフリカ旅行（観光と言うより探検とも言うべきか）の体験について、折々に撮った貴重なスライドの映像を交えて、各地の実情を生々しく述べられた。アフリカは、経済不振、天然資源をめぐる先進国列強の紛争、頻発する政情不安等混沌としている。嘗て、トインビーは時代を预言するが如く「21世紀はアフリカの世紀である」と喝破した。南里君のアフリカ紀行報告は示唆に富むものであった。

当日配布の資料によれば、南里君の海外探検旅行は1973年から2001年迄に191ヶ国を歴訪。アフリカ探訪は1975年キリマンジャロ登山、サハラ砂漠横断に始まり2001年ソマリア、アンゴラ等に及ぶ。

今後の更なる活躍を期待したい。

（註2）旧本山村周辺在住の甲南旧制、新制卒業有志の会。年に1-2回講演会の会合が催される。村長は田中五雄君（旧制18回）助役、正田日出夫君。（新制大昭和33年）

‘02.6.25 記

最後の冬山

茂木光隆 （旧18理）

この年、‘99年の正月を箱根で迎えた彼は、元日に独りで金時山に登った。天気は良く、登山路は霜柱もなく乾いていて、快調に歩を運ぶことができたのに、神社から頂上まで一時間余の行程に予想より数分多くかかったのが腑に落ちない彼は、帰京の日の午前中にもう一度同じルートを試みたが、結果は一分と違わなかった。こんなに条件がいいのに余分な時間がかかるのは、加齢による体力の衰えが数値に表れてきたのであろうと、彼は自分を納得させていた。

二月に入ったある日、彼は、山の若い仲間から北八ッに誘われた。

上州武尊や巻機山など、雪の深い山を選んで年末年始の幕営合宿を続けていたのは、既に三十年以上も前のこと。深いラッセル

を強いられるような冬山はもう体力的に無理だと悟り、しかし、雪中歩行の感触が忘れられず、毎年雪が降ると丹沢や大岳山など日帰りして喜んでいた彼にとって、この誘いは魅惑的だったが、即答するにはためらいがあった。正月の金時山のことが気になっていた彼は、その週末もう一度体調チェックのため、正常時のデータが整っている大山に登ったが、ここでも所要時間はかなり超過した。やはり何か異状があるのかなとは思ったが、もう次の週末は出発予定日で、体調チェックを繰り返す間はない。彼は北八ッへの山行に迷い続けたが、同行者の中に強力なメンバーが三名加わっていることを聞き、荷物は個人装備だけでよいとの話に、もし途中でバテたら一人付いて

下山させてもらうことにして、同行を決意した。

渋温泉でバスを降り、装備を調べるとファイトがわき、何年前と変わらぬ緊張が漂う。いざ出発。入山者が多く、かなりよく踏まれたトレールだから楽に歩けるはずなのに、登りにかかると脚の運びが遅くなり、呼吸が乱れる。彼の体調を予めうち明けられていたMさんの、ゆっくり行きましょう、という声に心を決め、彼はMさんのリードに従って登高を続けた。高見石の小屋陰で冷たい風を避けながら、彼の到着を待っていた本隊のメンバーは彼を出迎え、すぐに風の当たらぬ場所を勧めた。白駒池畔の幕営地迄は下りが続き、彼もパーティーに遅れることなく付いて行けた。今までに経験したことのないこの異常な体調に彼は困惑していたが、とにかく湖畔にたどり着き、初日の行程を終えて安堵した。

凍った湖面は新雪に覆われて広く平坦に開け、岸边もまた人の足跡を見ぬ白一色の美しさに、彼らは一瞬歓声を上げ、やがて奥深い静寂と、日没前のその荘厳さに息をのむひと時だった。汚すには惜しい雪原を最小面積踏み固め、そこに二張りの幕舎が設営された。団欒の時を迎える頃、外気は冷え、闇が森林の影を覆ってきた。永い夜、それはいつもの山行と同様楽しい語らいの場を与え、彼に体調の異状を忘れさせた。

翌朝は高見石から中山峠を経由するコースを予定しているので、なお二百メートル余りの登りがあるから、彼は高見石で本隊と別れ、Mさんに付き添ってもらって前日

の路を下山することとした。

帰宅後彼はテニス仲間のホームドクターを訪ね、「山で今までになくバテたが年齢のせいかね」と問うと、医師は以前のカルテを調べ、「血液の状態が悪いから、早く大きい病院へ行って下さい」という。彼は尿酸値測定のために三カ月ごとにこの医師を訪れ、年に一度のS2レベルの血液検査も行っていた。永年つきあっていて、異状があれば直ぐ知らせてくれるのが慣例になっているこの医師は、躁鬱症の傾向にあり、偶々三ヶ月前の検査の頃鬱の状態だったため、結果の異状を知らせてくれるのを忘れたのだろう。早速病院で種々の検査の結果、再生不良性貧血、彼が初めて聞くこの難病と診断されたのは‘99年3月、丁度三年前のことだった。簡単に言えば骨髄の造血機能障害の一種だが、その発病の原因は、二三の化学物質の他は不明とされている。

彼は今、自分の過去を振り返り、また、骨髄の機能障害がスポーツ愛好者などにかなり発症していることを併せ考え、若い頃からの身体の酷使がこの種の病気を引き起こす一因となる可能性も否定できないと考えている。彼は人間の身体は機械と違い、鍛えれば鍛えるほど強くなるものと信じ、それを実行することによって、余り恵まれた体格でないけれども、比較的高齢になるまで人に伍して山に入っていた。

永い人生の間、何が幸か不幸かは、受容する人の心によって異なり一概には定めがたいが、彼の難病の顛末を聞いて、「それでは初めの町医者が正常で、早く手当をして

いれば難病にならずに済んだかも知れませんか」という友人達に対して、彼は繰り返しかう答えている。「もし三ヶ月早く病気であることが判っていれば、冬山に誘われても同行はしなかったに違いない。何年ぶりに冬山の荘厳な姿を垣間見ることができた感動は、全く鬱状態だった医者のおかげ

で得られたものだ。医者が異状の連絡を忘れたのは、私が山好きだから、この年になってもなお冬山の感動を体験させてくれようとする大自然の意志によるものと思う」と。

(2002 年 3 月記)

日本アルプスの発見・その実像と虚像

二人の英国人 W・ウエストンと知られざる登山家 H・E ドント

雨宮 宏光 (昭33経)

明治中期から日本アルプスの探検と登山に足跡を残した著名なW・ウエストンを称え例年6月上高地で開催されるウエストン祭、その陰に明治末期から大正にかけて日本アルプスに踏み入り、日本人にその登山情報を伝達した、同じ英国人H・E ドント他の外国人について知る人は果たして何人いるでしょうか。

甲南山岳部75周年記念誌の発刊に際し、山岳部発足時の背景と歴史を知る為山岳部が産声をあげる20年以上前から活発な活動をしていた、コーベ・マウンテン・ゴートクラブとその機関紙「イナカ」、神戸草鞋の会とその会報「ペデスツリアン」に目を通しました。そしてこの二つの登山団体の活動と、神戸の地が背山にロック・ガーデンを控え近代登山の発祥に最適の環境を持った地であり、そこに甲南山岳部発祥の土壌があったことを知り

ました。既刊の甲南山岳部75周年記念誌にも、田口二郎先輩が「甲南の山登り」と題するエッセイで、系譜的には、甲南の山登りは、藤木さんのRCCをその根源にもつと考えてよさそうである。尤も阪神、正確には神戸には「外人が始めた根強いハイキングの伝統」があり、甲南の山登りの発生も深いところでそれに「つながっていた」と思うとあります。更に田口さんは六甲連山の山麓に青春を過ごした時代を回顧して、尋常科1年か2年のとき学校の近くの住吉川の堤防に立って六甲山を仰いで目を廻したことがある。全山がざわめいて新緑におおわれまるで生物が動いている如く、目に映ったからだ。あれから長い人生で様々な風景を見てきたが、あのような純粹な衝動的な感動を二度と覚えたことがない。又、甲南山岳部に共通したもの、それは何と云っても六甲連山の山麓に青春を過ごしたと

云う一点にあるのではないかと、とも云われています。

幼少時に刻み込まれた精神構造が多感な青年時代を迎えたとき、それは登山への情熱に繋がっていったのでしょう。本文日本アルプスの発見では特に母校山岳部についてふれませんが、今も六甲山に残るドーント岩、杉の茶屋、ロック・ガーデンを散策されたとき、昭和初期北アルプスで高校生離れの岩壁登攀に青春をかけた先輩たちの少年時代に影響を与え、明治と大正に日本アルプスの開拓に貢献した、知られざる外国人登山家、H・E・ドーント他の居留外国人と、神戸草鞋の会の人々の活動に思いをめぐらせて欲しいのです。

W・ウェストン

運悪き小島烏水との出会い

明治21年(1888年)来日し大正4年(1915年)の最後の離日迄の間にウェストンは日本と英国を三たび往来したが、帰英の都度英国山岳会他で日本での登山と探検に就いて逐一発表し、明治30年(1896年)ロンドンのジョン・マレー社より日本滞在中の四年間の登山をまとめて「日本アルプス登山と探検」を刊行した。ウェストン以外にも1877年W・ガウランドが槍ヶ岳に、1878年E・Mサトウが針の木、立山に、R・Wアトキンソンが八ヶ岳、白山に登っているがこれらの日本アルプスの先駆者達はウェストンほど熱心にその登山を英国で発表していない。特にウェストンの第二回目の日本滞在中にその登山が南アルプスに集中しているのは、北アルプスはすでに多くの外国人が登っており、英国山岳会に

探検、初登山の報告とするには価値に乏しいと彼が考えたとするのは勘繰りすぎだろうか。又、彼の日本アルプスの紹介が些か誇大に英国山岳会に伝達されているのは、ウェストンの著書「日本アルプス登山と探検」、「極東の遊歩場」は日本人への登山情報伝達を意識して書かれた本でなく、その探検・登山の内に彼の英国山岳会への入会に対する願望達成が底辺にあったといえよう。(庄田元男氏はその著書「日本アルプスの発見」でそのことを、ウェストンの稚気として婉曲に批判されている)

勿論このことがウェストンの明治における日本アルプスの開拓の功績に影響するものではなく、異国の地にあつて未知なる山々に登山し、そこに日本人への登山情報伝達の意思を求めるなどは、日本人の勝手な言い分だが、問題はこのウェストンの原著が昭和8年(1933年)岡村精一によつてはじめて翻訳されるまで、その登山情報が一人小島烏水の囲いこみのうちに、翻案、意識、抄訳、剽窃によつて伝達されたことである。

小島烏水に就いて、瓜生卓造は日本山岳文学史の中で徹底した批判を書いているが、ことの詮索はにおいて「槍ヶ岳探検記」の報告には自らの存在を鮮明にする為、生死を賭けた登山(烏水自身の記述)にかかわらず、小島をウェストンに紹介した同行の岡野金次郎に一切触れず又、雑誌「太陽」十巻二号に掲載した「甲斐の白峰」と称する登山紀行はウェストンが明治37年(1904年)に書いた南アルプス白峰「現在の甲斐駒岳」の英文からの翻案であり、山の世界において自らの地位確

立、知識の顕示に走るあまり、同じ日本人の山仲間への当時貴重なウエストンの・・・登山情報が歪められ虚像・・・として伝達されたのである。

ウエストンの「日本アルプス登山と探険」が彼の意味とは無関係に自己顕示の種本とされたことこそ彼にとって不幸な出来事であった。

明治、大正の日本アルプスの黎明期において活動した日本人が西洋人の登山情報を直接に得たのは、以下に挙げるH・E ドーントの功績であり、ウエストンの「日本アルプス登山と探険」が昭和8年に翻訳された時は、「この書は古典として黎明期中部山岳地域を懐古する書としての評価は受けてももはや近代登山を啓発する情報とはなり得なかったのである」（前田司 「日本アルプスの発見」より引用）

日本アルプスの実像を伝達したドーント

H・E ドーント

H・E Daunt（英国人）

1894年 来日 神戸バキューム オイル カンパニー勤務

1910年 コーベマウンテンゴートクラブ
「K・M・G・C」

西洋人の山岳会を結成

機関紙「イナカ」[Inaka]を創刊

以後1924年まで全18巻刊行

1915年 英国の王位地理学会会員となる

1920年 英国山岳会に入会

ウエストンの推薦による

1924年 帰国

「イナカ」

コーベ・マウンテン・ゴート・クラブ の機関紙

明治後期から大正期にかけて、神戸に居留した外国人達が展開した欧米スポーツの記録は「イナカ」という機関紙に登山、ゴルフを中心に記録されているがその発刊主旨はH・E ドーントの言葉を借りると” 俗界を離れた人跡まれな土地を放浪したときの素朴な記録を形あるものとして残す”とあり、この「イナカ」には「六甲山の回顧録」という副題がつけられており、1904年頃神戸で結成されたAncient Order Mountain Goatsのメンバーが参加する登山、ゴルフ他六甲山に関する古い記録が記載されている。この会は1910年Kobe Mountain Goats Club「K・M・G・C」と改称されその頃から六甲山頂のドーントの別荘を拠点とした冬の六甲山跋涉が頻繁となる。イナカは「K・M・G・C」の機関紙であり著作はエッチ・イー・ドーントとありペンネーム、ベル・ゴートで執筆されている。

大正4年（1915年）—大正13年（1924年）まで全18巻刊行されたが、居留外国人と母国イギリスの関係者に販売することがねらいでこの理由はW・ウエストンの「日本アルプス登山と探険」の発行主旨と似ている。（棚田真輔編 「神戸背山登山の思い出」より引用）刊行部数は100部から200部と少なく又価格が5円から7円50銭と当時の日本人には高価であったこと、英文であったことから日本人

が入手することは稀であったと推測する。又、ドントは明治 34 年（1901 年）六甲山上に開設した日本最初のゴルフ場、神戸ゴルフクラブの創設時からのメンバーで明治 37 年（1904 年）以降 6 回クラブチャンピオンとなっている。

「イナカ」から日本人との交流を見る

神戸での外国人の登山活動が長く続いたのは、ドントが別荘を日本人にも開放するほか徹底した援助の姿勢、専門的技術、知識の提供と彼の人間的魅力があったからであり、1914 年の神戸徒歩会の会員 155 名中外人 56 名が 1924 年には 440 名中 180 名の外人賛助会員がおり、日本人の 5 倍の会費を払っていたことからもうかがうことができる。

ドントと接触した日本人のうち長野武之丞、近藤茂吉、今村幸男の 3 人は「K・M・G・C」の正会員であり居留の外国人達と日本アルプスに登山を共にしている。

ドントの年度別登山歴は「イナカ」第 15 巻 大正 9 年（1920 年）に集大成されている。

明治 37 年（1904 年）—大正 10 年（1921 年）にかけてのドントの登山記録

1904 年 阿蘇山
 1905 年 男体山 後別山 浅間山
 1908 年 桜島 霧島 伊吹山 白山 信州駒ヶ岳 御岳山
 1910 年 槍ヶ岳 焼岳 穂高岳 乗鞍岳
 1911 年 夷駒ヶ岳 恵那山 常念岳 霞ヶ

岳 甲州駒ヶ岳 高野山 大峰山
 1912 年 女峰山 日光白根山 岩木山 大真名子山 雪倉岳 白馬岳 針の木峠 立山 大蓮華山 石槌山
 1913 年 大山（相模）太郎山
 1914 年 剣山（阿波）
 1915 年 赤石山 笠岳
 1916 年 平山 有明山 燕岳 大天井岳 北岳 愛宕山
 1917 年 塔の峰 金剛山 葛城山 八ヶ岳 神山（箱根） 観音岳 薬師岳 地藏岳 鳳凰岳 砂仏山
 1918 年 烏帽子岳 黒部五郎岳 三ツ岳 黒岳 赤岳（飛騨） 薬師岳（越中） 朴ヶ岳
 1919 年 剣山 別山 有明山 富士のオリタテ 大汝山 鬼ヶ岳 竜王 浄土山 鷲岳 蓮華岳（信州） 針の木岳
 1920 年 小餓鬼 大餓鬼 大原岳 南大天井 鷲羽岳 黒部爺々岳 南赤牛岳 双六岳
 1921 年 八ヶ岳 爺ヶ岳 布引岳 鹿島槍 針峰 大黒岳 五竜岳 牛首岳 唐松岳 不帰岳 杓子岳 鐘ヶ岳（越中）

「プレイランド六甲山史」の六甲山の登山回数参加者一欄表には、参加率 77.6%のドントが第二位と記録されている。ドントは最初の来神 1894 年から 1924 年の帰国の間に三回英国に帰国しており、その間を除いて活発に登山していた。

ウエストンのほうがほぼ 10 年早く登山を

開始していて、ドントがウエストンの情報の恩恵に預かった事は彼自身も述べているが、登山実績としてはドントの方が多い。

関西徒歩会会報「ペデスツリアン」

大正2年(1913年)－昭和10年(1935年)の間刊行

1910年(明治43年)11月19日塚本永堯氏他4名の発起によって神戸草鞋会が創立。それが Kobe Walking Society となり、神戸徒歩会と改称され、更に関西徒歩会と改称されている。毎月の遠足会通知は英文ニュース、図入りの印刷文として会員に配布される。又、クロニカル紙(注)等にその都度報道とあり、会報発行当初から神戸居留外国人との積極的交流を意図した英文欄を設けているのが当時としては特筆ものである。

登山活動を通じての居留外国人と日本人とのかわりに就いては、1913年から1927年まで続いた英文欄に詳しく、担当はB・エブラハムで、ドント他外人の登山活動を紹介、再度山善助茶屋平屋一棟を借り受け、シーダ・カテージ「杉之茶屋」と命名、ここにドントが「K・M・G・C」の会報「イナカ」を寄贈したこと、早朝の裏山(布引・再度山)の軽い登山に日本人と行動をともにしていたこと、ロックガーデンの岩登り指導に、「K・M・G・C」の会員、バワース、H・シェールが参加した等に関する記述が見られる。

又、神戸徒歩会の会員であった藤木九三は大正13年(1924年)RCCを創設したが、その創設に背山のロック・ガーデン開拓に寄

与した「K・M・G・C」の貢献は大きいと思われる。

「ペデスツリアン」から居留外国人と日本人との交流を見る

- 1913年 遠足通知 アーサ・ヤングの「日本アルプス御岳登山記」
- 1915年 ドント 長野等の赤石山脈探険と笠ヶ岳登山
- 1916年 富士山登山記念 「富士みやげ」と題する和英両文冊子
- 1917年 ドント他の鳳凰三山報告
- 1918年 ドントの烏帽子岳報告 B・エブラハムの大峰紀行
- 1919年 B・エブラハムの「ウインター・スポーツ」についての記述
- 1920年 H・シェールの指導で神戸市背祖谷跋涉行を挙行
- 1921年 B・エブラハムの燕、槍報告
- 1922年 休刊(財政難から) 大戦影響で外国人からの寄付金減少
- 1923年 徒歩主義鼓舞宣伝のため「ペデスツリアン」再刊
- 1924年 藤木九三、米澤牛歩が中心となった「烏原谷妙号岩対山の大ザラの大試攀」にバワース他外国人15名参加

この年 RCC創設

同年(大正13年)6月RCCの第1回トレーニングが雪彦山で挙行

H・シェールとバワースがそれ以後も岩登トレーニングに参加

1925年 H・シェールとバワースが遠足会の

リーダーとして参加多し

この年 甲南山岳部発足

1926 年 六甲大縦走にリーダーとしてバ
ワースが参加

1927 年 「ペデスツリアン」での英文欄削除
戦争影響？

(注) クロニカル

明治 23 年 (1890 年) 「神戸クロニカル」として創
刊。明治 32 年 (1899 年) に兵庫ニュースを合併し
1901 年から「ジャパクロニカル」と改称、日刊
紙で主として神戸在住の外国人が購読。

(注) ウィークリー・クロニカル

毎週木曜発行で英国本国にも読者多し。
ウエストン、ドント他への寄稿が見られる。

余 談

蔵書がヒマラヤ熱を啓発

H. E ドントは離日に際し所持していた
山関係の蔵書約 200 冊を当時神戸の亜米三商
会を経営していた西堀（西堀栄三郎の兄）を
通じて京都帝国大学図書館に売却する。

時の図書館長 新村出（広辞苑著者）が図
書館予算から費用を支出した。この蔵書を核
として、その後桑原が中心になって更に本を
集め 1927 年 1,000 冊に達したという。

今西、西堀、桑原等がこれらの蔵書を読み
AACK のヒマラヤ熱をかき立て、以後日本
アルプスから海外の山へとその行動が広がっ
たとすれば H・E ドントは日本人の目を海
外に向けさせた知られざる功労者である。

「ペデスツリアン」誌に記載のドントの登 山に関する記述

1915 年 (大正 4 年)

ドント氏、長野氏一行の赤石山脈探険、
笠ヶ岳登山は本会会員の日本アルプス方
面で活躍を始めた最初の登山として詳細
記述。「ペデスツリアン」誌 19. 20. 25 号

同年 9 月 今村幸男の神戸来住歓迎と南
アルプス踏破のドント氏招待の日本山岳
会本会両山岳会有志主催晩餐会開催盛会と
ある。

今村幸男蔵書「イナカ」18 巻は現在小谷
隆一氏が保有

1917 年 (大正 6 年)

長野武之丞一行との鳳凰三山登山記述。地
蔵佛登頂・・・記録的・・・とあり。その報告には
「サモライン長さ 160 フィート及びマニラ
ロープ三筋各 60 フィート使用云々 ドー
ント、ゴースデン、長野他ガイド、ポータ
4 名なり」と記されている。又、ドント、
H・シェールも賛助会員として日本人の 5
倍の会費を払って、登山指導、六甲山の登
山道整備に貢献。

1918 年 (大正 7 年)

ドント 烏帽子岳報告
第 45 号英文欄報告

結 び

機関紙「イナカ」、会報「ペデスツリアン」
を見ると、ドント他会員の誰もがウエス
トンから日本アルプスの情報の恩恵にあずか
ったのであるが、その登山の情報を日本人の
山岳会会報に直接に記述し、あるいは日本人
と行動を共にし、山仲間の登山道整備に貢献
するなど、生きた情報伝達と具体的行動での

貢献を勘案するとき、彼こそ・日本アルプスの実像・を伝達した第一人者とせねばならない。

文 献

“日本アルプス”の発見・日本近代登山史におけるウエストン
前田司著 京都大学人文科学研究所
日本アルプスの発見・両洋文化の交流
庄田元男著 茗溪堂
異人たちの日本アルプス
庄田元男著 日本山書の会
神戸背山登山の思い出
棚田真輔編 交友プランニング
霧の中のささやき
棚田真輔編 交友プランニング
ペデスツリアン関西徒歩会編 25 周年記念号
アテネ書房
イナカ（「K・M・G・C」の機関紙）
H・E ドーント
日本山岳文学史

瓜生 卓三 東京新聞出版局
日本アルプスの登山と探険
ウエストン著 岡村精一訳 梓書房
日本アルプスの登山と探険
〃 青木枝朗訳 岩波文庫
日本登山史 山崎安治著 白水社
ドキュメント「日本アルプス登山」70 年史
安川茂雄著 小学館文庫
ウエストン書簡と先駆者たち
織内信彦著 日本山岳会編
居留外国人による神戸スポーツ草創史
棚田真輔著 道和書院

お 礼

「イナカ」は平井一正先生のご尽力で前田司氏蔵書閲覧。完全セットはAACK小谷隆一氏の蔵書が日本唯一。

「ペデスツリアン」（歩行者・徒歩旅行者の意）神戸山岳会会長 古賀英年氏蔵書閲覧。

女の腕まくり

鵜木 洋 （昭40 文）

とある日、いつも休日に登る地元の里山・操山に出かけた。岡山市の中心に近い 200m 足らずの山と云うより丘の山塊で、備前池田藩の持ち山を明治の版籍奉還で国有林になった古墳の 50 個ばかりを有する歴史ある処だ。もう何年間も月に 4~5 回は登っている。2 回上り下りすると木道の階段は 700 段になる。あまり練習にも訓練にもならないが、出身高の校名にもなっているこの山は自分のホームコースである。この道を歩くとヒマラヤ 8,000m を夢見て汗

を流したのが、つい先頃の様気がする。近頃は健康志向の中高年の人で賑やかで道も市の税金で整備されて来た。

さて今日も登るかと思っていたら細かな雨が落ちていて空はどんよりしているが明るさも残っている。「朝雨は女の腕まくり」大した事は無かろうすぐに止むだろうと雨合羽も傘も持たずに登りにかかる。突如空は真黒になったかと思うと稲光りと共に篠を突く様な雨が降って来た。雷鳴轟く中を駆け足で休憩小屋に向ったが瞬く間に頭の

先より下着までずぶ濡れ、ズボンの裾より雫が床に落ちる。これは少々話が違ってはいないかと情けなくなった。

「大した事はない」と云う意味で理解していた「女の腕まくり」はアマゾネスの再来か、はた又女子プロレスラーの出現の如き剛腕を思わせる豪雨に会ってしまった。

昔は緑の黒髪に富士額、おちょぼ口に撫

で肩、柳腰に色白の細腕を連想させる故この言葉が出来たのだろうが、街で茶髪長身大柄の女性が肩を怒らして歩いているのを見ると、もうこの言葉は死語になったのだろう。

各々方、ゆめゆめ油断召さるな
現代女性に不信任を突き付けた

元禄生まれの鶴木

追悼山行 大杉谷から大台ヶ原 2001/10/20～/21

福田 信三 (昭39理)

1998年10月に中国 梅里雪山で遺体が発見された。それは、1990年11月に日本を出発した、第二次日中合同梅里雪山学術登山隊(京都大学学士山岳会)が、12月28日 目的の6,470mを到達しながら、翌1月3日 C3(5,100m)でテントもろともなだれに押し流された、隊員のものでした。

学士隊長は京大学士山岳会の井上治郎氏、実は小生の無二の親友吉弘の弟でした。当時京大防災研究所にいた彼からは、ヒマラヤやパタゴニアの氷河が一日に何センチ動くのだ、南極のみずほ基地から年賀の電報をもらったりしたことがある。しかし、彼の兄も遺体発見のすぐ後にガンで60前に亡くなってしまった。彼も、インドへ行ったきり半年も帰って来なかったり、アマゾンへ釣りに行ったり、キリマンジャロへ登

ったり、最近では朽木に一人でログハウスを建てたり極めて活動家だった。

そんな男でも、亡くなる1週間前、恩師の神父を津和野へ尋ね、ホッとしたわ、運が悪かったと言うことやなど、漏らしていた言葉をはっきりと覚えています。

こんな思いを込めて、彼が好きで、家族や同僚とよく行った大杉谷へ入ってみました。後記として、第二次日中合同梅里雪山学術登山隊の行動を参考に記します。

大杉の登山口を出発したのはちょうど12時だった。住吉駅を早朝6時に乗ってから6時間になる。随分長いアプローチだ。この不便さが大杉の自然を守っているのかもしれない。広い川原で松阪駅で買ったおにぎりど、持ってきたいわしの缶詰で昼食をとって早々に出発した。10日ほど前の天気

予報に反して秋晴れになった。この山行を
思い立ったのは古い友人の遺稿集を読んだ
ときだ。友は2年前に帰天した。その13年
前に発生したガンの再発らしい。それを予
測していたかのように、彼は好きな旅行や
登山三昧をした。多分全ての予定を終了は
していないだろう。予定を終了できるもの
なんか居ない。遺稿の中に大台が原、大杉
谷のエッセイがあった。1998年11月2日
だったと思う。文面にはその自然に浸って
いるさまが描かれており、自分もと思って
出かけた。一人では何か減入りそうなので
堺の友人を連れていった。

君もこの清い水を見たのか

今もその清さを保ち、

皆を楽しませているよ

君もこの谷川の水を飲んだのか

今もそのうまさを保ち、

皆ののどを潤しているよ

君もこの滝を見て、美しいと思ったのか

今も水は落下しつづけ、

釜が白く泡立っているよ

君もここで写真を撮ったのか

今も皆がここで記念撮影をしているよ

君もこの鎖を握って崖を登ったのか

今も鎖は崖淵の不安を

和らげてくれているよ

君もこの倒木をまたいだのか

いまま横柄に横倒しのまま

朽ちようとしているよ

君もこの小屋に泊まり

この風呂に入ったのか

今も小屋の親父は元気で、

客をあごで指示しているよ

亡き友人から何度か山に行こうかと誘わ
れたことがある。応じたことが無い。中、
高、大学の10年間も山岳部員として山に明
け暮れていたにもかかわらず、社会人にな
った頃は、なぜか山には目が向かなかった。
彼はこれに対して、社会人になって更に山
や自然に惹かれたようだ。自分はもう山を
やらないからといって彼にピッケルやアイ
ゼンを貰ってもらった。そのとき誘われる
ままに山に行っていれば、もっと思い出が
残ったであろう。しかし、それだけに悲し
みも大きくなってしまうから、今の方が気
が楽だ。



千尋滝

最初の大きな滝は千尋滝で対岸の頂から
落ちているように見える。大杉谷では最も
落差のあるものだ。観光化がここにも及ん
で要所要所には展望所や休憩所があって熟
年組が席を占領して大声でしゃべっている。
千尋滝にはじまって堂倉滝までがいわゆる
大杉谷といわれる範囲である。その間、二

コニコ滝、光滝、隠れ滝、七つ釜滝が見所だ。中でも七つ釜滝は名瀑 100 選にはいっており最後の堂倉滝と共にカメラマンのお目当てになっている。七つ釜滝は一筋ではなく段状になっていて、それぞれに釜と称



七 っ 釜 滝

する滝壺がある。その形の美しさに人気があるのだろう。それに対して堂倉滝は一筋で水量が豊富でどうどうと落ちている。滝との距離も短く、滝をバックに写真も撮りやすい。記念撮影用の滝かもしれない。遺稿の写真もここで撮られたものだった。しかし 3 年経った今、写真に写っている看板は位置が変わっていた。自分もここで撮ってもらった。ちょうど行程の中ほどに桃の木小屋がある。別に桃の木があるわけではないが、300 年前から地図には書いてあると小屋の親父は話してくれた。採り餅に使うもちを採るモチノキはその辺りにあり、それがなまったのではないかというのが大筋の見解らしい。山小屋というのは本来は避難小屋がはじまりで、人名救助や安全確保を目的とするもので、居住性は二の次という考えがいまだにある。部屋は大部屋小

部屋に限らず雑魚寝、食事はろくな物はないし、料金は結構高い。ここしかないし、ここに泊まないと進みも戻りも出来ない。実に上手い所にあるとも云えるし、有難い所にあるとも云える。山小屋のサービスはやはりニュージーランドやスイスのそれを学ぶべきだろう。実に清潔だし、食事もしチューなどのしゃれたものを食わせる。友も、ニュージーランドのミルフォードサウンドのトレッキングの景色はもちろん、小屋のサービス、トレイルの整備、トレッカーの管理などを絶賛していた。日本のように牢屋に押し込まれたという感じはしない。そうは言っても、桃の木小屋は部屋や寝具も清潔で、水洗便所、風呂付きでまだまだ良いほうだ。



堂 倉 滝

堂倉滝を最後に大杉谷を離れ稜線まで登り詰めると大台が原の範囲に入ってくる。今までの谷川の音は無くひたすら高度を稼ぐだけだ。それでも 1,000m を越えてくると、ブナ、カエデの紅葉、黄葉が美しくなってくる。この辺りであいにく霧雨が降り始め、おまけに霧も発生してきて、見通しが悪くなってきた。真黄色のブナの葉はは

るか高いところで霧の中であじんで見える。稜線に出たところに堂倉小屋（無人）と栗谷小屋（営業）がある。堂倉は避難小屋としてはしっかりとしているし、栗谷はガイドブックによると山菜料理などが出て居心地が良さそうで、一度は泊まってみたいと思う。堂倉小屋から日之出岳の間は目を見張るばかりのシャクナゲの原生林だ。その本数では室生寺をも圧倒する。

5 月には赤、白、ピンクで山の色を塗り変える位であろう。シャクナゲが去り笹が目立つ頃、先の方で人の声がして日之出岳が近いことが判った。日之出岳は大台が原の散策コースに入っており、観光客でいっぱいだ。1,694.8m の一等三角点を見て早々に駐車場へ急いだ。友は、逆コースをたどり、「観光客から逃げるように、私達は登山道に入った。」と記した。

追記：

中高時代には友達連中と良く貧乏旅をした。勿論亡き友もこう言うのが大好きだった。成人してからは彼とは何処へも行ったことが無かったが、“あそこが良かったよ”

とは何度も聞いた。そして、グランテトンやイエローストン、奥地での釣りは出来なかったがアマゾンにも行ってみた。

そしてこの大杉谷。別に彼を思い悲しむことは無く、そばに居るようで、時々笑いが出るくらいだ。

“さあ、遅ならんうちに

出発しようか。”

参考：

1990年11月1日先発隊大阪発。21日本隊大阪発。25日本隊昆明発。12月1日BC建設(3,500m)。8日C1建設(4,500m)。13日C2建設(5,300m)。19日C3建設(5,100m)。27日ころC4建設(5,800m)。28日近藤、船原、広瀬、宋、孫の5名がC4から登頂を試み、天候悪変のため6,470mに達したのを引き返す。

91年1月3日夜から4日朝にかけてC3にいた17名が消息を絶つ。4日夜昆明・北京に事故が報告される。5日正午過ぎAAC留守本部に連絡が入る。9日北京からの救援隊がBCに到着。17日ラサからの救援隊到着。20日日本からの救援隊9名到着。チベット救援隊がC2のコルへ登ったがテントを雪中から掘り出すことができず、C3到達を断念する。25日天候回復の見込みがたたず、やむを得ず救援活動中止を決定する。98年10月遺体が発見された。

原稿をお寄せ下さい

皆様からのご寄稿をお待ちしています。最近の山旅、学生時代のこと、行事に参加してなどジャンルを問いません。原稿は 縦書き 横書き 手書き ワープロ いずれでも結構です。ワープロ（パソコン）使用の方は、ファイルでお送りくださると編集がはかどります。フロッピーディスクのほかEメールもご利用ください。

宛 先 山嶽寮編集担当 654-0143 神戸市須磨区菅の台 5-3-12-505 大森雅宏
電話/ファクシミリ 078-791-9600 Eメール jh3rxh@f7.dion.ne.jp

— 紀 行 —

2000年 — 2001年歩きから

雨宮 宏光 (昭33経)

荒川と赤石

パキスタンから帰国後は、岩と雪とは正反対の南アに行きたくなる。

2年前は塩見岳、去年は聖岳そして今年荒川岳と赤石岳に行くべく、さわら島で泊り、翌日千枚小屋に着いたとたん雨、天気は前線停滞でアウト。翌日下山し帰阪。だが下山の当日は「騙しの天気」で9時からいから好天、赤石岳までいけたと悔い残る。

2000年9月29日-10月1日

雨宮 米山 二谷 武田

木曾駒集会前

昨年、小川守正先輩が「俺は穂高のジャンダルムを見たい」といわれ、秋には一緒にさせていただきますと返事していたが、先輩が平生先生のブラジルでの移民活動の資料集めのため長時間のフライトの後で、やや体調不備、よって木曾駒なら可能と行く先変更した。2日間快晴で、紅葉と北ア・南ア他眺望最高、「雨宮君、やっぱり山はええな」と先輩は大感激、木曾駒頂上で「この体調ならいける」との言もらい、駒の湯に下山。78歳を感じさせず歩く姿に、同行の小生、二谷は感動しました。

10月6日-9日

小川守正 雨宮 二谷 武田

蝶ヶ岳と涸沢 しごかれて上高地

大糸線のホームに各自集合して、豊科か

らタクシーにて三股に。11時出発して15時前蝶ヶ岳小屋着。ピーカンで穂高景色最高。翌日、横尾に下山、休暇無い石原と分かち、米山と暖かい横尾山荘前の陽だまりのベンチで「さてどこに行こーかと」相談。阿吽の呼吸で、奥穂—西穂—上高地と決まり涸沢に。途中紅葉すばらしく昼前小屋に着く。小屋で天気予報聞けば明日は雨といわれ、又米山と相談。相談ばかりして初めての予定の5・6のコルを越えて奥又白の池に行く話も消えてしまい、そのうち彼はビール一杯飲み僕は戦意喪失、又横尾に下り超豪華な風呂のある山荘に泊まりました。翌日は朝から雨の中上高地まで1時間40分、彼は人を見ると追い越す癖がありこの年でしごかれてしんどいです。

10月21日-23日

雨宮 米山 石原

大川入山 1,907mと小秀山 1,981m

国土 中津川 加子母

南アルプス眺望期待の大川入山は2年前は雪で何も見えず、今回天気予報確認で出発したが現地着小雨、頂上に行くまでに晴れ期待もだめでこの山ついていません。翌日小秀山は晴天、紅葉敷き詰め道を頂上に、御岳、目の前にぼっちり。

11月3日-5日

雨宮 鳥居 二谷

鷲走ヶ岳 1,097mから白山と手取湖

国土 白峰

初日手取湖の西のこの山から初冬の白山を眺める歩きは、白山の中腹から上部はガスかかり眼下に紅葉と手取湖を見ただけ。鷲走ヶ岳頂上には先客が 2 人、近くの人らしく白山が見えるまで粘ると、焚き火と熱燗ちびりで時間をつぶしていました。

11 月 11 日－12 日

雨宮

平家岳 1,441m と姥ヶ岳 1,453m

国土 能郷白山

稜線から 360 度眺望期待の平家岳は、好天で期待どおり、ただ 11 月も終わりに近いのに、御岳、乗鞍岳に雪無く、見渡す限り緑一色。登山口に廃坑あり。最盛期 3,000 人が作業に従事したこの銅山は明治 22 年開鉱、大正 7 年閉山されたが、この年インフルエンザの流行で 100 人近く死亡したという。当時 1,000 人近くが居住、道路わきに墓標が多くあり、当時の悲惨な状態を書いた記念碑あり。姥ヶ岳は平家平まで林道があり、車デポから秋を惜しむ落ち葉のぶな林の中を歩く。今回、九頭竜湖、麻那姫湖、紅葉、廃村、平家落人の歴史と内容豊富で満足。

11 月 25 日－26 日

雨宮 武田 山本 松成

尾高山 1,212m と虚空蔵山 1,180m

国土 赤石岳 飯田

今年は降雪おそく 12 月のこの時期にシラビソ峠までの通行が可能であり、荒川、赤石、聖岳を眺めるべく、尾高山に行く。峠までの道は一部北向き日陰部分に雪あるが、快晴無風の中、尾高山への雪道は、まったくもぐらず約 2 時間で頂上着。唐松と

樺の樹林帯での眺めは今ひとつだが、途中三ヶ所ビューポイントあり。下山後飯田市内で泊まり、市内からはっきり見える虚空蔵山は再度南アのパノラマ眺望を期待しての歩きだったが、歩き始めて小雨ばらばら、頂上ではガスって何も見えず。靄にかすむ、伊那谷と天竜川、伊那山脈が見えただけ。

12 月 9 日－10 日

雨宮 二谷 山本 松成

スキー三昧

山は当分封印して年末から 3 月までスキーのみ。かなりいきましたが上達は少し。

突如大山 2001 年歩き初め

石原君から電話あり、天気絶好につき大山に行きませんかとの誘いに OK。前夜近くに泊まり、翌朝はピーカン。残雪多く頂上から眺め良し。下山は途中から林間帯にはいりシリコで降りる。

2001 年 3 月 23 日－24 日

雨宮 二谷 石原

雨飾山と霧訪山

国土 雨飾山 北小野

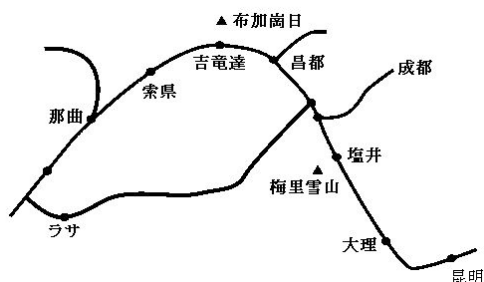
二谷君が今年夏シムシャール参加を決め、プラ・ブーツと 12 本アイゼンを買ったのでそのトレーニングで雨飾山に行く。14 日快晴。車は小谷温泉までで予定外の車道を約 1 時間歩き夏のキャンプ場に。栃木亭から上部は残雪びっしり、デブリを二ヶ所越えて適当に沢を詰め稜線に、急坂を直登し、南尾根の P2 に到達もその上は岩壁で引き返し。大雑把なコース選択は失敗でした。下りは快適なシリコで一気に下山。豊富な残雪とブナ林、行き交う登山者は二人だけと静かでした。翌日アルプス眺望の霧訪山

は景色良し。

4月13日－15日

雨宮 鳥居 二谷 武田

東チベット布加カンリ 6,328mの偵察



未踏峰・布加カンリ (6,328m。N31.8 E94.7) が目標となったのは、平井一正先生との話の内にオーバー60でも登頂可能な未踏峰で且つ手垢にまみれてない場所から、未解放地域にあるこの山の名前が出てきたのです。川蔵公路北路を東に那曲から昌都に向かうとき、街道からすぐのところに布加カンリとある山が「中国登山指南」に記されているが写真はない。布加カンリへのアプローチは現地で情報を集めジーロンタ (吉竜達村) から4,150mまでランクルで走りBCを設営、以後米山は5,000m付近まで平井、雨宮は4,500m付近まで登り偵察したが、アイスフォールの上部のプラトーからの登頂ルートの確認は出来ず、収穫は取り付位置確認のみでした。又、遠望写真からは頂上同定出来ず、頂上は今も謎です。もし人民解放軍の5万分の1の地形図があれば詳細判明と期待しますが、この地形図は現在入手不可能です。チベットの印象については甲南のH・Pに書いています。

5月7日－5月27日

平井一正 (隊長) 米山 雨宮

資料・ロシヤ製地形図 1/20万・中国登山指南・

青藏高原山峰図・航空写真 [o c n]

三の峰 2,128m

国土 越前勝山 白山

新穂高集会前の山として福井県最高峰の三の峰に行く。前日大野市のホテル泊。翌日7時、小六池に車デポし、だらだら歩きで山頂に。周囲残雪多い。

6月1日－2日

雨宮 鳥居 武田 二谷

靱糠山 1744m 猪臥山 1519m

国土 白川村 飛騨古川

靱糠山への最短アプローチの天生峠は崩落で長く通行止めだった。今年6月から開通のはずが、現地に行けばまたもや「工事中通行止」の標識あるが、特に支障なく峠着。車デポから、天生湿原とブナ林のハイキングコースを歩いて頂上。翌日計画の御前岳 1,816mは今度はまともに通行止で予定変更、河合村からまたまた通行止標識を無視し小鳥峠まで、林道とことん行けば広場出現で車デポから、サンダル履き往復30分で猪臥山頂上でこれでは登山といえせん。北アの眺望期待もガスって何も見えず。

6月23日－6月24日

雨宮 鳥居 山本

甲斐駒ヶ岳と仙丈岳

北澤藤太郎を偲ぶ

北沢峠から甲斐駒ヶ岳に。次の日仙丈岳は朝寝過ごして時間切れ、小仙丈岳で引き返し。3年前甲斐駒ヶ岳に行ったとき人、人でびっくりしたが今回は、両方の山で会った登山者は20人足らず。梅雨時期の晴れ

間狙いずばり、ピーカンで高山植物も美しく山も静かで最高でした。45年前、戸台の北澤長衛宅に泊めてもらい彼の弟、北澤藤太郎と先輩戸田さんの三人で生涯最初で最後の山案内人つき登山で12月の白根三山を縦走した記憶は不鮮明だが、囲炉裏のはたに座ってぼそ、ぼそしゃべっていた北澤長衛の顔と、がっしりした体の藤太郎が金剛杖と鉈を腰にぶら下げ、出発日に現れた格好ははっきり覚えている。

6月30日－7月01日

雨宮

槍ヶ岳

梅雨の最中でも前線動きなしは好天気と決めこんで今年はすべてあたりが、今回は見事にはずれ殺生小屋手前で午後1時過ぎから雷と驟雨で散々、翌日は又霧シオンで戦意消失、上高地へ下山。白骨温泉に泊まり遊んでいました。殺生小屋客7人、温泉の旅館は客2人だけと貸切状態でしたが、殺生小屋の食事の粗末なこと宿泊¥8,500は超高。気合十分の二谷君には燕岳までの縦走計画反古にして申し訳なかったです。

7月14日－17日

雨宮 二谷

雨飾山

今年4月行った時期に比べ、雪が無く土道が膝に応え、また暑さにへばる。登り3時間下り3時間で下山後小谷温泉露天風呂が最高。

7月20日－22日

雨宮 森本 二谷 山本

赤石岳・荒川三山・千枚岳

前年の失敗に懲りて予備日を計画に入れ

る。幸い好天に恵まれ3,000m稜線を満喫。初日標高差2,000mの歩きはきつかった。

8月3日－6日

米山 雨宮 森本 山本

武田（釣りのみ参加）

パミール

シムシャールと
ミングリック・サール6,050m登頂

チャプチンゴル・パス越えと
ナンガパルバット山麓トレック
テロ勃発時

今西錦司が憧れて果たせなかった、シムシャールはあまりにも辺鄙でためらいあったが2年連続で同行したシムシャール出身のハイ・ポーター、アリ・ムサの心配ない、心配ないという言葉につられ実行となりました。

これで4年連続のパキスタン航空の機内食は最初から敬遠、イスラマバードから馴染みのKKHを走り、途中フンザで2泊。軽いトレックで体を慣らし、パスーで1泊いざシムシャールへの前夜から猛烈な下痢で完全にダウン。米山からグルミットに引き返し静養、と助言もらい1人グルミットで泊まる。ニッパのトクナガさんに電話したら明日も回復せぬならギルギットで医者に見せろと言う。ここまで来て引き返しは無い。ジープ終点からシムシャール村までの道は高度差ない川原のだらだら歩き、1日遅れの出発だったが、何とか先発隊に追いつきたく、フラフラ歩いて夕方先発隊のキャンプが見えた時はうれしかった。

翌日の休養はまことに有難く、体調ほぼ回復する。

シムシャール村からシムシャール・パスまで3泊4日かかったが、荒涼たる谷間と断崖へずりの高巻き道、ドスンと川底まで下り又登るかなりハードなコース、ここが

キャンプ場といわれて一体どこに水があるのかと思う場所でも、上部の氷河からの水が岩の間に流れていて流石に地元の連中は良く知っていると感じる。

念願のシムシャール・パスは小さな湖が二つある広い高原、放牧のヤクと羊がのんびりと草を食む別天地、周りに尖った山はなく、目標のミングリック・サール (6,050m) が目の前。峠着即米山、武田はA C (4,850m) に、当初計画から考えて随分A Cの標高が低く標高差 1,200mの獲得に懸念感ずる。9月7日好天で、米山、武田、アリ・ムサ、アジスの4名でアタック。往復9時間半でB Cに下山。

翌日は雪でB C撤去。同じ道を引き返しアルバパリアンで隊を二分。米山、武田はチャプチンゴル・パスからコクシルに。雨宮、鈴木、二谷は往路を引き返しギルギットからナンガパルバットの山麓ポーリッシュにトレックとする。

もっとも天気悪くナンガパルバットはその頂上を瞬間見せてくれただけ。下山日は雪のおまけつきで寒くて参った。

別行動の2人は積雪の 5,000m近い峠を二つ越えてのコースで心配したが9月15日ギルギットで無事合流。ほっとする間もなくテロ勃発のニュース知り、徹夜でKKHを走りイスラマバードに。当日の飛行機でパキスタンから退散と終わりの方はむちゃくちゃでした。

8月24日－9月16日

米山 雨宮 鈴木 武田 二谷

米山隊のチャプチンゴル・パス行動概要

9月 8日 雪

発 9:00 シムシャールB C－アルバパリアン 15:00

9月 9日 晴

発 7:45－スボルディン 14:45

9月10日 雪

発 8:30－マンデーカシュラール 15:10

9月11日 晴

発 8:00－ワルジン 12:30

9月12日 雪

発 8:00－チャプチンゴル・パスB C 13:00

9月13日 雪

発 9:30－コクシルサイト 15:00

9月14日 雪後雨

発 9:00－コクシル 10:00－ギルギット 18:00

銚子ヶ峰 1,811mと大日ヶ岳 1,708m

国土 白山 白鳥

石徹白 (いとしろ) の白山信仰にからむ歴史のロマンはもう昔話、辺鄙な場所だった石徹白まで自宅から車で4時間30分くらいで到着。標高 1,500mから上は紅葉しており、熊笹が風で奏でる秋の音色が楽しめました。

10月7日－8日

雨宮 鳥居 武田 山本

南木曾岳と御岳

木曾駒王での山岳会集会前後の登山で、2日とも快晴快適でした。

10月13日－14日

雨宮 鳥居 二谷

越前大日ヶ岳 1,320m

国土 越前勝山

時は紅葉真っ盛り、ハイキングコースですが、ごちゃごちゃ標識無く静かな山でした。関西から日帰り可能です。1泊帰路、朽木村から蛇谷ヶ峰はスキー場から眺めて気乗りせずやめました。リフト終点まで車で行けば往復2時間くらいでしょう。

10月27日－28日

雨宮

初雪の八ヶ岳・赤岳・横岳・硫黄岳

赤岳山荘から曇りの中出発、横岳頂上付近から雪、硫黄岳から雪と風で麦草峠への縦走取りやめ終わりは雨のおまけつきで、赤岳山荘に下山。

11月2日－4日

雨宮 米山 鳥居 森本

きのこ蟹と山 扇の山 1,320m

山本恵昭君の魅力ある計画で面白かったです。扇の山は上部雪があり頂上避難小屋は立派でした。ヤブ漕ぎのきのこ採りは最初一緒しましたがしんどかったです。夜は海岸でキャンプ、ふんだんに蟹食って温泉つき、イヤー結構でした。

11月17日－18日

雨宮 武田 塩崎 浪川 大森 山本恵

南アと中央アを眺める

鬼面山 1,889m・戸倉富士 1,681m

国土 上久堅 市野瀬

中央道飯田ICから豊岡村に入り林道終点まで。途中道間違え出発は12時30分。

尾根上に真正直に切り開かれた道はえげつない急登、頂上着14時50分。

野田平でキャンプし盛大に焚き火する。翌日も好天で戸倉富士へ。こちらはお子様OKのハイキングコース。両山とも頂上からの眺め良好。鬼面山はブナの倒木と一切標識のない静かな山でミニ南アルプスの山容でした。

11月23日－24日

雨宮 森本 松成

登山封印でスキー三昧

積雪期の山登る馬力なく、昨年と同じで12月から3月まではスキーのみ。目標はカービングスキーで疲れず滑れる両足荷重の習得。最終4月の御岳でスキーはおわり。

西チベット水平の旅

ラサから新疆ウイグルのカシュガルまでランクルで走ります。中国の両極端、聖地カイラスと今アジアで最もホットな現代の魔都上海を見て何かを感じてきます。

期間 2002年4月25日－5月11日

参加 米山 雨宮

(この項「チベット紀行」別掲載 編集注)

パキスタン シムシャール トレッキング

2001年8月24日～9月17日 トレッキング日記より

鈴木頼正 (昭33経)

8月24日(金) 853便 Osaka－Islamabad
7時10分 茨木交通にて伊丹空港に向かう。伊丹～成田
荷物、ダッフル20kgリュック8kg預ける。

ブランディ1本、梅酒700mlはポリに移し替えリュックに詰める。成田14:00－16:35北京17:45－21:05イスラマバード。入国時検査なし、酒OKで安心。夜12時20分、日

パ旅行社 2 F ルーム (ツインベッド) 二谷君と同室で就寝。

パキスタン航空機は機種がかなり古く、トイレは後方一ヶ所のみ使用可で、他は使用できない。北京で掃除、トイレも流れるようになった。スチュアーデスは後ろのトイレ前で足を延ばし、ゆうゆうと煙草をすっている。乗員コーナのカーテンからも煙草の煙が漏れ流れている。機中は禁煙、ノンアルコール。食事は鳥か牛のカレー煮込みです。まずまず食べられた。北京に着く。機内の清掃、トイレの掃除で匂いがあまりにも臭いので空港待合室に逃げた。ほとんど全員がロビーに集まっていた。空港ロビーはびっくりするほど清潔で綺麗だった。

8月25日(土) Islamabad - Pattan

8 時朝食、米山団長が代表して日パトラベル督永社長と政府観光局にトレッキングの申請に出かける。11 時、戻るとすぐに出発する。大型トヨエースにテント等装備と荷物を積み込み、我等 5 人とハイポーターのアリームサ、コックのアブラハム、ガイドのニサール、合計 8 人を乗せカラコルムハイウェイを砂煙を上げ猛スピードで走る。車窓からモロコシやキャベツ、菜っ葉の畑がつづく。やがて川の近くに差しかけると一面大規模な稲の水田が広がってきた。あまりの広さにびっくりした。

15 時昼食を済ませ、20 時パターンのホテルに着く。川べりのホテルで、音がうるさい木賃宿だ。夕食はヤキメシ、マトンカレー、野菜煮込み、チャイ、米山君のウイスキーで水割り。

8月26日(日) Pattan-Gilgit

6 時起床、6 時 30 分朝食、7 時 20 分出発。

昨年、雨宮、米山両君が宿泊した所(チラス)で昼食。鳥カレー、白飯(パキー風)、コンスープ、プリン、ミルクココア。途中後方にナンガパルバットが見える、ものすごく雄大だがぼーっとしている。写真にならない。分岐点に来る。右はガンジス川を渡り山を越えて K2 に行く道だ。15 時 30 分ギルギットに着く。16 時 30 分より町を散策する。いろいろな店があり Bazar のなかでよく流行っている食堂に入る。夕食はハンバーグ、パン、野菜、ミルクココア。

8月27日(月) Gilgit - Karimabad

5 時 30 分起床、武田君朝より下痢模様、7 時 50 分朝食、おかゆ、トースト、オムレツ。

Bazar を見に行く。10 時 40 分ホテルに帰る。コックは買い物。コック、ガイド 2 人共朝帰りらしい。ギルギットの町は Bazar が多く、たくさんの人が往来している。みんな手ぶらで女の人は 5 パーセントくらい。町には、軍隊があるらしく、軍人が多く町をぶらぶらしている。ディランが少し頭を出している。直ぐに靄がかかったようになる。買い物をしすぐフンザに向かう。途中 Rakaposhi - Peak が見えた。素晴らしい写真を撮りまくる。その場所で昼飯になった。白飯とビーンズとオクラのカレー煮込み、やがて車はレディースフィンガー眺める前のフンザ入り口に着く。15 時から 16 時迄写真をとる。

18 時 30 分夕食。ホテルにてライス、パンと鳥揚げ、野菜

8月28日(火) Karimabad - Funza

5 時起床、5 時 30 分朝食、6 時出発。フンザまで車で向かう。急な坂道をジグザグ

と登る。小さな店が並んでいる。車を降りて坂道を上り詰めると城が見える。城を越えウルトラ水河に沿って山道を登ってゆく。ガラバの連続だ。途中のキャンプ場を越え、前方左の小山を巻くと、そこは3,400mのベースキャンプだ。9時35分到着。小さな小屋があり宿泊もできる様だ。景色も抜群、緑一杯のベースキャンプだ。

Ladyfinger、Funza、右に Ultar - Sar が目の前に迫ってくるようだ。

もう米山君はアリームサと二人で4,200mのピークに向かって進んでいる。下山する時ひらりひらりとエゾシロチョウみたいな蝶々が目の前を三匹通り過ぎた。採集する気にはならなかった。二谷君が下る途中下痢の模様で、しんどそう。フンザ城に近づく。城の骨組みが逆光に照らされすばらしい、シャッターチャンス。残念だ、カメラを入れたザックはガイドが担いで車を呼びに行ってしまった。案の定ホテルに帰ると二谷君発熱、雨宮君も下痢で二人の病人は同室で寝ることになった。

8月29日(水) Karimabad-Passu

5時30分起床、7時15分出発。グルミットで下車。トレッキングの開始。村の中は急な坂道が続く。やがて小川が流れている傍の道を上ると高地の畑があり、若い女性二人とお母さんの三人が玉葱の収穫をしていた。このあたりはタイムの香りがむんむんと鼻をつく。道に迷ったのかアリームサは後ろからついてきた三人の子供に案内させた。畑の畦をくるくる回り大きな道に出た。子供らにいくらかのお金を与えて別れを告げ一軒の石室の家に着く。チャイとナム、りんごをご馳走になる。9人家族だそう。主人を案内人として二つばかり急な

堤を越えると、もうそこは一面のモレーン（堆積）だ。川原には大きな石がごろごろしている所もあり、また黒い砂地もあり時には青い氷が覗き、そこは涼しい。広い氷河を過ぎると下の遠方に湖が見えた。Barith Lake だ。湖がよく見える茶店でチャイを飲む。イギリス人の5人パーティが休んでいた。別れを告げ、急な下り坂を降りて遙か下の道に待っているワゴン車に乗ってホテルに着く。13時30分シャワーを浴びる。

アリームサと米山君と武田君と私の四人で村を散歩する事にした。インダス川迄石積みの道をぐねぐねと下り、やがてギルギット川に出る、途中アリームサは会う人毎に抱き合い、握手して挨拶している。なんとみんなに慕われ尊敬されている人。じゃが芋の収穫をしている家族二組にあった。もちろんアリームサは畑の中に入って挨拶して長い間しゃべっていた。夕食はチャパティーとスープ、マトン煮込み、じゃが芋の野菜煮込みだった。ここのじゃが芋はうまい！

雨宮君は未だかなり悪いようだ、二谷君はかなり回復してきた様だ。二人のおかゆを我々も食べた。うまかった。ガイドが明日のトヨタランドクルーザの手配ができたと言いに来た。今ここまで来た運転手がチップをくれとねばっていた。米山君が払ったようだ。

8月30日(木) Passu-Dut (Dikut) - Ziarart

5時30分起床、7時朝飯、8時出発。雨宮君とニサルを残し、ジープ2台とトヨタランクル（荷物）で出かける。急な山道を岸壁の谷間をぬって9時35分道は急に狭くなりここでジープは進めない。途中メガ

ネを落とす。ポーターが何人か来ていた。荷物は彼らに任せ、切り立った山道を進む。12時10分 Ziarat に着く。今日はここでキャンプらしい。ビスケットとチャイで昼食。5時夕食。ばらずし、赤とみどりの野菜サラダ、カレーに肉と野菜、コーヒー、瓜の漬物。5時54分、一人用テントに入る。他に炊事用、食堂用、三張り。イギリス隊も着いて、緑色のテントを炊事用・食堂用と三張りにトイレ用を設置した。トイレ用テントは強風で何度もこけた。

8時から9時35分、10時40分から12時10分の間に目がさめて寝付かれない。

8月31日(金) Ziarat-Yaze Yand-Shimshal

5時起床、6時朝飯、7時出発。シムシャール川に沿って川原を進む。小高い尾根を越えたり、川を渡ったりして10時に Yaze Yand (生暖かい温泉がわいている) に着く。川の向こうには大きな Malanguliti GL が黒く覆われた中から白い氷河を覗かせている。ここで休憩。ビスケットとチャイ。溪谷を過ぎると広い川原に出た。アリームサが遠くを指差して、向こうの小高い緑がある台地がシムシャールです、ここから約2時間半かかると言った。1時間で歩いて行ける距離だ。案の定13時40分 Shimshal に着く。

夕食はアリー家でご馳走してくれた。山羊を一匹殺し、自家製バターとヨーグルトを塗ったチャパティを出してくれた。あまり食が進まなかった。親戚の人や近所の人が大勢集まってきた。石で囲われた広場がキャンプ地だ。杏の大木が5本生えていた。時々石垣の隙間を牛が通り抜けて行く。前方はシムシャール川の広々とした川原に接している。

9月1日(土) Shimshal 滞在

7時20分起床。アリームサが水力発電のダムを見に村の後ろの山に登ろうと誘ってきた。米山君と武田君が参加した。私は少し腹の調子が良くなく、村の中をアリームサが挨拶する後ろから付いて行き、そこでアジスと出会った。皆と別れテントに戻ることにした。下痢気味なので直ぐマイシンを服用。ビオフェルミンも飲んだ。夕食はマカロニ、ラーメン、巻き寿司、ご飯、玉葱サラダ、スープ。19時30分テントで一人寝る。夜中近くでオーイと呼ぶ声で目を覚ました。コラーと叫んだがまたオーイと呼ぶ。翌朝皆があれば杏の木に止まった鳥の声と違うかといっていた。

9月2日(日) Shimshal-Putput

6時30分朝飯、7時スタート。ハイポーターのアジスは私の後ろにピッタリとくっついている。荷物(リュック)もアジスに持ってもらう。両手にストックのみで歩く。少しでもスリップでもしたりすると直ぐ体を支えてくれる。又スリップすると下に回り止めてくれる。安心だ！しばらくはシムシャール川にそって平地を歩く。やがて右側に雄大な氷河が現れ、白い雪を被った山が連なって見えて来た。シムシャール川を徒渉した。勿論ポーターに負ぶって貰った。こんどは標高 3,150m から 3,760m まで登り又下る。その連続だ。左右 800m の山をジャリをずるずる滑りながらトラバースして行く。足が疎む事も度々だ。一気に 100m ほど下り水場のテント地に着く。下りで足を少し挫いた。15時20分到着。今日は疲れた。

9月3日(月) Putput-Past Floosing-

ArbabPran

久しぶりの曇り空、5時30分起床。キジでない？この水はうまい。がぶがぶ飲む。7時出発、水が湧き出ているところから一気に上に上る。そして左にトラバースして又上に登る。下が見えないところを片足ずつ一歩一歩ずつゆっくりと岩場を進む。ときには砂地、又炭を重ねて引きしめたような石のところを過ぎると、今度は一変に急なくだりに差し掛かる。ザイル2本を張り一人ずつゆっくりと下ってゆく。下ると今度はつり橋だ。川の流れる轟々と音を立てて流れている。下を見ると怖い。一瞬立ち竦む。華やかな花や、綺麗な石、木にも花が咲いている。右岸山の高い所を3頭のヤクが我々と平行に下ってきている。13時40分3,850m、ゲイトをくぐる。そこにヤクが待っていた。途中よりヤクに乗る。右左と足取りも強く、下りも落ち着いていてゆっくりと、大きな岩もうまく歩く。前方左右に各々30kgで60kg、俺が60kg、合計120kgである。道はかなり平坦になり、すいすいと進む。ArbabPranに着く。やはり尾根の谷間で25mの岩山が聳えている。後ろの山から強い風が下の川原に通って抜けてゆく。寒い。ポーターたちは石室で食事の準備。煙が上っている。テント場で植物と向かいの山の写真を撮る。私等の夕食はコックのアブラハムが準備している。何を料理しているのか。夕食は何時かと聞くと、今何時かと聞かれ、4時10分と答えると、それでは飯は5時にできると返事をした。4時50分テントにチャイを持って夕食の準備ができたと言ってきた。

9月4日（火）ArbabPran-Shuijerab

夜中テントに雨が降ってきた。パラパラ

と音を立てて、やかてバラバラと激しく降り出した。テントに水が入らないかと心配したが、朝には小降りになり安心した。外は寒い。時折小雪がまっている。直ぐに霰になってきた。8時20分ヤクに乗って歩き始める。ヤクは美味しそうな草があると立ち止まり食べる。ふさふさしている草は本当にうまい。川の水場にくると水を飲む。牛使いはチャチャとかブロウと云って、時には棒で尻をたたき急き立てる。しばらく行くと草（高山植物）の上に綿が乗っている。よく見るとそれは雪だった。綿をちぎったように雪が残っていた。黄色の花1輪、紫の花2輪、赤の花房が2〜3輪のこっていた。川の幅もだんだん狭くなって来た。河原も狭くなって来た。雪が横殴りに降ってきた。寒い、震える。ヤクのぬくもりで尻が少し温い。やがて山羊とヤクを放牧しているところを過ぎ、木の釣り橋を3回渡りやっと到着した。震えがとまらない。12時30分。ここが4,200mだ。Shuijerabに着いた。近くに石室が並び、川向こうにも大きな石室がある。ヤク5・60頭も入れる石垣が取り囲み、中に石室が3戸ばかり見えている。前方の道は消えている。明日は後ろの左岸を一気に登ることになる。そこから上は見えない。不安だ。

9月5日（水）

朝6時起床。便秘気味で息が苦しい。夜中にテントの周りにいたヤクを集めて来た。人の声とヤクの鳴き声がうるさかった。上のテントにハイポーターたちが寝ていた。

8時35分スタート、右回りでぐるぐる山を登っていく。小石の隙間を雪解けの水がちょろちょろと流れている。すこし上ると雪がうっすらと積もり、薄い水もはっ

た。逆光の光線に光っていた。200mほど上るとなだらかな広い台地に着く。右の低いところは川が流れいくつかのうねをこえて、左右に山が突き出した広いカール状の峠だ。やがて右前方に目的のミングリックサールが見えて来た。しばらく行くと左下に水溜まりのレイクが見えて来た。そばにパキスタン隊のテントが二張り見え人が一人いる。この天気ならアタックに出かけている様子。奥に2つ3つの雪解けのレイクが現れた。その側にBCを設置する。標高4,800mだ。ACを設置に出かける。約1時間のアルバイトだ。ここが最終の水場があるところだそう。テント二張りを設置、別れを告げBCに戻る。

9月6日(木) 登頂 Mingll Sar

午前3時目がさめる。空を見ると月が出て星もはっきり見える。快晴だ。星でも撮ろうと思い、食事テントを覗くとポーター達が寝ていたのカメラを取り出せなかった。今夜はよく冷える。1時間ごとに目がさめる。3時間半しか寝ていない。午前4時アタック隊がスタートした様子。9時8分稜線直下4人が一列に並んで登っている。9時15分稜線に着く。250ミリの望遠レンズで見ると、白い雪に黒い四つの点が一列に並んで登ってゆく。10時過ぎ頂上にたどり着いた模様。午後4時頃元気で4人が戻ってきた。4時30分ウイスキーで乾杯。

米山、武田、アリームサ、アジスの4人が登頂成功。おめでとう！

9月7日(金) Shimshal-Shuijerab

今朝は朝から小雪が舞っていた。二班の登頂は中止になる。5時30分起床、7時食事、8時出発。もうヤクもポーターも集ま

っている。下の石室からやってきたのだろう。雪が舞うなか、雲も立ち込めているこれが峠かと思う長い高原をヤクに乗り、震えながらしがみついていた。コック助手二人がヤクから落馬した。痛そうだ。やがて急なくだりを下り、前に泊まった Shuijerab のアジス所有の石室で休む。5軒つながっている。ここでヤク1頭とポーターを解雇する。握手をして別れを惜しんだ。又ヤクに乗り広いカール高原を歩く。

米山君と武田君とアリームサ、アジスとコックの6人がチャプチンゴールに出かける。雨宮君、二谷君と私はギルギッドからナンガパルバットのベースキャンプヘトレッキングにでかけることにした。右岸が二又になり別の川が流れてきた。そこで橋を渡る。少し怖い。道は川の側を通る。まるで木曾福島の川のように大きな石がごろとし、又水もきれい。前方に青空が見えて来た。日がさしてきて少しは暖かくなってきた。木枯紋次郎から暖かい天気になって来た。午後3時テント場に着く。この日記をつけているとミルクティーを持ってきた。「どうぞ！」日本語がうまくなった。

9月8日(土) Shuijerab-Putput

今日は一日中歩きだ。7時40分から14時迄山をいくつも越えてゆく。20分~30分登ると又その分だけくだる。砂のあり地獄見たいな所もあり、上がったたり下ったりしてやがて里に近づいて来る。

9月9日(日) Putput-Shimushal Village-Yazeyand

5時起きる。6時出発が遅れて6時30分になる。岩登り、沢歩き、トラバースと色々な歩きを経験して、やっとシムシャール村

が見えてきた。ここでアリーの従兄弟を待たせ、道から離れ写真を撮る。彼はもっと上へ登って撮ろうと云ったがあまりの登りに断念した。シムシャル川を渡った村の入り口で昼食をとる。川原を 4 時間ばかり歩いてやっと Yazeyand (温泉) に着く。午後 4 時 30 分。疲れた。

9 月 10 日 (月) Yazeyand—Ziarart—Paragot
曇りのち雨

6 時 30 分朝飯、7 時 10 分スタート。ジアラットを過ぎやっと向こうの方にジープらしきものが見えてきた。12 時 50 分到着。JEEP2 台が迎えにきていた。ポーターのボスとガイドのニサルかポーター達に賃金を支払っている。もめている。やっと決着がつき出発。やがてカラコルムハイウェイに出る。1 台の車とすれ違うとニサルの乗ったジープが後をおっかけた。20 分して戻ってきた。日パの同僚に資金が不足して金をかりたらしい。Passu を通り抜けギルギットに向かう。車を乗り換えて 17 時 30 分ギルギットのパラゴットホテルに到着する。車を乗り換えるため、店に寄り別の車にチェンジ。日パの督永さんに連絡する。久しぶりにホテルのベッドでゆっくりできる。

9 月 11 日 (火) Gilgit—Tarashing (2,850 m)—Nanga Parbat Hotel

午前 10 時 30 分出発、川に沿ってどんどんくだって行く。まるで地震と大洪水の後、仮復旧したばかり、やっと道が使えるようになった状態だ。川原に大きな石が転がり、又川に落ちたりしている。道端の飯屋で昼飯 (作業工事の小屋)。運転手と合計 5 人。前の客が飲んだままの湯飲みにチャイを注

ごうとしたので洗ってくれと頼むと汚い指で洗う。しかしナムはうまかった。チャパティ、オニオンスライス、マトン肉入りスープだ。山道をぐんぐんと登っていく。途中小さな村の牛小屋みたいなホテルで休憩する。1 階が炊事場と雑魚寝ベッドつき食堂、2 階は客室寝室らしい。

松の木がところどころ生えて、村も緑に囲まれ、水もうまく山から取り入れている。やっと Nanga Parbat Hotel に着く。16 時。部屋は薄汚い 4 畳半のツインベッド。ケットつき、雨宮君と 2 人で。二谷君は別室で 1 人。隣の食事するところは窓にガラスもなく、床下は川が流れている。なんと寒いがらんとした部屋だ。勿論電気がないので、夜はランプあるいはローソクに頼る。夕食はドイツ人の夫婦と中学の女の子の 3 人と一緒に食べた。フォークもスプーンもなし。雨宮君は夜遅くまで彼らとだべっていた。

9 月 12 日 (水) Tarsing—Nanga Parbat B C

昨夜は雨が降ったようだ。12 時まで寝苦しく朝までうとうとしていた。ドンキイ 2 頭に荷物を積み馬 2 頭に二谷君とそれぞれ乗ることにした。雨宮君はガイドと歩き出した。大きい方の馬に乗った。足踏みは紐、手綱も紐 1 本。だいぶ慣れてきた。大きな堤防を二ヶ所越えると石の大小が入り乱れ、登ったり下ったり繰り返していると水が流れる音がしてきた。水河の切れ目が顔を出している。この村 (冬には村人は皆里に引き上げるそう。かなりの積雪があるらしい) 出身の背が 190 cm あるポーターは昨年雨宮君たちが使っていた炊事助手だ。夕食は鰯の干物と大根の生サラダ、野菜カレー、ご飯、プリン。

9月13日（木）Nanga Parbad BC

昨夜から晴れてきた。6時30分ナンガの頂上が現れた。稜線も見えて来た。だが左側と山の中腹には厚い雲がたなびいている。朝食は食パン、パンケーキ、ミルクチョコとおかゆ。10時ナンガに向かう。途中寒くなり、のどが痛いのでニサールとテントに戻る。昼食後、二谷君に風邪薬をもらう。6時30分寝る。12時に目がさめる。

9月14日（金）Nanga Parbad BC—Tarsing Hotel

昨夜から雪が降り出し、5時30分テントの屋根にかなりの雪がつもっていた。なお静々と降り続けている。ポーターの1人は馬に乗り、もう一人は馬を連れてやってきた。ホテルに向かう。だんだん積雪も少なくなってきた。ホテルに近づくと雪はすっかり消えていた。ホテルにはイギリスに留学している日本の学生二人が夏休みを過ごしていた。

9月15日（土）Tarsing Hotel—Gilgit—Islamabad

晴れの模様。5時30分起床、8時20分朝食。トースト、チャイ。7時にホテルを出発。途中駐屯隊にいたニサールの弟（軍人）がやってきた。よく似ている。そこで休憩。チャイと油揚げチャパティ 12時30分ギルギットに着く。日パの事務所に行く。アブラハムがいた。皆がレストランで昼飯と聞いて出かける。米山君が日パに連絡をとると、いまテロ事件で国際航空は全面閉鎖とのこと。直ぐ車をチャーターしてイスラマ

バードまで直行してくださいとのこと。16時間から18時間で帰ってこられるらしい。国内線は飛んでいるからカラチに行き、それからソールでもシンガポールでも回ってと考えた。ハイジャックされている。どこで。何もわからない。翌朝午前4時30分日パ旅行社に着く。運転手は、眠気を覚ますように窓を開けて、狂スピードで走るので寝るどころか寒くてぶるぶるふるえていた。

9月16日（日）Islamabad—Osaka

8時食事。パン、ミルクティー、野菜サラダ。今日のパキスタン航空はエントリーできているらしい。10時頃トヨエースに乗ってバザールに出かける。人でごったがえしていた。屋台も出ている。買う品がない。6時に食事。督永社長の家で、トレッキングの女の人と一緒にビーフなど日本の料理をばくばくと食べた。オーストラリアのビール（フォスター）を3人で飲んだ。7時空港に向かう。

空港は案外静かだ、督永社長の息子が手際よくチケットの交換、手荷物を預けたりして漸くゲイトに来た。アリームサと握手。互いに抱き合う。アブラハムとも握手。ガイドのニサールとは握手をして夏の帽子を渡した。お世話になりました。グッドバイ。

空港ロビーに着くと待合所があり、売店が2箇所、Duty-freeがあるが売店よりお粗末。10時30分発が漸く12時（日本時間午前4時）になって塔乗することかできた。成田着14時5分。成田に無事着く。国内線のJALの切符をキャンセル、全日空17時85分成田発。伊丹よりタクシーにて茨木の我が家に帰る。宏規と握手。

チベット紀行 チベット横断 6,000キロ

雨宮 宏光 (昭33経)

期 間 2002年4月25日～5月13日
参 加 米山 雨宮
ガイド 辺巴 次順 (チベット族)
運 転 手 史 万涛 (チベット族)
エージェンツ 中国職工国際旅行社総社 (北京)
環宇旅行社 (西藏)
費 用 3,760\$ 現地一切
日本～上海往復 保険等は別途

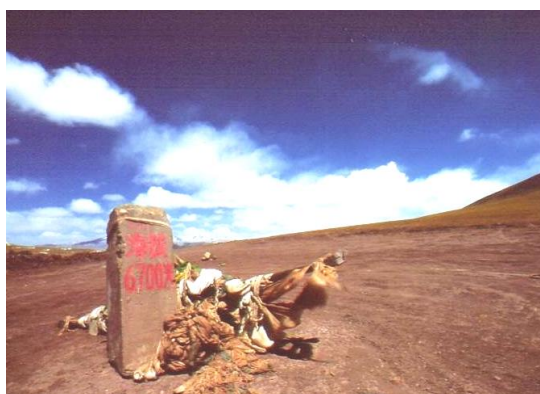
ラサから出発

2001年5月ラサから昆明迄、東チベット3,000キロをランクルで走り今年にはラサから新疆ウイグルのカシュガルまで西チベットの高原3,000キロを走る。5月26日ラサ着、即カンパラ峠4,700mに上がり下ってラサ3,750mに滞在し高所順応。当日夜少し頭痛い。翌日今回行く先のパーミット取れずやむなくラサ滞在、見学と順応を兼ねて甘丹寺4,300mに行きぶらつく。

事前のパーミットの取得は、旅券のオリジナルが必要ゆえ現地入りしてからしか申請できず、結局ラサ滞在3日目の夕方やっとパーミット取れ、夜飯食ってからシガツェに、深夜ホテル着。

翌日から車の震動に耐えながら“走っても、走っても”赤茶色の高原と砂埃の舞う悪路、どこを走っても良い広大な高原の中の道、特に5月7日ドマルからアリ「紅龍灘」の間の約7時間は高度計は5,000m以上、崑崙山脈越えの界山大坂峠での高度計は5,400m、峠にある石標には海拔6,700mと彫られていたがこれは間違いだろう。しかし

荒野アクアサイチンとチベット圏を隔てる世界最高の峠には違いない。やがて高度は下がり麻札3,785mで昼飯を食ったときは肺にずしりとくる吸い応え十分の酸素の濃さに感激する。



夕方7時、新蛮とチベットの境のアリの町に到着。15日ぶりにシャワー、ベッドで快適に眠る。アリ「紅柳灘」には軍が駐屯していて、地図見るとアクアサイチン地域はインドと中国主張の国境線が違いその為軍が駐屯しているのだろうが、こんな過酷な不毛の地域でも国の面子は大事らしい。

イエーチェン—カシュガル

—ウルムチ—上海—日本帰国

宿泊と食事

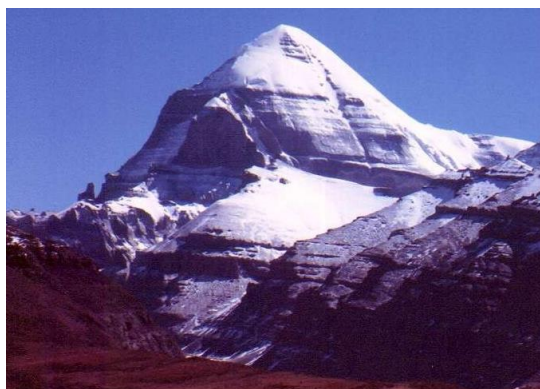
途中招待所、住宿の泊まりの値段は1泊1人320円から650円位、あたりまえだが洗面、暖房なし、青空便所は完備、シラフにもぐりこんでも年のせいか自力暖房きかずしばらく眠れない。

泊まる場所は各地にあっても2軒位で、選ぶこと出来ず相手のいうまま、カイラス麓の招待所は120元とぼったくり。「相場の4倍」だがここ1軒しかなく仕方ない。金事は4人で朝200円位でお粥だけ、昼300円でうどん「羊肉とピーマンの味噌風味付」夜贅沢して800円、炒飯とおかず3品ほど、去年と違い唐辛子、トウパンジャー除外で栄養失調からは逃れる。激辛OK、バター茶を抵抗なく飲める米山が羨ましかった。

西チベット印象

楽しみのナムナニ峰とマナスルは生憎の曇りで頂上見えなかったがカイラスはぼつちり見えた。本当に何もなくて荒野のみ、凍り付いた湖と紺青の空、強烈な紫外線、赤茶色から時に薄い緑に色が変わる高原、ヤクと羊の糞、南に見えた6,000m級の無名の山山、札達（ツアツタ）の7世紀に連立されたグゲの遺跡付近のグランド・キャニオンのような景色、貧困な住宿とチベット風うどんの食事、時間のかかる検査所でのチェック、夕方から吹く強風と砂埃、谷地坊主の湿地帯の車の轍ににじむ人の匂い、ぬ

かるみ道を無事通過した時のほっとした気分、トラックの荷台に満載の巡礼のチベット人達の垢で黒光りした顔、それとやたらと吠えるチベット犬の鳴声位です。



あとがき

帰国して同じ道を馬と自転車で行った、「チベットを馬で行く」（波辺一枝）・「チベットの白き道」（安東浩正）を再読したとき、大地と現地の人と、その生活に触れて辿った道と、単に車で走り抜けた道では、同じ道でもこれほどに印象が違うのか、二人が思考と身体が一致した旅から得た感動に比べて、もはや為しえぬ事とはいえ自分の旅には達成感が乏しく空しいのです。

徳本峠紀行

平成14年6月23～24日

廣瀬健三（昭36経）

『島々から徳本峠に行き、そこから見る穂高は最高、出来れば新緑と残雪尚多き5・6月がいいぞ』と良く親父が言っていた。森本カンロクが予てより霞沢岳登山計画を、温めておりともあれ徳本に行こう、と言う

事になった。

梅雨の時期だったが、晴天とまでは行かずともまずまずの天気。期待した峠から望む穂高連峰は、上部が2日間とも雲の中。でも、24日霞沢岳に向かったカンロクを

追いかけて、Junction Peak まで行く途中雲の合間に、穂高・明神の鋭鋒が望め素晴らしかった。峠の小屋は 1923 年に出来た由、1901 年生まれの親父が丁度早稲田の大学生だったのか、山好きであった亡父を偲ぶ事しばし。

小屋は満員で寝る時は身動きも出来ぬ状態。余程の山好きでないと此れは大変。異常というか日本の住居環境の縮図か、やや情けない気持ちに成ったが、やがて眠ってしまった。

爽やかな 若者との出会い

松本から来たという、数人の若いサラリーマンのグループは昼間から酒盛りを始めるも、そのマナー極めて良し。幾ら飲んでも静かに和気藹々と談笑。同じく松本を朝の 2:30 に歩きはじめ、峠越しに上高地に下り、その日のうちに帰宅するという 17 歳ぐ

らいの男子、引き締まった表情、まだまだ日本の若者も捨てた物でない。

島々宿から歩き始めて間もなく、単独行の若い女の子を追い越す。大きなリュックを担ぎ黙々と歩いている。峠に着くと小屋の近くに、手際良くテントを張り、翌日霞澤岳に登った模様。

逞しいおばサン達

宿泊人数、約 30 数名、内 7 割がたがおばサンか。元気そのもので、山菜採りを楽しむ人、スケッチをする人、結構楽しんで様子。毎年来ている人も居るとか、余ほどの登山愛好者なのだろう。

久しぶりの上高地もこれまた良し。帰りのバスも意外と空いていた。

短期成るも充実した山行きを楽しんだ次第。同道のカンロクに多謝。

平成 14 年 7 月記

還 暦 登 山

安 井 正 (昭 40 経)

還暦を迎えた人達を祝って酒盛りをし、翌日は山登りをして赤いベストをプレゼントするという話が、祝う側、祝われる側どちらからともなくまとまり、平成 12 年 5 月 13 日、塩崎君の大山々麓の山荘に総勢 19 名が集まったのが還暦登山の始まりだった。

昭和 15 年生れの鶴木さん、森本さん、武田さん、村上さんを主賓とし、前夜大いに盛り上がり、翌朝は大山登山。

今年は 17 年生れの伊丹君、井本君、奥山君、柏君、塩路君、水渡君、竹中君、藤原君、堀

田君、安井の 10 名が案内を受け、内 6 名が参加できた。

5 月 11 日 (土) 曇のち雨

10 時 JR 芦屋駅南に集合し、ワンボックスカーに伊丹、井本、奥山、柏、塩路、鈴木(18 年生れ)、と私の 7 名が乗り、一路蒜山高原は塩釜にある村上さんの山荘を目指す。3 時ごろ到着すると、我々が最後に既にビールの空き缶が転がっている。今年は 20 名が集った。倉吉に住む八島君(18 年生れ)が境港にて新

鮮なサザエにイカとフグの一夜干を、鈴木君は知る人ぞ知る鶴橋の焼肉用の肉とタレを仕入れてくれて焼く前から生唾が出る。村上さんの進行で当日の最長老広瀬さんより祝辞をいただき、武田さんの乾杯の音頭によりガーデンパーティが始まった。ビール、ワイン、地酒、ウィスキー等アルコールも誠に潤沢だ。飲み、食べ、談笑の内に時を経ずして私は酩酊し混濁の世界へ。

5月12日（日）曇のち晴

今日は中蒜山頂上にて赤いベストを進呈するとの事。前回は手を振ってお見送りしたが、今回は皆に迷惑を掛けようともとりあえず出発せねばなるまい。遅れを少しでも縮めようと皆より半時間早く一人で登り始めるも、三合目であっさり置いていかれた。そこからは鶴木さん、武田さん、柏君が私のペースに合わせてくれ、鶯の鳴き声と先輩方の励ましによりやっとの思いで1,122mの中蒜山頂上に辿り着いたのは皆さん方より1時間後であった由。



晴れ間がのぞき雨に洗われた上蒜山、その

むこうに連なる矢筈山、甲ヶ山の新緑は黄と青の様々な混ざり具合に濃淡がかぶさり、多彩な緑色のビロードのようで、そこを吹き抜けてきた風に清冽な水の如き爽快感を覚えつつふっと足元を見ると、片栗の可憐な薄紫色の花がそこかしこに咲いていた。兵庫県でこれが群生する所は開花時観光スポットと化して花見客でごった返すが、こんなにさりげなく咲いている片栗の花を見る事ができただけでも口から肺が飛び出すのではと思うほどしんどい思いをした甲斐があった。高価なベストをいただき、記念写真を撮ってもらってから登りにも増してヨタヨタと下山。ここ迄ペースに差ができると私はこれからも登山はむずかしい気がするが、山麓での気の置けぬ仲間との語らいが、たとえ今回のように酒と食材に贅をつくさなくとも、この上なく愉快的時間となった喜びを感じて山荘を後にした。

牧野さん、広瀬さん始め、祝ってくれた先輩、後輩の皆様、並びに一夜山荘を提供いただいた村上さんに、17年生れ一同厚く御礼申し上げます。

参加者（敬称略）

祝ってもらった人

伊丹、井本、奥山、柏、塩路、安井

計 6 名

祝ってくれた人

広瀬、牧野、鶴木、森本、武田、村上、塩崎、鈴木、八島、浪川、石原、山本、池内とその友人

計 14 名

ヒンズーラジトレッキングとルパルピーク登頂

2002年7月～8月

米山悦朗（新高昭29）

7月19日

パキスタン航空で出発。

印パ問題も収まったと判断したのかイスラマバード行きはパキスタンに戻る外交官や商社マン・パキスタン人らの家族でほぼ満席になっていた。ただグループツアーは皆無、登山者が二組乗っていただけだった。

7月20日

パキスタン観光省にブリーフィングのため出頭、いつもなら満員の待合室ががらがらであった。

今回は諸般の事情で一人旅となり、同行はガイドのナシャド、コック兼ハイポーターのフセインの二人ということになった。また予算の関係で経費節減に努め、ギルギット往復は夜行バスを使うことにした。デラックスバスと称しているがかなり古い車で席の予約が出来るのが取り柄という感じだが、結構せっかちの私には途中で一泊しないですむのが何よりであった。とは言うものの往復とも3回タイヤがパンクし、往きはそれに加えて土石流で道が塞がれ時間待ちとなりギルギットに着いたのは5時間遅れであった。

さらに日本食は一切無し、すべて現地食を建前として通した。さすがに最後の行程ではいささか食が細くなったが何とかこれでしの

ぐことが出来た次第である。メニューはチャパティとインディカ米が主食、副食はマメと野菜・ジャガイモ・たまねぎのごった煮のダル、羊の肉のカレー、ジャガイモのカレー等々で毎日これらの組み合わせであった。

ギルギットに着いてみると外国人も殆ど見ない、出会ったのはドイツから車で来てデオサイ高原に行くというドイツ人夫婦二組だけであった。

7月21日

ギルギットからカランバール溪谷に向けジープで行けるところまで行くことにし、先にセンチネルピークに登頂後下りてきたチャートルカンドを通りジープ道はマトルンダス迄行っているが、途中で橋が壊れて川を渡れずバドスワトで泊まることとなり休み中の小学校で寝ることとなった。ここでポーターを雇うこととし村の長老と交渉延々2時間、何しろ今年初めてのトレッカーと言うこともあり先方はがっちり稼ごうとするしこちらは値切るので時間がかかった次第で、結局ひとり25キロを担ぎ1日250ルピー（500円）ということになり7人を雇うことにした。

余談だがこのトレッキングは1日平均6時間・約20キロ、連続7日間で約140キロを歩いた勘定になった。

7月23日

いよいよトレック開始、カランバール谷を緩やかに遡る。この谷は女性的で傾斜は緩やかで水も豊富、緑も多く歩いていて真に快適である。ジープ道の終点であるマトゥルンダスで一泊、黄色い花の咲く花畑の中にテントを張る。全く申し訳ないがここしかテン場が無いのしょうがない。ここからカランバールピークとイミットピークが良く見える。イシュコマンの学校の先生たちが家族連れでピクニックに来ていた。

7月24日

ワルコットまでの登りで途中フセインにおぶさって渡渉すること3回、壊れかかって斜めになった橋を1回、石と木で作った幅50センチほどの栈道を通って行くというかなりハードな行程であった。先ず氷河から押し出した堆積が時間と共に緑地となったナイシンというオアシスに到着する。ここは数百年は経とうと言う没薬の原料となる香木の林から立ち昇る香り、咲き誇るハーブと花々の香りが入り混じり無人の羊飼いの小屋を点景に画を見るような光景である。ハーブもタイム・カモミール・フェネルまではかぎ分けられたがそれ以上は無理であった。

いわば旧約聖書時代の人たちが描くエデンの園そのものといった感じであるが、じつは長年溜まった羊のふんが臭いのと飛び回る蠅とあぶで全くつや消し、これに加えてダニが足元からあがってくる。まったくアダムとイブも大変であったろうと推察せざるを得ない。

その後更に足を進めワルコットに到着、ここも先のナイシンと同じような場所で花の群生の中にキャンプ、壊れかけた羊小屋がバラの茂みのなかにもありまさに植生の宿であった。

7月25日

出発してすぐチリンジに到着、先のオアシスと同じで三ヶ所美しいオアシスが続いたわけである。チリンジ峡谷とチリンジパスの氷河は話しにきくとおろスゴイ。簡単には越えられない峠である、氷河が谷のそこまで押し出している。

その後細い栈道のへつり1回、腰までの渡渉1回、この渡渉は大変なもので、氷河直下の幅約20mにザイルをフィックスしまさにチルドウオーターそのものの中を歩く。ポーターたちを全員わたすのに1時間かかった。もちろん私はフセインの背中に乗り介添えが横に二人付いての渡渉であった。その後、谷全体に広がる氷河を登る。氷河の名前はシミッチ氷河といい両側のピークから押し出す氷が一体となって出来た物で小さな起伏とクレバスの巣で、これを通常4時間かかるところを状況が良かったせいか2間で通過できた。谷の途中が全部氷河で埋まりその上がまた通常の土石の登りが続くのは初めての経験であった。

この間、意外なところに国境警備隊のチェックポイントがあり警官が2名駐在し小さなモスクまであった、ここには峠一つ越えればワハン回廊を越えてタジキスタン・キルギスタンに通じる古くからのルートで今回のアフガン騒動でかなり神経質になっている模様で

ある。記録簿を見ると何も書いていない。要するにここを通る今年の外国人は私が最初でおそらく最後と言うことである。この道はかつて仏教交流の僧侶たちが利用したルートの一つであったものの本に書いてあった。

この日は相当なハードスケジュールであり通常2ステージのところをイヤがあるポーターの尻をナシャドが叩き3ステージ12時間弱のアルバイトでシーンジまで来てしまった。

7月26日

この日は4時間のアルバイトでカランバール峠に到着、途中で高山植物の群生多く目を楽しませてくれる。特に頂上付近、カランバール湖の周辺には案内書にあるとおり野生の



カランバール峠頂上付近の池塘

オニオンの群生が多数あり、これを踏み分け歩いてゆくとほのかに玉ねぎの香りが漂い風情のあるところである。更にモルモット（とはいえ柴犬くらいの大きさはあるヒマラヤモルモットだが）の巣穴が多数あり、この後何回も毎日見張りのモルモットを見たり、彼等が発する警戒音を聞いたりすることになった。

このカランバール峠は正直言ってしまりの無い峠で、何処が頂上で何処から下るかはっきりしないが、そのなだらかな頂上にカランバール湖がある、聞くとおり美しい大きな湖である。

高度 4,200mのキャンプで午後は昼寝をする。羊を1匹1,800ルピーで購入、ポーターたちと半分こする。今回は、内臓はいらない胸部と背肉を確保せよ、とナシャドに指示し美味しいところだけ獲得した。肉は最初ちっとも美味しくないが岩の上に載せ天火で乾かすと3日目くらいから美味しくなってきた。色々教え込みスープとロースト肉を賞味することが出来た。ナシャドに聞いてみるとはっきりは言わないが、従来我々は羊を殺した際、先ず肝臓や心臓を食べさせられていたが、実は自分らが先ず美味しいところを取り、あまり食べたがらない内臓をこちらに回していたような気配である。本当なら脳みそのローストを食べたいところだったが、この際は信頼できる料理人もおらず遠慮することにした。

7月27日

チアンタール氷河に向かって峠を下る。途中ポーターたちがごね始め、食料が無い・荷が重過ぎるからこれ以上歩くのイヤだ、チアンタール氷河下で4日間も我々がチアンタールピークに登っている間待っているのはイヤだ、とごね始め2時間の交渉となり結局チアンタール氷河に入るのは1日だけ、また帰りのダルコットとイミット間の車代はこちらが負担するということで折り合った。正直なところ2泊3日でチアンタールピーク 5,200m

に登る予定であるが、幅3キロ以上のチアンタール氷河のスケールを目の前にすると現地案内人も無くナシヤドとフセインだけでは荷が重く、またごねるポーターたちを5日間も氷河の入り口で待たしては何が起こるか予測もつかないということで自信が無くなり1日だけ使って氷河の状況を見てくることにしたものである。

この日はチアンタール氷河から流れ出すヤルフン河源流の河原にキャンプする。

翌日目がさめると雨雲が低く氷河にたれこめ、タダでさえ陰鬱なこの氷河が益々重苦しく、結局チアンタール氷河は諦めこの氷河を横断しながら1時間ほどさか上り対岸に下りてダルコットBCに向かうこととした。チアンタール氷河から流れだすヤルフン河は氷河と同じく規模が大きく、これを渡るにはヤクを使って正面から渡るかチアンタール氷河の先端を横切るかしがなく、今回は先端を横切りで渡ったが、渡渉が多くそのたびにフセインに負ぶってもらうこととなった。よく氷水の中を何度も背負ってくれたものである。

結局使わなかったチアンタール用の登山装備にポーター二人も使い、無駄な出費となってしまったが諦めるしかない。

ここからダルコット峠を見上げると峠を覆う氷は下半分が灰色、上半分が真っ白ななだらかなもので、峠いっぱい広がっている。これを見上げながらダルコットBCまでのぼる。ここにはヒメヤナギランの群生が多数あり真っ赤なカーペットがそこそこに点在し快適なキャンプサイトであった。

7月29日

いよいよダルコット峠越えが始まった、入ってみると下から灰色に見えたのは氷河の上に砂礫がついておりこう見えるもので、傾斜はスキー場の初級者向きグレンドカ多少急なくらいでたいしたことはなく、これがずっと頂上まで続いている。氷河の上には河が何本も流れているが結構歩きやすい。ヤクや羊も通過すると言うので甘く見ていたが下りには至って難しくなり案内書にフィックスザイルが必要と書いてあるのも当然であった。



ダルコット峠への登り

下部の砂礫に覆われた氷と川

更に登ると白い部分に入りここは氷河の上に雪が積もっており、雪渓を歩いているようなものである。長々とあるいて頂上に向かう。合計3時間の登りであった。4,500mの頂上からはダルコットピークの全容が見える。小型のナンガパルバットと言う感じだがまだ誰も登頂したことが無いそうである。前述の通り、下りに入ると状況が悪化し急な起伏とクレバスだらけザイルを張らないとポーターが危ないと言う場面であったが、彼らは平気で直下

降してしまった。こちらはよたよたジグザグに安全なところを伝って下りてきた。この間約一時間強だがやはりザイルが欲しいところであった。

その後、急峻な痩せ尾根をジグザクに下ること3時間でロウアーダルコットに到着。ヤクが実際通っているがやはり人間が上には乗っておらずかなりの悪路であり、この峠を逆に越えるのは大変なアルバイトであろう。

今回のトレックで出会った旅人はヤクを10匹ほど連れてダルコット峠を下りてきた羊飼いの一団とチアンタール河の岸边ですれ違っただけである。

ロウアーダルコットは麦畑の中にテントを張る。お蔭で花粉症がひどくなった。この谷はカランバール谷よりも気候が一足早く、花も終わり秋が一足早くきている感じであった。ダルコット村の警官の記録簿に記帳したがこもページは白紙で私の名前が最初であった。

世界地図集成 カラコルム・ヒンズークシ版によると、この地帯は一昔前までシムシヤールと並んでかなりの秘境であったようで、シュタインがはいった以降記録が無く、1967年にドイツ山岳会ミュンヘン支部のハンス・バウアー隊がチアンタール氷河に入って日本でも評判になったという。それまでは地方政府が入り組み許可がまったく取れなかったようである。このときドイツ隊はチアンタール氷河の2/3位、プラトーまで10キロの地点に入りBCを構え、私が今回登る計画であったいわゆる展望台、チアンタール中央峰5,291mに登って写真を取りこれをアルパインジャーナルに発表し有名になったいきさつがある。

7月30日

いよいよこのトレックも終わりとなりギルギットに向かう。ランクルを改造した乗合バスをチャーターし9時間かけて到着、通常チャーターの場合7,000ルピーだがこれを相乗り客を5人乗せ、6,000ルピーとしポーターも乗せて出発、彼等をガクーチで下ろす。

ギルギットでナシャドがニッパ旅行社の大住さんと話した後にやっと笑いながら、時間があるからルパルピークに登るか、という。なんと長年目をつけて何時かはと思っていたピークでありこの提案で即乗った次第であり、これで66歳で6,000m二つ達成のチャンスが出てきた。このルパルピークはナンガパルバットのルパルフェース、即ち南西フェースのBCをはさんだ北側にある6,150mのピークで比較的容易に登れるといわれていたものである。

7月31日

いよいよナンガパルバットのベースキャンプに向かう。ジープでギルギットからタルシンへ。途中は道路の工事が盛んでアスファルトを敷いている。軍人が監督しておりおそらく印パ戦争のためであろう。知らなかったがこの道もバブサーロ峠と並んでインドのラダックに向かう古いシルクロードの一つであると言う、名ばかりのホテル・ナンガパルバットに入る。この間ドライブ6時間であった。ナシャドはこの村の出身で家族は此処に住んでおり、BCに夏村の家を持ち両親が住んでいるという。

8月1日

6時間のトレックでナンガパルバットBCに到着、ソロで南西稜シェルルートに登攀中である細田さんのベースキャンプあり。リエゾンオフィサーとなじみのコックであるイブラヒムが留守番をしていた、早速イブラヒムの手料理をご馳走になる。

このBCではナンガパルバットと羊の写真を取りまくり、フィルム10本近くを取ってしまった。



ナンガパルバット南西フェース

ルパルピーク登攀時撮影

8月2日

ルパルピークACへの荷揚げ、現地のハイポーター1人とフセイン、ポーター2人の合計5人で荷揚げする、40度前後の急勾配の牧草地とガラ場を6時間でAC到着。

この日は快晴でナンガパルバット偉容をまじかに見る。特に雲のスカートをまとった山がモルゲンロートの薄紅色に染まる数分間は見事であった。午後は昼寝。バスティー語でレラと呼ぶ小さなスマレに似た赤い花が群生する雪融け跡にキャンプ。

今回この登頂のために雇ったローカルハイポーターのカラバリは、ものすごい熊みたいなのひげモジャの大男で20キロからの荷物を持って軽がると岩の上を飛び歩いている。

4,500mのACでは高山病が心配であったがむくみなし、小便よく出る、呼吸困難認められず、軽い頭痛程度で済んでいる。

カラバリがひょいといなくなって30分ほどでマキを持ってくる。結局EPIガスは殆ど使わずにすんだ。ポーター一人は返す。

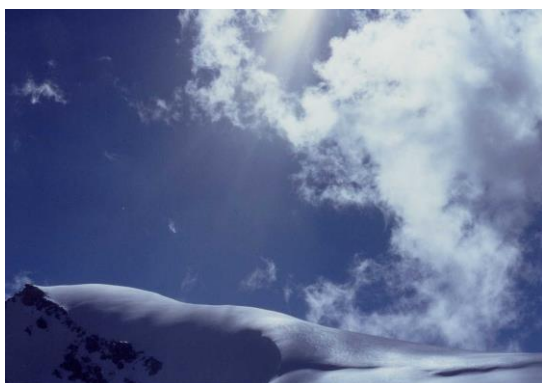
8月3日

いよいよ4人で頂上に向かって5時出発、快晴である。

最初はモレーンの堆石歩きにてこずること1時間、氷河末端の壁に取り付く。15mほどの壁が次々と続きこの間を縫って登ること1時間。かなりの難所であり、身体機能の衰えた老年としてはハイポーターに何回か尻押しと手引きを繰り返して貰いながら登り続ける。

その後は雪に覆われた氷河のゆるいのぼりとなり比較的楽になったが、歩く途中でカキーンと言うクレバスの割れる音が足元や頭上でするたびに飛び上がる。又頭上の壁にはゆるんだ岩が並び落石の危険が大きい。その後2時間で本日の最難所に到着する。

ここは45度以上の急な傾斜が約100m、その後ナイフリッジがまたも100mほど続き、この急坂はザイル無しで通れたがナイフリッジではザイルをフィックスしてもらった。その後はまた雪の登りで頂上へ。到着所要時間5時間であった、標準時間6時間と言うからまあまあであろう。



ルパルピーク頂上付近の稜線 左端が頂上
最後の緩い登りはくたびれた体に楽だった

途中時々頭がボーッと、さらに深い呼吸を続けるせいか肺の奥までざらざらになった感じで、これが肺水腫の初期症状かと映画“ヴァーティカルリミット”を思い出す。対策としてゆっくり歩き、2呼吸で1歩のペースを維持する、即ち1歩足を前に出すと1呼吸し2呼吸目の息をはくときに足を1歩前に出すペースで両方とも解決し、その後は問題なく過ごすことが出来た。



ルパルピーク頂上

頂上は去年のミングリックサールと同じで、頂上標識の上のほうまで雪庇が盛りあがっている。

下りは早い。問題のナイフリッジはザイル無しでフセインの手引きと肩捉まりで通過するが急坂は念のためフィックスザイルを使う。その後氷河5キロほどはヒドゥンクレバスに用心し4人でアンザイレで歩く。氷河の末端の下りでは朝のルートを通ることができず、カラバリが氷河の真中辺のルートを探しながら行く。かなり悪い状態が続き最後はアイスクリュウを打ってからアップザイレで15m程くだり、その後モレーンをくぐってACに到着、2時間半を所要した。ACにまた泊まるのがいやになり、いやな顔をすするポーターをなだめすかしてBCへ2時間半、かなり疲労した。

BCではナシャドの親父が羊の半身を持ってきてくれ、イブラヒムの料理で祝宴を張る。イブラヒムもずいぶんと料理が上達している。ハイポーターのカラバリは現れた時は中古のプラブーツを履いているもののアイゼンはお釈迦寸前、ピッケル・ストックなしで小生のピッケルを貸し、どうなるかと思ったがさすがルパルピーク登頂6回、ナシャドが村一番と推薦するだけのことあり氷河の状況をよく承知しており彼がいなければこんなに簡単には登頂できなかったであろう。

またもう一人のハイポーター兼コックのフセインも山登りさせれば身体能力抜群。リーダーシップにかけるので連れて行ってもらうのは無理だがステッキ代わりにはえらく役に立ち、運動能力にかける老年にとってはまた

とないサポートであった。

8月4日

最後になって雲が東から湧き出しいいよいよ天気が崩れるのかと思う。通常は南からモンスーンの雲が猛然と湧きナンガパルバットにぶつかって千切れ雲になって北にながれてゆくのがパターンである。

またもやナンガパルバットの全容が薄紅色に2・3分染まった。本当に美しい。

出発前にナンガC1建設完了、C2へのルート作り中の細田さんと無線で連絡、彼からニッパ旅行社の督永さんにご家族へのメッセージを受け取る。

5時間でタルシンに下りる。気が抜けたせいか体がだるく力が入らない。

このナンガパルバット南西側には6,000メートル級の山が三つある。ルパルピーク6,150、シギールピーク6,170、ライリーピーク5,790でこれらはAC一つか二つ出すだけで比較的短時間で登れる山であり、ガイドさえしっかり使えば中級登山家の良いターゲットになるのではないかと思う。

ナシャドは奥さんのところに返しフセインと二人で米とダル・生玉ねぎで夕飯。やはりむくみが来ていたのか手の甲がしわしわになる。

往きにはここでウイスキーを飲んでダニを活性化させ両足をひどくかまれたが、その後反省して禁酒したせいかまったく被害無し、変な理由で今回は禁酒となった。

8月5日

また晴れ、トラックを半チャーターでギルギットまで1,500ルピー、ナシャドもやる物である。

ジャグローマで5時間待ち、その後16:30発の乗合バスでイスラマバードへ向かう。

この数日間気がゆるんで、ヨーグルトや生の野菜や汚いドライフルーツや木の実をずいぶん食べたせいか、或いはこの日のジープ旅行で40度以上あつて喉が渇き水を飲みすぎたせいか、過労が胃と腸に来たのか、ついに下痢が始まり胃が差し込んできた。

8月6日

半死半生の状態でイスラマバードに到着、ニッパ旅行社に転がり込む、シャワーにビールと果物で朝食、やっと荷物から薬を出して下痢と腹痛は一応治まる。

終日ベッドでうつらうつら。どうしたことか食事でビールを1本もてあます。

8月7日

観光省でブリーフィング、それ以外は終日ぶらぶら。

8月8日

パキスタン航空で帰国。

同乗者は日本に向かうパキスタン人とアフガニスタン帰りのNGOスタッフで、半分くらいのオキュパンシーであった。

— 会員短信 —

総会・慰霊祭の出欠はがきから

名誉会員・顧問

山本三郎 名誉会員

昨春の叙勲に際し、山岳部の皆様から温かい祝意を頂き誠に有難く厚く御礼申し上げます。

甲南大学の山岳部が何とか部員確保の方策がないかと心配しているこの頃です。ご盛会のほどお祈りいたします。

平井一正 名誉会員

山岳部に若い人が入ってこない状態は全国的なものですが、これをいかに打破するか頭を悩ましています。

山岳会の発展をお祈りいたします。

渡邊和俊 大学顧問

出張のため欠席いたします。

神戸謙司 中高顧問

甲南大学山岳部・山岳会のご発展を心よりお祈り申し上げます。中高山岳部の4名も今年は高1となります。春山へも行ってみたいと思っています。この春は美方高原（兵庫県）へ行く予定です。スノーシュートレック、雪洞、イグルー等つくってみたく部員達も楽しみにしているようです。

旧制高校

関 集三 旧 10 回

75 周年記念号感銘深く読みました。自分の青春時代が浮彫りになつて再び脳裏に刻まれる思いです。編集者の柏さんに厚く御礼申し上げます。小生も来年米寿を迎えますが、多くの先輩・後輩が亡くなられて大変さびしく存じます。「山岳部の歩み」の小川さんの覚書は実に美事な文章で楽しく拝読しました。

昨年は久方振り、山岡静三郎さんが拙宅を訪問して下さいうれしく存じました。

佐野源一 旧 10 回

昨年4月以来腰痛肩痛に悩まされ、おまけに骨の検査で骨粗鬆症、それも同年輩の人の半分位しか、密度が無いとの診断でした。もう何十年も朝食に牛乳を飲みバター・チーズ・ヨーグルトを欠かさず食べているのに半信半疑です。腰痛は老化現象で治らないので上手に付き合っていくより仕方が無いそうです。一寸した坂を登ると息切れがしてしんどいので、慰霊祭は失礼します。

4/5 付 別信

前畧 13日の甲南山岳会に出席の旨返信を出していましたが、その後体調不良となり、ドクターストップとなりましたので、欠席させていただきます。申し訳ありません。末筆乍ら出席の皆さんによろしくお伝え下さい。

山岡静三郎 旧 11 回

86歳になりましたが何とか生存しております。皆様によろしく。

奥山正雄 旧 12 回

登山はやつてみませんが元気です。関係の皆様のお御努力により立派な75周年記念誌が刊行された事に敬意を表します。今后共「山嶽寮」が引続き刊行される事を期待しています。

武田六郎 旧 13 回

腰痛のため欠席させて戴きます。

赤松三郎 旧 14 回

山嶽寮75年の「共に歩いて30年」が48まででしたが、'02.11.01に徳沢ロッジから中畠新道を上下して奥又の池まで1日で行ってきました。その後ロッジの同宿8人でしたが82と75はすごいきいとい云ってくれた。私は75の方がよくぞついて来たと思います。この日の夜から稜線は冬になった。

鷺尾 顕 旧 15 回

幹事役の労を多とし深く感謝します。

甲南時代に戻り会員諸兄に会えるのが楽しみです。

慰霊祭は残念ながら体力伴わず高座の滝迄同行します。

福田泰次 旧 15 回

2月来家内の流感がうつりようやく最近元気を取りもどした近況です。

伊藤文三 旧 15 回

昨秋肺ガンの手術、今年にはいって漸く平常生活にもどりましたが(抗ガン剤その他薬の服用と2週間ごと抗ガン剤注射)こ

の年令の切ったはったはしんどいです。小林・高倉両君のため、ロックガーデンの慰霊祭に参加したいところですが、ちょっと無理のようで欠席させていただきます。

澤田 晃 旧 17 回

昨年夏、下記に移転しました。御報告が遅れ申しわけありませんがよろしく御取り計らい願います。

663-8175 西宮市甲子園五番町 2-24-504

ロイヤルマンション甲子園五番町 504号室

福井 實 旧 17 回

山岳会総会には仲々出席できませんでしたが今回 小林(大)、高倉君のレリーフの事もありロックガーデン迄行って見度いと思います。

途中リタイヤせぬように!!

皆さんによろしく

總會に古い方々出席されるのに久々にお目にかかれるのを楽しみに。

小川守正 旧 17 回

75周年記念号素晴らしい出来でした。この世に生を受けて良かったと思わせてくれました。おかげ様で入院中も毎日楽しみました。入院⇒の事情です。

⇒(昨秋、木曾集会に出かける直前、突然の腰痛で身動き出来なくなり、病院は高齢を理由に手術を止め車椅子を奨めましたが、手術(脊椎弓骨切除)を強要成功しました)レリーフ入りの前に5回くらいは3000米に登頂したいと思っております。山岳会で皆様のお元気な姿に接することと楽しみにしております。

津田昌男 旧 18 回

山岳会の案内有難とうございます。出席

したいのは山々でございますが体力が神戸までの長旅には自信がありません。体調の方は昨年より大分良くなって毎日家内のつきそいで裏山の散歩をやっています。今しばらくは生きられそうです。ご出席の皆様によろしく。

茂木光隆 旧 18 回

1 年上の小林さんと 1 年下の高倉さんの亡くなられたのは大きなショックです。私自身 3 年余の貧血症のため、だいぶ脚力がおとろえ、ロックガーデンは遠くなってしまいました。残念。目下 80 才を目標に復活に賭けています。山岳会の集いの盛会を祈ります。

岡橋節三 旧 19 回

人一倍健康維持に気を使う毎日ですが、体力の衰えはどうすることも出来ません。皆様の御自愛を祈ります。

熊谷 治 旧 19 回

ご案内ありがとうございます。

せっかくですが、体調を崩しておりますので欠席いたします。

小泉省三 旧 19 回

ロックガーデンまでは、もう動くのはしんどいのであきらめます。

伊藤長次郎 旧 21 回

毎々御案内有難度存じます。

前田金剛 旧 24 回

会のご案内を頂きながら体調不十分のため毎回欠席してをりますが今后共勝手ですが辞退させて頂きます。

伊藤五介 文修 S 24

月に 2・3 度は古巣の若会席大和館へ手伝いに行ってます。
年並の健康です。

東野 寿 理修 S 24

いつもご連絡をいただきながら放ったらかしでご無礼しました。

小生卒業（修了）以後、全く山登りとは無縁のまま過ごして来ました。いまさら申しあげるのも申し訳ありませんが名簿から抹消して下さるようお願いします。

大 学

阿部純一 S 31

六甲の山を時々歩いています。今年は春が来るのが早い様に感じます。

昨年の山本先生の会では何十年ぶりかのめずらしい方々にお目にかかれ楽しい会でした。

柳澤 正 S 32

仕事を辞めたら時間をもて余すのではと案じて居りましたが、実際にはそれ程でもなく、今迄やれなかったことをやると、日々適当に忙しく、適当に閑と謂った処です。また、月 2 度ほど京阪神奈の山などへハイキング。昨年 7 月には以前から行きたいと思っていた徳本峠へ行きました。昔ながらの徳本小屋が一番良かったとの印象です。

末筆になりましたが、いつも乍ら幹事役ご苦労さまです。感謝して居ります。

(3/19/02 記)

砂川彰雄 S 32

総会ご案内有難うございます。一度歩けるうちにロックガーデンへとは思っており

ますが今年も欠席させていただきます。

4月初めより5月上旬迄高遠で過す予定です。御出席の皆様に宜しくお伝えの程。

鈴木頼正 S33

4月12日～13日山行きの先約あり欠席致します。万一中止になれば総会には出席するつもりです。再度連絡致します。

田辺 潤 S34

昨6日7日のウィークエンドは高遠へ行っておりましたが、丁度桜が満開でした。どうした訳か今年は人出が意外に少なかったです。毎週のように高遠へかよっておりますがこれからのシーズンはガーデニングが楽しみです。 賀茶

芦田匡平 S35

先約あり失礼します。皆様に宜しく。

鳥居威男 S35

元気に毎日を過しております。

来年から自由な身になり、ボランティアなど世の中にお返ししようかと考えています。

美田靖夫 S35

心はやれども体動かず。レリーフまで行けるかも心もとなし。されどブルネイ王国最高峰の気持はいまだ持つ。

3月27日(水)アルパインツアー社の山旅説明会位には出るつもり。諸大兄に宜しくお伝え下さい。

伊丹弘忠 S35

年初よりヘルニアと前立腺肥大の手術が続き苦労しました。最近は多少元気になって来ました。

牧野 宏 S36

いつもお手数おかけいたします。お世話様になります。

廣瀬健三 S36

75周年記念号に記されている大先輩・後輩の活動の歴史、そして甲南らしいエッセイ等々楽しく拝読させて頂いています。分けても、赤松大先輩ご夫妻の山行きには常々感服致して居ります

藤安賢一 S36

天気の良い日は毎日曜祝日の度に十文字山、打越山あたりを2時間30分から3時間の道程でハイキング。大体に於いて昼までには帰り着き昼寝。夜は350ccのビール1本に制限し、体調を計りながら毎日健康な暮らしを心掛けています。総会に出席の予定です。

越田和男 S36

腰痛治らず軽い山登りもままならぬ状況。今年になって歩いたのはヤビツ峠から大山往復のみです。

甲南山岳会のHP楽しんでます。年代の異なる人達が色んなスタイルで山登り山歩き辺境の旅など楽しんで居られる様子、御同慶の至り。

気がかりは唯一現役部員が一向に増えないこと。

大関和夫 S37

この冬はスキーにがんばっています。年はとっても上達はするものだと思っています。昔登った白馬三山を眺めながらの柵池のスキー合宿はメンバーも昔ながらの山仲間です。元気な先輩に敬服しています。

二谷和成 S38

4月12日から上高地近辺散策の予定をしていますが、参加人数の関係でツアー開催中止の可能性もあります。中止になれば総会にも出席させていただきます。今年も出来るだけチャンスがあれば近場を中心に山へ行こうと思っています。

飯田 進 S38

そこそこやっておりますが在京会員もオジンになって来て少し活動がにぶって来ようです。若い方東京に出てきて下さい。

森本全彦 S39

山岳会も若い人達の時代になって来たようで、山登りも年寄りから中年若者迄色々な登り方をやっている様で大いに結構。この春4月いっぱい仕事を辞めますが一日何をして過ごそうかと。会長交代、牧野会長御苦労様でした。

福田信三 S39

毎月の芦屋のミーティングは全情報が集まっているので皆さんの御活躍を聞くのが楽しみです。

井本 洋 S40

年初の目標として、100回 山(峰)に登りたいと考え近郊のハイキング山登りに励んでいます。丹生山(515m) 雌岡山(249m) 共に往復1時間のアルバイトです。

1月は12回、2月は7回、3月は現在の処0回です・・・。

竹中統一 S40

先日3月8日、9日両日奥志賀の杉山スキースクール杉山進校長(69才)の引率で熊の湯→横手山山頂→渋峠→万座温泉(第一日目) →草津白根山山頂→草津温泉の

春山スキーツアーに参加しました。全員で五名、素晴らしい快晴に恵まれ、北アルプスから周囲の山々を一望し感激致しました。

奥山正紀 S40

家内の介護に追われる毎日です。

鵜木 洋 S40

慰霊祭のみ娘と一緒に日帰りでお向きますので山岳会総会は欠席させていただきます。

柏 敏明 S41

いつもお世話いただき有難うございます。まだまだ先と思っていた還暦の年を迎えることになりました。先輩方のご活躍を拝見していますと、これからが勝負といった感じで、長年温めてきたやりたいことを一つ一つ実現したいと思っています。

横山 洋 S42

私のことを乱人(?)になったと思われる人も多い様ですがそんな事は有りません。年とった実母が不随!それから言いたくありませんが家内がこの年にして女のノイローゼと思います。この2名の介護に洋もつかれてます。

八島弘明 S42

出張の予定が入ってしまい出席できません。残念です。

頼富信輔 S43

昨年10月にはネパールで10日程トレッキングをしてきました。正月には石鎚山で久しぶりの雪を楽しんできました。皆さまによりしくお伝え下さい。

石原浩二 S44

いつも御苦労様です。

赤田友則 S 44

当日会合（大和心のつどひ）が住吉大社であります。

皆さんによろしく。

先日マレイシア（サバ州）に行きました。キナバル山（4218m）見るだけでしたがチャンスがあれば登ってみたいと思っています。

南里章二 S 45

御世話役いつもながら御苦勞様です。現在 30 年近く続けてきた海外の旅をまとめた本を書こうとしています。どのような形で出版にこぎつけられるか、未定です。またまた会員の皆様方に御協力をお願いするかも知れませんが、その時は何卒宜しくお願いします。

北川 研 S 45

平成 14 年 1 月より栃木県宇都宮に単身赴任中です。

矢吹 操 S 45

元気です

井上知三 S 48

今年も雪見会に参加して、スキーにウイスキーに楽しいひと時を過ごさせていただきました。

幹事さん（飯田先輩）、感謝しております有難うございました。来年も是非お願い致します。

本年（秋頃）より、大森さんより事務局を引き継ぐ事になりました。会員の皆様のご協力 ご指導のほどよろしくお願い致します。

平井幹男 S 50

昨年は色々大変な年であり多忙を極めました。今年は何のの後何とか旅行業界も立ち直るべくがんばっています。

春先の学会シーズンの始まりで準備が大変、総会・慰霊祭共に申しわけありませんが欠席します。

高橋けい子 S 50

主人、母、そして今年に入り親しい友人と次々癌で亡くし、私は肝臓の治療を受ける羽目になり・・・と大変な 2 年間でした。これ以上の辛さはない！と思うと、口だけでも元気になってきます。いろいろご心配かけました。ありがとうございました。

75 周年記念号は楽しく拝読させていただきました。

大森雅宏 S 53

昨年のロックガーデンで現役池内君から誘われて始まった「おっさん岩登り講座」が諸兄のご参加を得て、沢登り・きのこ狩り・スキーハイク・雪の大山へと続いています。池内講師に感謝しつつ、今年も沢山の笑顔と筋肉痛に出会えますよう。

ここ 2・3 年牧野会長の元、事務局のお手伝いをしてまいりましたが、今度は山本（真）さんの山嶽寮編集のお手伝いに異動となりそうです。

今井啓介 S 56

正月にインスブルックにステイしてドイツのガルミッシュやキッツビューエル、インス周辺のスキー場で快適なスキーを楽しみました。又、南ドイツの人々の温かい人情にもふれ、素敵な思い出になりました。

3 月にはモンブランの麓シャモニーに行き豪快な氷河スキーを楽しみました。同地ではクライミング熱が盛んで日本との温度差を感じました。

川野幸彦 S 56

元気でやっております。4／1 付で群馬

県高崎市へ転勤となります。単身赴任なので大変そうです。昨秋の山岳会の鈴ヶ沢廻行は楽しかったです。今年もまたどこか面白い沢に皆さんと行きたいと思います。計画がありましたら声を掛けて下さい。それから大先輩の武田さんにはいつも各種イベントの折には連絡していただきありがとうございます。皆さんによりしくお伝え下さい。

八木 健 S58

いつも掲示板を羨ましく拝見しております。2月ぎっくり腰で3~4日寝込んでしまいましたが、完全復活しました。皆さんの山行にも参加させて頂きたく思っております。

橋田豊彦 H12

経絡指圧療法について勉強中であります。何分情報の少ない分野でありますので、何かよい情報があればお教え下さい。京都・滋賀の山、河にはよく行っております。またご一緒できれば幸いです。

新制高校

中井久夫 S27

1. 南大学文学部 人間科学科で主に臨床心理コースの大学院生に遊んでもらっています。早いものでもう5年つとめ、あと2年で2度目の甲南おさらばです。
2. 県こころのケア研究所長を兼務しています。15年度から「こころのケア研究研修センター」と大きくなります。被災経験県の責任みたいなものです。これは非常勤です。

米山悦朗 S29

4-5 月3週間チベット ラサから新キョ

ー カシュガル迄、7-8 月に3週間ヒンズーラジに行き、5,200 米位のピークにトライします。

北方龍一 S30

真に残念ですが当日はロータリークラブの行事及び夜は神戸ゴルフクラブの家族会があり出席できません。皆様に宜しくお伝え下さい。

幸い健康ですがゴルフの回数もへり昨年12月と今年3月にもミャンマーにてボランティアのゲストハウスを建築に行っております。

平井吉夫 S32

今年の1月14日、前日の高校同期会(七甲会)出席のついでに六甲越えで有馬に行きました。高座の滝から鉄塔直下までの急登を広瀬ポン、風吹岩から東お多福山まで、自宅の裏山から登ってきた藤安イーチャンが付き合ってくれました。イーチャンの足どりの軽さに感心しました。有馬温泉のグランドホテルは山本先生の紹介。甲南生であることの嬉しさ、楽しさ、ありがたさをつくづく感じました。来年は七甲会山岳部全員でロックガーデンから有馬に歩きませんか。

山城國暉 S36

当日所要のため欠席させていただきます。皆様のご健康を祈ります。

川村静治 S40

週末は神戸の自宅に帰っています。

住所を変更下さい。

故人となられた会員の皆様に合掌。

敬称略・順不同

— 追 悼 —

小林大二郎君の御霊に捧げる

小川 守 正 （旧 17 理）

昨年秋のある日、大二郎君の兄君である小林林之助さんから『大二郎が重体なんや、見舞つてやつてくれへんか』との電話を戴き仰天した。そのとき、私は身動きもできぬ腰痛で入院の日を待つ状態にあり、お訪ねすることができなかつた。それからしばらくして、訃報に接したときには手術直後で、丸たん棒のようにベッドに転がっていたのでお葬式にも参上できなかつた。

いま、君との思い出にふけりながら『山嶽寮』に追悼の文を綴ることになってしまった。

悲しい極みである。

君との出会いは、私達が尋常科3年の春のことだつた。昭和16・17年卒業のクラスは白亜城事件のとぼつちりで入学時山岳部への入部禁止だつたから、みな2年・3年になってからの入部だつた。

私は1年留年し、2年のときに入部していたので年齢も、山歴も君より一年上だつた。

当時君は、級長で剣道部に席をおく真面目堅物の代表のような人だつた（と思つていた）。そんな君が、私に入部を申し込んできたので、正直なところ些か驚いた。当時の山岳部は、教師や父兄の間では、左翼のならず者の巢のように思われており、頗る評判が悪かつたのである。

君は、その上、少々ひよろ長く余り山岳部向きではない外見（実際は意外に強健）だつたので『君みたいな秀才の優等生が、

何で山岳部に入るのや』と意地悪く問うたところ『俺、余り友達のできんたちや。山岳部に入つて友達を作りたいのや』とのことだつた。山の魅力や岩登りに挑戦ということではなかつた。いまにして思うのは、山岳部の一番良いところは、生涯の友人づくりなのだが、そのときは正直いつて少々戸惑つたものである。

勿論、山岳部の友達づくりは激しい山行の中で醸成される。入部3年目の南股での春山合宿のときのことだつた。一般募集の猿倉小屋スキー合宿を終えて、南股から不帰登攀のため南股小屋に移動した。パーティを二つに分け私と他二名は食料を仕入れに白馬村に下り、福井実君をリーダーとする四名は小日向山を越え尾根伝いに直接南股に入ることにした。私の隊は重荷を運んで夕方近く、小屋に入つたが、先に到着し、飯の用意をしてくれている筈の山越パーティが着いていない。いつしか天候が崩れ猛雪吹雪となつていた。

これは大変なことになつた。締めつけられるような不安な思いで、二名が救出に向い、一名が白馬村に下り第二救援隊を依頼する手筈を決め、飯を炊いて夜明けを待つことにした。

スキーツアーのつもりで山越えに向かつた福井隊は食料も一食分しか持たず、ビバークの用意など無い軽装だ。暗い予感で三人とも眠れなかつた。丁度真夜中の2時頃だつた。ヤッホーの声に、三人はライトを

振りながら小屋から転げるように飛び出した。声は小日向尾根とは反対の二股街道の方から聞える。やつと塩野良之助君をつかまえる。後方500m位のところに三人いるが、小林大二郎君が危険状態だという。やつとのことで福井隊を收容したが全員口も利けぬ疲労困憊、小林君は夢心地というところだった。

聞けば、小日向尾根をスキー降下中吹雪となり、二股の方向の急な谷に迷い込み、小林君が瀧壺に転落、リュックを切りはなし救出したが全員ずぶ濡れ、やつと二股街道に脱出したとのこと。

福井隊と小林君の生還は私の生涯の最も嬉しかった思い出である。

あの猛吹雪の中、ずぶ濡れのまま7～8時間耐えたのだから、君は体力もさることながら、相当な精神力の持ち主だった。また、亡くなられる2年前に大腿骨々折の重傷を克服し、二本杖をつきながら、いつもと変わらぬ明るい笑顔でクラス会に参加されクラスの面々を驚かしたのも今は思い出である。君はタフな山男だった。

南股のアクシデントの翌年、昭和16年4月のある日、旧制高校山岳部は終焉を迎えた。この件については『山嶽寮75周年記念号』の旧制甲南高校山岳部覚書に書いたので省略するが〔山岳部解散、剛健旅行班設立の命令、鉄砲かついで山野を行軍せよ、そんな馬鹿なことできるか、学校の方針には不服従だ。班長の松井先生は追放〕ということになった。

これは文部省の新体制指示により学校が決めたことへの公然たる反抗である。そして、大恩ある松井先生まで追い出してしまった。ときの勢いで、こうなってしまうのだがチーフリーダーだった私は、実は内心茫然自失、頭の中が真白という状態だった。

『これは俺の責任や。大学行くのやめて、本物の兵隊になつて鉄砲かつぐか』と捨て鉢な一言をはいたところ、正直な小林君はそれを真に受けたのか『そんなこと言はんといってくれ。俺、寺井のところに行つて話して来る』と一人で出かけていった。

寺井先生（英語の教授で生徒課長）はジェロニモと呼ばれ、口より手の早い甲南はじまつて以来の狂暴狂気の方である。小林君より少々（大分？）人の悪い私は、散々殴られて鼻血でもだして帰つてくるだろうと待っていたら、案に相違して『勝手にしろ』との回答を持つて帰つてきた。そして、自由勝手組織 KONAN ALPEN CLUB が生れ、剛健旅行班は流産したのだった。

寺井先生とどういうやりとりがあつたのか、君はニコニコ笑うだけで語らなかつたが、時の流れに抗し切れず天野貞佑のもとで、上意下達のパシズム新体制に移行したあの時に、あの寺井先生から『完全な自由』を獲得したのだった。これは、甲南の歴史の中で顕賞されて然るべしと、私は今も思っている。君はそういう人柄と能力の持ち主だった。

こんなことがあつて、私と小林君は単なるクラスメート、山仲間以上の深い同志的な気持でつながれることになったのだ。その君ともうあの時の思い出を語り合うこともできなくなつた。悲しい限りだ。

だが、そのうち、みんなロックガーデンに収まることになる。そのときには、松井先生にも寺井先生にも来て戴いて、楽しく懐旧談に花を咲かそうではないか。

小林大二郎に心から感謝し
ご冥福をお祈りします。

2002.6.30

故高倉達雄君を偲んで

津田昌男（旧18理）

私は旧制甲南高校理科18回、高倉君は理科19回卒業で大学は共に大阪帝国大学で私は工学部、彼は理学部でした。然し時は第二次世界戦争の最中で同じ大学でも理学部と工学部とは離れた所にあり、然も在学中に学徒動員があり、理科系の学生は勤労働員で学舎で勉強するよりも軍事工場で働かされました。私自身は最初ベヤリング工場で働いた後大阪汽車会社で働き後志願して海軍技術委託学生に合格、海軍工廠で終戦近くまで働きました。高倉君がどのような生活をしたか知りませんが彼と再会出来たのは私が東京勤務になってからです。東京甲南会、甲南山岳会、甲南旧制部会、18、19回の集いで彼と再会したのですから甲南卒業後30年以上お互いにあっていないことになります。

私と高倉君は甲南で1年違いの山岳部員でしたが、戦争の最中のことで満足な活動は出来ず、従って彼の山岳部での活躍は私の記憶ではほとんど有りませんがただいえることは

一つ、昭和15年の夏山でした。私が高1でリーダー、メンバーの独りは高倉君だったと思います。当時の天候は雨雨雨で、キャンプ地につくまで雨、然もテントを張ってから毎日雨で大の男がテントの中で体を持て余していました。さてキャンプをするときの食料は天気の日と雨天の日との組み合わせで上手な食料係は下山の日には残品がゼロになるように計算するのですが、このときは若さに、又食料係を困らす為に無茶苦茶に食べたのでキャンプの中頃に米が無くなり、じゃんけんを負けた二人が郷まで買いに行ったことがありました。キャンプとしては失敗ですが、今この事を思うと私達の青春時代の良き思い出です。高倉君が此のキャンプのメンバーの一人であったと私は記憶していますが間違っていたらお許してください。

今はなき高倉達雄君の魂の永遠の平安をお祈りいたします。

追悼 一高倉達雄氏一

朝山 崇 (旧19文)

旧制理科19回卒の高倉達雄氏が平成13年8月10日亡くなって1年になる。千葉県白井に入院したとの連絡を受けて見舞ったのが亡くなる1箇月ほど前だった。枕元に亡妻の写真が飾ってあった。晩年はテニスに熱心で黒く日焼けして元気そうだったのに、足の位置を少し動かしたら骨折したという。そんなことでと驚いた。以前に肺に1箇所ガンが出来て、鯨の軟骨を民間療法だけれど飲み続けている。X線影像で患部が全く変化拡大しないのを医者に不思議がられているとの話を聞いたことがあり、そんなあやしげな療法でええのかと反対したけれど、余り長生きしたくもないと諦念を口にしていた。というのも前途嘱望の一人息子が挙式直前に交通事故で亡くなり、さらに夫人に急病で先立たれ、淋しい自炊の日々であったせいであろうか。

彼は昭和18年卒業後、阪大理(物理)、同研究室を経て大阪市立大の屋上に掘建小屋のようなバラックを構えて太陽電波の研究をし

ていたが、その成果が高く評価されて東大理学部にスカウトされ、東京天文台勤務のあと本郷に移り、70才で名誉教授になった後も研究室に机を置いて無給の研究を続けていた。甲南時代彼も山岳部に入り、ロックガーデンで先輩に岩登りの指導を受けた。彼が東京に来てから春スキーに同道、八方尾根から唐松に足を伸ばし頂上肩のテラス下からケーブル下まで滑降したが、彼の回転技術は僅かな制動からパラレルに移る山スキー用の安定したものだった。

彼は人が死ぬ間際に臨死体験をすることがあると当時まだ周知されない頃わざわざ実例の印刷物を複写して呉れた。果たして彼は臨死体験で妻子に会えたであろうか。尋ねる術もない。今でも時々彼の気の毒な晩年を思い、先に逝った友の冥福を祈っている。

ふるいつつあんの思い出

芦田 匡平（昭35理）

京都の北山や比良山を子供の頃からうろうろし、いずれ本格的な山登りをしたく大学では山岳部に入るものと決めていた。

一年上に ” ふるいち ” という方が居た。そしてその本名が竹中さんだと知ったのは暫く経ってからのことだった。本名にはどうも馴染みが薄いので古市さんで通さして頂く。

古市さんは肉類を一切口にしない方で、キャンプの焼き飯なんかに細かく刻み混ぜられたベーコンやサラミを丹念に皿の縁に選り分けるのだ。

私は焼肉の食い過ぎで大腸癌になったなどと言われる程の肉好き。食事時には極力古市さんの隣に腰を下ろし、皿の縁に雪かきよろしく積まれた肉類を自分の皿に移していた。

部室ではとにかくアルサロの話が多かったように記憶する。そのもて具合には羨望をもって聞いていた。そして時折起こる甲高く明るい笑い声の中に ” モレがなあ・・・ ”、という台詞が入った。

モレとは何が漏れて何が起こったのか？記憶に間違いがあるとモレ氏に申し訳ないのでこのあたりにしておくが古い友達のことのようであった。

お家は輸出用の洋盆を作る工場で、その2階が古市さんのお部屋。何人かでよく遊

びに行ってはテントの中のように雑魚寝し、トイレに行くのも面倒とばかりに二階の窓から連れションをした。

古市さんの部屋には山の写真がいちめんに張られ、さながら山の中で遊んでいるようだったが、不幸な出来事の後、それらは全て剥されていた。

古市さんのお宅に通じる路地の屋台で蛸焼きというものを初めて食った。今では京都にもあるがこれが珍しく、その後も趣向の一つとなっている。

あのニッカーボッカのよく似合う岳人が、夏の這い松の香りと共に思い出される。

合掌



剣岳頂上 昭和31年度冬山

雨宮 田辺 竹中

倉藤考次君を偲ぶ

廣瀬 健三 (昭36 経)

此 追悼文を書くに際し古い山日記・時報等をひっくり返してみた。そうしていると二三心の隅に引っ掛かって居る事に気付いた。

一つは見舞ってやれなかった事、もう一つは比較的近くに住み乍ら彼の経営するレストランにゆっくりと行けなかった事(一度訪ねたような気もするが今となって定かでない)。

””まあ済んでしまった事やクラ許されよ ””

思い出を辿りながら、どれくらい山行きを共にしたのか記録などをトレースして見た。

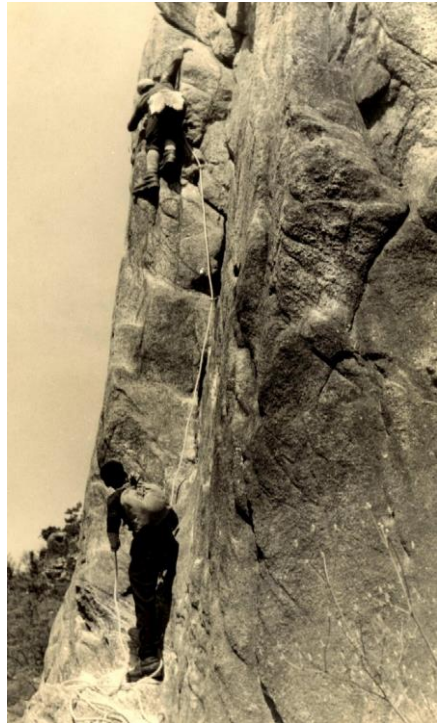
成る程5月／夏／冬／春と密度の濃い合宿を共にしてはいるが意外とザイルのパートナーには成っていない。彼が岩登りで抜群の度胸と技量を示した事は仲間の称賛を得るに充分だった。其の柔らかい身のこなしとバアランスの良さでキャッスルウォールなど事も無げに攀じていたのを思い出す(鶴木が、剣岳チンネの左稜線に行った際のトップ、クラの見事な登攀振りにかつて触れていたが)。

我々、S36年ー1961年ー卒組みが後を託した二人の大黒柱、岩のクラ、雪の大関と言われる所以成り。

それにしても竹中フルイチさんそして彼と身近な仲間の名がKACレリーフに刻まれた訳だが神の摂理に従うまでか。

過日の慰霊祭の時、奥さんが””早過ぎました””と言っておられた。この一言に御遺族の方の万感の思いが凝縮されて居るのではなからうか。

この機に彼及び亡き諸先輩諸兄／姉のご冥福を祈りたい。合掌



キャッスルウォールを攀じる 昭34年
トップ 倉藤 セカンド 大津

ク ラ さ ん

飯田 進 (昭38経)

倉藤孝次ことクラさん。身の丈五尺六寸五分、十七貫、怒り肩。その広い肩の上に長四角の顔が がっしりとのっかっている。声は野太く眼は細い。その眼は、獣に襲い掛かる野獣の眼ではない。草を食む草食獣の眼である。そのとおり性格は温厚。怒鳴り声を上げたことなどまず聞かない。そのクラさんに一度だけ怒鳴られた。

場所は秋の涸沢。集中合宿でのこと。この日一ちゃん（藤安賢一）と二人で前穂のABCフェースを登ってこいと、ピトン3本渡されて出かけた。出だしからついていなかった。とっつきまで行くのに、道を間違えインゼルを登っていった。どうもおかしい。「ここインゼルとちやいますか?」「そんなことない、これでええんや」と言われてなお登って行くと大きな岸壁の下に出た。これほんまにCフェースかいな、そう思いながら登れと言われて登りだした。傾斜はきつくものの本で読んだのとずいぶん違う。その内オーバーハングに上をふさがれた。オーバーハングに沿って斜め上に残置ピトンが並んでいた。「これやっぱり右岸稜でっせ」「そーみたいやな、ほな下りよか」と一ちゃんがおっしゃった。ピトン3本じゃ懸垂下降も出来ない。もう必死のどんずら。午後4時ふらふらになってテントに戻った。

ぼつんと一人で立っていたクラさん。

「今まで何しててん」「すんまへん、ルート

間違えて。右岸稜へとつついて、途中で引き返してきましたん。」とたんに「ど あほ が」と怒鳴られてしまった。

これには伏線もあった。前日槍から縦走してくる、コッシン（越田和男）等が日が暮れても到着しなかった。リーダーのクラさん気をもむこと。結局着いたのはもう日もとっぷり沈んだ7時過ぎ。そしてこの日、ABCフェースという簡単どころへ行かした連中が、昼を過ぎても帰ってこない、かてて加えてジャンダルムの北壁に行った大関隊もまだ戻ってこない。さすがのクラさんもいらいらが募っていたのだろう。北壁隊が戻ったのは前日に続いて7時過ぎであった。

楽しそうにジャン卓を囲むクラさん、マンガンをテンパッタクラさんの細い瞳がにっこりと微笑んでいる。なつかしいなあ。
合掌



ハツ峰を背景に 昭和34年

鵜木 伊丹弘(後列) 森本 倉藤

神前正博君を偲ぶ

柏 敏 明 (昭41 経)

神前君が一昨年(昭和40)の10月に亡くなって、もう1年半が経ってしまいました。まだ、元気な時に会ったのは、退院をしたというので井本君と小生の家内と三人でお宅にお伺いした前年の9月中旬だったと思います。白髪(ハゲ)のあごひげをはやし、目がまぶしいと室内でもサングラスを掛け、身近に酸素ボンベを置く姿は異様ではあったが、久しぶりに元気そうな神前君を見て安心したものだった。その内、彼が珍しくカメラを取りだし、皆の写真を撮り出した。奥さんの話では皆さんをこうして写真にとっているのですよとのことだった。その時は何も思わなかったが、今から思えば、別れを予感していたのかもわからない。最後に会ったのは亡くなる二週間ほど前、容態が急変したときだった。奥さんが耳元で柏さんが来てくれたよと云ってくれるが、すでに意識はなく、ただ、頑張れよと声を掛けるのみであった。

同期で幽明境を異にするのは、菅君、竹原君に続いて3人目です。私達、昭和36年に入部したものは16人と多く、テントや団体装備が足りないので、人数を減らせとばかりに、徹底的に鍛え上げられて(しごかれて)育った学年でした。世の常にあるように、しごかれればしごかれるほど私達の学年の結束は固まり、幾人かの退部者は出たものの、その大半は無事山岳部を卒

業し、今も36会と称して、年1～2回集まっては一泊旅行をし、現役時代の思い出や近況を話し合っています。(もっとも、お前達は山に登らず、温泉巡りばかりしておるのではないかとのお叱りも、遠くには聞こえてきてはおりますが。)

この5月には、先輩、後輩の方々から還暦祝い登山を企画していただき、村上先輩の別荘で一泊し、翌日、蒜山に登って、その頂上で、参加出来なかった者も含めて同期10人に、甲南山岳会のロゴの入った赤いベストをいただき、還暦を祝ってもらいました。頂上で、祝ってもらった時、思わず、菅君、竹原君、神前君の顔が浮かび、一緒に祝ってもらいたかったなと少し寂しい気持ちになりました。

神前(君をつけると何か別人のように感じる)とは、余りザイルを組んだ覚えがありません。彼がクライムよりトレッキングを好んだからかも知れません。先鋭的な登山は好まず、山を楽しみながら登るタイプでした。彼の現役時代のエピソードを思いだそうとするのですが、老化現象もあつてか、なかなか思いだせません。ただ、1年の秋山合宿で瀬沢から上高地まで石を担がされて下山した時、何で山に来てまで石を担がないかんねんと泣いていたのが思い出されます。当時の富永一郎の漫画、プ

一さんそのものといった面もあり、巧まざるユーモアや所作で私達をよく笑わせてくれ、あだ名もそのプーさんでした。今考えれば、生粋の大阪商人の息子であった彼が、その対極に近い、しんどいだけで何の儲けにもならない山岳部に何故入ったのか、不思議に思えてきます。

思いだすことが多いのは卒業してからです。彼は卒業してすぐに結婚をしたのですが、婚約中の奥さんに呼び出され、山は危険なので、もう山に登らないように言ってくれと頼まれたのも懐かしい思い出です。そのこともあったのか、結婚してからは余り、山には行かなかったようです。彼がお父さんを助けて全般を仕切り、奥さんが事務を見ていたのですが、二十四時間、いつも夫婦一緒に、仕事や家族のために頑張っていました。小生のような、仕事と家庭は別といったサラリーマン生活とは違ったタイプでした。その分、家族同士の交流を大切に、私達、同期の家族交流の中心的役割を二人が果たしてくれていました。よく神前の家に家族同伴で大勢が押しかけ、夜をふけるのも忘れて、だべりあったものです。私達の嫁さん連中がそれぞれ交流できているのも、神前夫妻のお陰と思って感謝しています。

拙宅も彼が手がけてくれました。はじめ、家というものは何年もすれば、雨漏りも不具合も沢山でてくる。その時、お互いに気まずい思いはしたくないと引き受けてくれませんでした。いよいよ契約段階になっ

て、彼にアドバイスを求めに行くと、大手の建築業者は名義料だけで何割もとる。その分、いい材木を提供してやろうと新たに工務店を紹介してくれ、築後20数年経ちますが雨漏り一つしない家を建ててくれました。

所謂、中小企業の跡取り息子として色々苦労を重ねたようです。材木屋の火事として写真入りで日経新聞に載ったこともあり、アルバムを全部燃やして山の写真が何もないと嘆いていたので、神前の写っている写真をアルバムからはがして彼に渡したこともありました。今回、彼の思い出をよみがえらそうとアルバムを繰ったのですが、彼の写真はほとんどありませんでした。

彼は天満にあった会社を寝屋川に移し、大きなビルをたて、立派な会社に育て上げました。卒業後、何故かラグビーに熱中し、息子さん二人を大学からオファーが来るほどのラグーマンに育てたあと、きっちりと会社を継がせ、娘さんも立派になられ、同期で一番先にお爺さんになったのも彼ではなかったのではないかと思います。

昨年の慰霊祭には、奥さんは今はまだつらいので、もう少し落ち着いたらお参りさせていただきますと参加されませんでした。息子さんと一緒に小さなお孫さんがブラックの慰霊碑まで一生懸命に登られていたのが印象的でした。

病を得てからも、小康状態の時は奥さん

と二人で四国巡礼をされたと聞きました。会社を大きくし、子供さんも立派に成長されて、奥さんと孫子たちに囲まれながら、これから人生を楽しむ時に早々といってしまうのは残念でなりません。蒜山の頂上で、神前よ、お前もせめてあと10年は頑張っただけよかったなと思わずにはいられませんでした。

神前よ、安らかに。
合掌



神前正博君のこと

井本 洋 （昭40 経）

平成14年5月8日付の日経新聞「交遊抄」に、名古屋大学学長の松尾稔氏が、氏が京都大学で山岳部に入部され、今西錦司先生にリーダーの条件として、人柄、先見性と、常に責任をとる覚悟の三つを叩き込まれたと有りました。神前のことを思う時、決して高潔ではなかったが、人柄と先見性というのを抜きに語れない。そして、私が神前を語る時、①よく似た境遇 ②無言の教訓 ③いつも一歩先を行っていた の三つのことを中心に神前の人柄と先見性について書きたいと思います。

① よく似た境遇

学生時代、神前は阪急岡本駅から梅田へ、私は三宮へと全く方向が別で、あまり遊ぶ

ことはなかったが、卒業後付き合うことが多くなったと思う。それは比較のお互いの境遇が似ていたからであろう。業種こそ違え、神前は材木問屋の跡取り息子、私は金属加工業（刃物製造業）を営む家に生まれ育った。多分子供の頃から回りに奉公人、或いは従業員に囲まれ、ちやほやされてボンボン、ボンボンと云われ育ち、多少同級生より小遣錢も多く、ガキ大将だったのではないかと想像する。

神前が学生時代、トラック一杯に父上の会社の材木を盗み出し、転売しようとして見つかったように、私も小学生の頃、会社のスクラップを盗み、転売しそのお金で近所の子供たちに菓子を買ってやったことがあった。お互いに非常に良く似たDNAを

持っていたのである。

年齢を重ね、神前は神前木材株式会社、私は株式会社イモトの社長という立場で家業を継ぐことになるが、動物的「勘」というか決して損をすることに近づかない。そして先ほどの人柄ということになると思うが、「敵」を作らない。ある面では自由奔放に振舞いながら憎めない。そんなところをたくさん持っていた。私もそうありたいと思っていたが、私の場合はどうだろう。

② 無言の教訓

神前が私に直接言ったわけでもないし、私も神前に言ったこともないことがひとつある。

それは金銭の貸借である。私は今、バブル崩壊後、主要な得意先二社を始め、数社の得意先が倒産し、大量の不良債権が発生し、お金に苦労しています。神前がバブル期どう過ごしたか詳しくは知らないが、お互いに信用を供与する愚を決して犯さない。万一のことがあったら一宿一飯の面倒はみる。そんなことをいつも発信していたように思えて仕方がない。私の周りには個人保証をして辛い目にあっている人がいるが、神前は彼の動物的「勘」で、井本の会社が苦しいと漠然と同じ、井本が金を借りに来るとは思っていなかったと考えるが、私も動物的「勘」で神前がそんな不安を感じているのかなと思ったりもした。神前は、後を継いだ子供たちにも、友人同士の金銭の貸借や個人保証をしないことを伝えたり、教えていることと確信するが私も息子にはちゃんと伝えたい教訓である。

③ いつも一歩先を行っていた。

これは単に私との比較で、世間にはもっと先を行っていた人が沢山いるだろうとは思うが。

遊ぶことも、結婚も、事業のことも私の先を行っていた。そして死ぬことまで。ゴルフを始め、良い遊びも悪い遊びも神前は良く私を教育してくれた。特にゴルフは良い鴨にされた。ゴルフを始めてからニギリに負けて帽子、ポロシャツ、ズボンを何本プレゼントしたことか。やっとスクラッチで勝負できるところまで来るとゴルフを止めてしまったが…。

結婚も、子供を作ることも素早く、神前の奥さんは今でこそ年齢相応にしわもあり、老けてしまったが、二人を美女と野獣と思ったのは私だけではあるまい。

事業の方ではメイン事業である木材事業の方は長男に、新規事業のリフォームの方は次男にとそれぞれ独立しながら協力する、競争する体制をしき等羨ましい限りである。商売に必要なこと、商人道は十分子供たちに伝達済みでこれも羨ましい限りである。あんなに大きくて堅牢そうな体つきをしていた神前が、商売の上では十分夢を果たさぬまま、こんなに早く逝ってしまうとは残念でなりません。

でも、神前よ安心しろ。お前の蒔いた種が立派に神前木材株式会社と、お前の一族の発展に努力をしているよ。

ご冥福を祈ります。

井本会員から本稿に添えて故神前会員奥様の看護記録の送付がありました。山嶽寮誌上にはご紹介できませんでしたが、追悼文と併せ改めて小冊子を作成し同期の方々にご紹介する予定です。

編集

神前正博君の思い出

奥山正紀（昭40法）

平成12年10月6日 プーさんこと神前正博君が亡くなった。その年の6月に突然プー夫婦と伊丹が、家内の病氣見舞に我家に来てくれたのだが、その時は酸素ボンベを携帯し、吸引していながらも元気な様子で、いつもと変わらん馬鹿話に花が咲き、帰り際には「身体に気をつけて36年入部組全員で還暦を迎えるようにガンバロー」と言い、プーの口癖である「近々全員で『すき焼』をやろう」と言って帰ったのに、余りにも早すぎる。

伊丹から、プーが入院していると9月上旬に連絡を貰いながら、家内の病氣の為になかなか家を空ける事が出来ず、9月の終りに見舞に行った時には、奥さんが「オックンが来てくれたよ」と声を掛けてくれたが、意識は無く、この時がプーとの最後の別れとなってしまう、誠に残念な気持ちであります。

柏から山嶽寮発行に当り、プーの思い出を書くように言われたが、昭和36年山岳部に入部以来、学生時代のプーとの思い出は楽しい事ばかりで、思えば色々ありすぎて何をどのように書けば良いのかと迷うばかりです。まず始めに神前のニックネームが、何で突拍子もないプーになったのか、多分、名付け親は鶴木さんか、武田の雄さんのどちらかと思いますが、神前のする事、言う事が、当時流行っていた富永一郎の漫画の主人公プーさんとそっくりで、それが由来です。最初は天満のプーと呼ばれていたように思いますが、い

つの頃からか天満が取れて、プーになっていたようです。

プーとの思い出

① 私は1回生の秋山合宿で身体をこわし、プーとの一緒にの山行は、ほとんどありませんが、2回生の時の自由山行で、二人で小豆島親指岳3泊4日の「岩登り」の計画を立て、山行した事がありました。形式的に登攀用具を持っていきましたが、最初から岩登りをする気はまったくなく、同期の間で流行っていた美女裸体舞踊を、高松で見物するのが主目的でした。海岸にテントを張り、日中は海水浴と昼寝。夜になると「栄螺（さざえ）」を獲り、むさぼり喰らう生活をして、ザイルは1回も使用せず。予定を1日繰り上げて高松へ移動。ところが、フェリーが動き始めた時に、プーがフェリーの切符売り場でお金を落とした事に気付き、二人の所持金は、なんとか大阪へたどりつけるだけになりましたが、目的が美女裸体舞踊見物でしたので、高松に到着するとすぐに宇野までの切符を購入し、連絡用に十円玉五枚を残し、国鉄高松駅前の木賃宿に素泊りで泊り、夕食は立食いの讃岐うどんを食べ、当初の目的であった美女裸体舞踊だけは満喫しました。翌朝、宇野に到着するまでお腹がグーグーなっていました。岡山の鶴木さんに連絡をし、宇野

まで迎えに来てもらい、倉敷、岡山をドライブし、鶴木さん宅で一泊、翌朝、昼食用の弁当と大阪までの切符を買ってもらい、普通電車で大阪にようやく到着した時、「オクン、すまん。ズボンの尻ポケットにお金が入っていた」と、まるで漫画の様な事もありましたが、今では楽しい思い出となって、私の心の中に残っております。

- ② あれから、40年程が過ぎ、プーのご両親、それに主人公のプーも他界し、時効になったので、もう一つの忘れられない思い出を書きます。私が2回生の7月に運転免許証を取った9月上旬のある日、突然、プーに「オクン、2屯積みのトラック運転できるか。今晚家に来い。」と誘われ、妹達が勉強部屋にしていた神前宅近くのマンションの一室で、何をすることもなくテレビを見て時間を過ごしていると12時過ぎになり、「オクン、出発や、今からは声と音を出すな」と注意され、ついた所が神前材木店の倉庫の前。ガレージのシャッターを音のしないように持ち上げ、暗闇の中で、倉庫内の材木を手当たり次第、2屯トラックに積み、エンジンを掛ければ両親にバレるので、50メートル程離れた所まで二人で汗だくになって押し、ようやくの思いでエンジンを掛け、プーの案内で西区か住之江区の闇市まで売りに行った事がありました。売却代金は一万円位あったのでしょうか。意気揚々と帰って来たら、ガレージの前に

人影が二つ。ご両親が立っておられ、ご両親の説教を二人で一時間位、その後、私は放免されたが、プーへの説教は延々と続いていました。放免された後、お母さんに出していただいた「カルピス」の味が、今でも忘れられないでノドに感触が残っています。親父さんは材木を売った金を二人から取り上げる事はありませんでした。当時大阪在住の山岳部員がよく通った阪急東通り商店街にあったスタンドバー「レインボー」に二人で7～8回位行けた程の値打ちのある一万円でした。ご両親には申し訳なさ、感謝の気持で一杯です。只、今考えると、2屯車に一杯積んだ材木の正価はどの位の値段だったのでしょうか。善悪は棚に上げて少し気になる次第です。

取りとめもない事を、神前君の思い出として書きましたが、プーは本当に純粋で、良い男でした。社会に出てからは、家族の為、会社の為、地域の発展の為に色々な役職に付き、誠心誠意、頑張ってきておりました。プーさん、まだまだやり残したことがあり心残りでしょうが、後は、立派な子供達が奥様を大切に、プーさんがやり残した事をやりとげてくれると思いますので、心安らかに眠ってください。それと、36年組も何年もしないうちに、そちらに行きますので行った時には暖かく迎えて下さい。

合掌

— 報 告 —

定 時 総 会

山 本 真 博

平成13年度

日 時 平成13年4月21日(土)

場 所 甲南大学 7号館

出 席 者

渡邊和俊	大学顧問		
奥山正雄	旧12文	国府雄治郎	旧12理
伊藤文三	旧15文	鷲尾 顕	旧15文
阿部純一	31 経	小原耕治	31 経
柳澤 正	32 経	宮本 侑	32 経
雨宮宏光	33 経	鈴木頼正	33 経
田辺 潤	34 経	伊丹弘忠	35 経
越田和男	36 理	廣瀬健三	36 経
牧野 宏	36 経	二谷和成	38 経
武田雄三	39 経	村上與利一	39 営
鷯木 洋	40 文	安井 正	40 経
伊丹徳行	40 法	柏 敏明	41 経
塩崎将美	41 経	浪川純吉	42 営
国分廣昭	43 経	南里章二	45 理
井上知三	48 文	山本真博	48 理
大森雅宏	53 文	八木 健	58 経
西名俊英	61 理	田中一也	63 経
大野彰夫	H9 経	池内友宏	(現役)

議 事 武田副会長の司会により開会
物故者への黙祷
牧野会長より挨拶

1「山嶽寮」創部75周年記念号の件

越田副会長、柏会員を編集委員として、事務局が協力して編集にあたっているとの説明が、会長よりあり。

柏編集委員より編集方針、予算約150万円、発行部数400部。平成13年度の「山嶽寮」を記念号で替えるとの説明があり。

村上副会長より、1口1万円で最低3口の募金をお願いしたいとの提案有り、承認される。が、繰越金の有効活用、臨時会費の徴収との意見があった。

(2) 新入部員募集に関して

記念号のための、平成卒業の若手OBの座談会の報告が、武田副会長よりあり、その中で以下のイ、ロに就いて強い意見があった。

イ エキスペディション検討委員会の件

武田副会長より、目標、内容等まだ漠然としているが、会の活性化のため、分科会として、広く会員を募って活動したいとの提案があり、承認される。

ロ クライミングウォール設置の件

雨宮会員より、山岳会75周年記念モニュメント・在校生へスポーツのステージの提供・新入部員の勧誘等の目的のため、大学に設置してはとの提案あり

大学側も、運動部・文化部の沈滞ムードの中で、学生へのスポーツの強化として採用出来るならば、9月に予算を計上してもよいとの返事あり。ただ山岳会も協力が必要との事。

ウォールは競技基準の最低とし、幅4m、高さ12m。予算は約1500万円から2000万円。

学校側から回答があり次第、1口1万円の募金をお願いしたいとの提案が、村上副委員長よりあり、承認される。

一経過一 後に大学と協議のところ、岡本校舎への設置は認められず継続折衝となる。(編集注)

平成14年度

日 時 平成14年4月13日(土)

場 所 平生記念セミナーハウス

出 席 者

国府雄治郎	旧12理	赤松二郎	旧14理
鷲尾 顕	旧15文	小川守正	旧17理
福井 實	旧17理	阿部純一	31 経
小原耕治	31 経	柳澤 正	32 経
宮本 侑	32 経	雨宮宏光	33 経
鈴木頼正	33 経	伊丹弘忠	35 経
鳥居威男	35 経	美田靖夫	35 経
越田和男	36 理	廣瀬健三	36 経
藤安賢一	36 経	牧野 宏	36 経
二谷和成	38 経	武田雄三	39 経
福田信三	39 理	村上與利一	39 営
井本 洋	40 理	安井 正	40 経
伊丹徳行	40 法	柏 敏明	41 経
塩崎将美	41 経	浪川純吉	42 営

国分廣昭	43 経	石原浩二	44 理
南里章二	45 理	井上知三	48 文
山本真博	48 理	松下哲夫	52 理
大森雅宏	53 文	住友健時	55 法
八木 健	58 経	田中一也	63 経
池内友宏	(現役)		

議 事 福田(信) 会員の司会により開会
物故者への黙祷
牧野会長より挨拶

1 事業報告

- ・ 「山嶽寮」創部 75 周年記念号
 - ・ 慰 霊 祭
 - ・ 木曾福島集会
 - ・ 大学新人募集
 - ・ ホームページ
- について各担当より報告があった。

2 役員改選

会 長	武 田 雄 三	(昭39経)
副 会 長	大 関 和 夫	(昭37経)
	村 上 利 一	(昭39當)
	安 井 正	(昭40経)
事 務 局 計	井 上 知 三	(昭48文)
会 山嶽寮編集	本 本 真 雅	(昭56理)
現 役 指 導	森 木 宏 健	(昭53文)
ホームページ	大 八 田 中 崎 一 将	(昭58理)
	塩 崎 将 美	(昭63経)
		(昭41経)

3 事業計画

- ・ 慰 霊 祭
 - ・ 山嶽寮発行
 - ・ 木曾福島集会
- を実施する事とした。

会 計 報 告

慰 霊 祭

於 ロックガーデン

平成13年度

日 時 平成13年4月22日(日)

銘板取付 故竹中寛氏 故神前正博氏

参加者

鷲尾 顕	伊藤文三	小川守正
小原耕治	雨宮宏光	田辺 潤
伊丹弘忠	美田靖夫	越田和男
廣瀬健三	牧野 宏	二谷和成
村上與利一	森本全彦	奥山正紀
鵜木 洋	伊丹徳行	柏 敏明
国分廣昭	南里章二	大森雅宏
池内友宏		
竹中様ご遺族	神前様ご遺族	
本田依子様	石原 存様	

平成14年度

日 時 平成14年4月13日(土)

銘板取付 故小林大二郎氏 故高倉達雄氏

故倉藤孝次氏

参加者

鷲尾 顕	福井 實	雨宮宏光
越田和男	廣瀬健三	牧野 宏
二谷和成	福田信三	武田雄三
村上與利一	森本全彦	井本 洋
鵜木 洋	伊丹徳行	柏 敏明
塩崎将美	浪川純吉	国分廣昭
石原浩二	南里章二	大森雅宏
池内友宏		
倉藤緋登美様	本田依子様	他



レリーフ前にて

平成14年4月

秋の集会 木曾福島

平成12年10月7日(土)～8日(日) 従来の乗鞍高原から場所を変更し、木曾福島駅に近い木曾駒文化公園施設「駒王」にて開催された。集合まで駅前の豆腐料理を楽しむものあり、付近の散策を楽しむものあり、木曾駒が岳を楽しんでから参加のものあり、夜のふけるのを忘れ旧交を暖めた。

記念写真 (参加者紹介に代えて)



山本真博 井上知三 大森雅宏
越田和男 阿部純一 塩崎将美 飯田進 北方龍一 大関和夫 平井吉夫 雨宮宏光 二谷和成
小原耕治 米山悦朗 鈴木頼正 福田泰次 小川守正 柳澤 正 砂川博雄
武田雄三 廣瀬健三 宮本 侑 田辺 潤 村上與利一 牧野 宏

平成13年10月13日(土)～14日(日) 山本三郎先生ご夫妻をお迎えし、12年度に引続き木曾福島「駒王」にて開催。御嶽山鈴が沢沢登りを終えての参加者もあり、賑やかな集会となった。



村上 柏(敏) 越田 大関 雨宮 鳥居 平井(吉) 奥山 川野 山本(恵) 松山 浪川 塩崎 山本(真)
米山 福田 大森 森本 池内 山本先生奥様 牧野 伊丹(徳) 二谷 武田
砂川 小原 柳澤 山本三郎先生 阿部(純) 鈴木 田辺

書

評

75 周年記念号の書評をご紹介します

日本山岳会 「山」 683 号 2002. 4. 20

図書紹介 甲南山岳部・山岳会・編
「山嶽寮」 甲南山岳部創立 75 周年記念号

甲南山岳部が部報の創刊号で高らかに「アルピニズム」を宣言し、近代登山を歩み始めたのは関西の学校山岳部では早いほうであった。

今回の記念号は「甲南山岳部の山と人」を主題に、その 75 年の足跡を回顧したものである。編者によると、今回の記念号では部史的な編纂は避け、山仲間が炉辺で共通の話題を語り合うような、アットホームな雰囲気を出したかったと述べている。

本号前半の「山岳部の歩み」の章では、旧制高校、大学、新制高校の各山岳部の動静、行事、山行、遠征など、その時代の重要な項目が抽出され、再録も含めて綴られている。

これと、今回新たに作成された詳細な「年表」と「部会報類の総目録」を参考にすれば、甲南山岳部（会）の足跡の全貌がほぼ理解できるようになっている。

さらに 21 世紀の山岳部というテーマを加えているが、これは若手会員による座談会で、今後における山岳部のあり方について展望を行なったものである。

後半の「山嶽寮」の章では副題の炉辺譚が示すように、形式にとらわれることなく、山岳部（会）75 年の歩みの中で、それぞれの時代の部（会）生活を送った者が、山や人との交流の思い出やエピソードを気ままに綴ったものである。

平井吉夫氏の特別寄稿「クリスティアン・フッパーと甲南山岳部」は関心と呼ぶ興味ある読み物となっている。これは単独行の登山家、加藤文太郎が最後の山行のとき、たまたま檜平小屋に合宿していたのが甲南山岳部員であったこと、そしてこの加藤文太郎をモデルにした新田次郎の小説「孤高の人」に登場するドイツ人パーティーがフッパー氏一行であったことで、当時ドイツ語教師として甲南高校へ赴任していたフッパー氏を、関連資料を

取り入れながら追跡調査したものである。

「甲南山岳部の山と人」をテーマにした今回の記念号は、草創期の伊藤（愿）、香月、田口兄弟といった異色の先輩の播いた自由闊達な雰囲気を今も伝えている。

（松家 晋）

2001 年 10 月 甲南山岳会発行 373 ページ 非売品

岳 人 2002 年 1 月号

甲南山岳部・山岳会
「山嶽寮」75 周年記念号 B5 版 374 ページ

日本の近代登山の黎明期に、代表的な岩場などに 24 ものバリエーションルート初登攀記録を持つ甲南山岳部の 75 周年記念号。

伝統あるこの部も、親から子、そして孫の三世代に相当する四分の三世紀にわたり連綿とした歴史が刻まれてきた。

本書は既刊の部・会報から、記録・報告以外のものの再録を中心にまとめている。原文を生かして旧かな遣い、旧漢字のままであるのも、内容とともに当時を偲ばせている。

編集方針として山を介した人との交流に重点が置かれているというだけに、各時代の人間模様、世相や青春の息吹きが活写されている。

特別寄稿は「クリスティアン・フッパーと甲南山岳部」という読み物。フッパー氏は甲南高校で教鞭をとったドイツ語の先生で屏風岩登攀など行った登山家でもあった。フッパー氏と甲南パーティーとの山での交流、加藤文太郎の最後の姿を見た記述など興味深い内容。

大正 12 年発足からの年表と部・会報の総目録も収めている。

— ホームページから —

甲南山岳部ホームページは山行報告・アルバム・掲示板など、盛りだくさんな内容です
今回はその中から

南里会員の 29 年 191 カ国歴訪を振り返る 「垂直と水平の旅人」

飯田会員の 日本とちょっと違うなあ、の 「パキスタン余話」

神戸先生の 2001 年 甲南中学山岳部 「夏山合宿報告」

現役池内君他の 大台ヶ原東の川 「中の滝登攀記」

森本会員他の 御 嶽 山 「鈴が沢沢登り」 をご紹介します

<http://homepage2.nifty.com/konan-alpin/>

へのアクセスをお待ちしています

垂直と水平の旅人

全世界 191 カ国、29 年の旅路を振り返って

南 里 章 二 （昭 45 理）

甲南山岳会の皆様方におかれましては益々御健勝のこととお慶び申し上げます。さて私、今夏〔2001 年夏：編集注〕をもって全世界 191 カ国（独立国）すべての旅を完成することが出来ましたことを改めてご報告させていただきます。1973 年夏、まだ 1 ドルが 360 円の時代最後の年に初めてヨーロッパ諸国を訪れて以来、2001 年の今夏、191 カ国目にあたる西アフリカの島国カーボ・ベルデにたどり着くまで、足掛け 29 年の長い旅路でした。

日本外務省によれば 2001 年現在、全世界独立国は 190 カ国、アメリカ外務省情報局は 191 カ国と数えています。現時点での国連加盟国は 189 カ国、国連非加盟国はスイスとバチカン市国です。おそらく日本外務省は 189 カ国にスイス 1 国のみを加えて 190 カ国としてい

るのでしょう。私としましてはバチカン市国も数回訪れているので、アメリカ外務省の見解に準拠して 191 カ国としたいところです。

海外への旅を始めた頃は行く先々の国々の生活、文化、歴史が面白くてたまらず、気が付けば 29 年のうち前半の 15 年で、ほぼ全世界にわたって訪れた国の数は、あっという間に 100 カ国を超えていました。が、この時点ではまだ全世界すべての国を旅するなどとは大それたことだと思い、それが実現できるなどとは考えてもみませんでした。しかしこの頃から幼い頃に植え付けられたリピーダーがむくむくと頭をもたげてくるのを感じ始めました。というのは親父が貿易商を営んでいたので、ガーナやコスタリカといった当時としては珍しい国々の切手をよく持ち帰ってくれ、

母親がそれを国別に整理してくれたことに始まります。私はその切手帳と地図を絵本がわりにして幼年時代を過ごしたので、小中学校で外国の国名や首都名を覚えるのに何の苦もありませんでした。時代が進むにつれて独立国の数も次第に増えていくことになりますが、脳裏にインプットされていた全世界の国名リストからはすでに訪れたところを数えるよりも、まだ訪れていない国々の名ばかりが何か脅迫観念のように繰返し登場するようになっていました。行き残した国ほどアプローチはどんどん難しくなっていくものですが、29年の後半の14年間はそのリピドーに導かれるかのように、次々とそれらの国々に足を延ばして、今年の夏についに満願成就したわけです。

「南里先生の旅はいわゆる旅行ではなくて冒険ですね」とは先日ゲスト出演させていただいた毎日放送（ラジオ）番組のホスト月亭八方さんに開口一番言われたことでしたが、私自身あまり冒険などという仰々しい表現を好まないし、それをあまり意識したこともなかったのですが結果的にそうってしまったようです。この「冒険」という側面において、もう一つ諸外国を旅する原動力になったものがありました。甲南中学高校時代から始めた山岳部活動から学んだ経験と知恵です。

私が行ってきましたヒマラヤ登山やキリマンジャロ、ルウエンゾリなどの赤道直下の山々の登山にそれが生かされてきたことはいまでもありませんが、特に都会を離れて広大な自然と接する機会の多いアフリカ諸国、インド北部、中国西部、南米アマゾン

地域などを廻るときには、アウトドアライフを何ら肩を張ることなく、いかに自然に行えるかという能力が要求されます。



サハラ砂漠、北の地平線いっぱいにはひろがる砂嵐

例えばサハラ砂漠をキャラバン・コンボイのトラックで縦横断するときには持参の水や食糧の管理を完璧に行わねばなりません。また砂漠のど真ん中のオアシスで次はいつやってくるかわからないトラックを待つときなどには、吹雪の中のテントで数日過ごす要領で、慌てても仕方ない、気長に待とうといった柔軟な精神的コントロールが必要とされます。また山を登るときには考えられる限りの危険を想定してそれを回避するためにあらゆる手を打っていかねばならないし、危険に直面したときには全神経を集中して対応しなければならないことも当然ですが、危険がつきものである海外の旅でも方法論的には全く同じです。

そして危険や困難を何とかクリアーして旅を無事に終えた時には、登山を終えて無事下山したときの喜び、感動、達成感などと全く同じものを感じます。



マリ共和国北部、トンブクトゥー・タウデニ間を往復するアザライ（ラクダの隊商）

こうして今までの全世界 191 カ国の旅を振り返ってみると、登山で鍛えられた経験と知恵と体力があつてこそ、はじめて出来たことだという想いがより一層深まってきます。今

更ながら山の世界で私を導いて下さった甲南山岳会の諸先輩方、さまざまなかたちで助けていただいた同輩、後輩の皆様方に心より感謝させていただきたく思います。

それともう一つ、これから全世界を舞台にはばたきたいと考えている若い人達にはまず、登山活動をお薦めしたいことはもちろんですが、海外となると金と時間の問題が大きく迫ってきます。しかし「誰に何と言われようが、絶対に行つて帰つてきてやる」という強い意志さえあれば「金と時間」はあとから自然についてくるものだということを付け加えておきたいと思います。

パキスタン余話

飯田 進（昭38 経）

パキスタンの北部はヒマラヤ、カラコルム、ヒンズークシと、三つの巨大な山塊の中にあります。この三つの山塊を削って、インダス川を主流に、西からギルギス川、北からフンザ川、東にはシャイヨウク川と、それぞれ氷河を源頭に頂き激流となって流れ込んでいます。川は山肌を削り、大きな断崖をなす峡谷を造って流れ、インダス川でさえ、川幅はせいぜい 200m くらい。その峡谷にわずかに開けた台地に猫の額ほどの土地を耕し、ヒツジや山羊を飼って人々が暮らしています。ヒツジ飼達はこの崖地に僅かに生える雑草を求め

て移動しています。彼らの住まいは、石垣の上にポプラの木を載せ、その上に砂を固めて漆喰とした、陸屋根式平屋造り。窓は小さな通風兼明かり取りの窓が一つ。食事は小麦粉で作ったチャパティが主食で、いろいろな豆を煮込んだダールが副食、それにミルクティと実に質素であります。そのような生活環境におかれている彼らを、日本人がみると、違うなアと思うことがよくあります。

その1

彼らの生活水は谷川の水、上部の谷から水

路を造り引いています。その水路はたいてい崖の中腹を削って通しています。その作業には村中で行い、勿論子供も参加します。従って彼らの岩登りのバランス感覚の優れていること。バルトロ氷河の入口にステステ村という村があります。村の背後には高さ 1,000m を越える垂直の岩がそそり立っています。その頂上が見える処まで来ると、頂上に沢山のケルンが積んであるのが望遠鏡で見えました。望遠鏡が珍しいのか、そばに来ていた 14・5 才の少年が、”あれは村の人達が積んだもの、俺も積んできたよ”と言って、その場でたちまちケルンを作ってくれた。そのケルンは角柱で、少々け飛ばしてもびくともしなかった。彼らは石を扱うのは、ガンダーラ以来の伝統か。それにしてもザイルもなしに、何の目的で、あんな高いところに。

その2

ナンガパルバット (8,125m) の北面に、ラキオト氷河がながれています。その舌端の左岸にフェアリーメドウと呼ばれる、名前の通り美しい牧場があります。標高 3,200m 前後の台地に針葉樹林が生い茂り、その先にナンガパルバットが悠然と聳えたっていて、トレッキング観光の名所になっています。その対岸に小さな村があり、村の人達は氷河を渡って行き来しています。いましも 7・8 才くらいの子供達が氷河に降りていきました。氷河には崖っぶちをへつって降りていくのですが、上から見ていると、子供達は氷河の上をあっちへ行ったりそっちへ行ったり、クレバスに阻まれながら、右往左往してなかなか対岸にたどり着けません。そうこうしているうちに、

父親がやって来て、氷河に降りていきました。父親は迷うことなく氷河を渡っていきます。子供達は父親を見つけて一緒にになり、親子で仲良く渡っていきました。日本でもし氷河があったとしたら、その上を子供達だけで渡らせるでしょうか。

その3

あるホテルで朝ご飯を食べていました。メニューは 7cm 角、厚さ 7 ミリくらいの食パンをナプキンで包んで駕籠に入れて持ってきてくれます。あとはバターとジャム。朝ご飯を終えボーイを呼んで、テルモスにホットウォーターを頼みました。OK サーと気軽に応じて持ってきたのが、どうも怪しい。それで中身を確認したら、案の定水。そこでボーイに”これは水ではないか、頼んだのはお湯だよ”と言ったら、”それじゃ俺についてこい”ときた。連れて行かれたのは炊事場。そこにある湯沸かし器のお湯の出口を指さして、”俺はここから出てきたのをテルモスに入れたのだ”と文句でもあるのかいな、とすまし顔。お湯の出口から出たものは、それが水であれ何であれ、彼に言わせれば”お湯”なのでありました。

その4

パキстанはその戒律によって”禁酒”の国であります。山に登る時はまだしも、降りてきたとき、緊張が取れるとともに、長い間の禁酒が禁断症状を引き起こして、それはそれは、もう耐えられないくらい、お酒が欲しい。でもパキстанは非酒三原則を守っていて、作らない、売らない、飲ませないのであります。誠に気の利かない殺生なお国であります。

なんとか酒を、と探していたら、ノンアルコールビールでクラウスターラーという飲み物がが分かりました。これでせめてビールの感触をと、買うことにしてボーイに値段を聞きますと、500 ミリリットル入りのボトルが300 円と言います。少々高いが、なにせ禁断症状を引き起こしていますので、買い求めることにして、冷えたのを持ってくるよう頼みました。持ってきたのが350 ミリリットル入りのボトル。これしか在庫がないそうで、しかたなくもらおうと値段を聞いたら”300 円”ときた。500 で300 円のものがなぜ350 で300 円なのか、間違っているんじゃないの？と聞いたら、ボーイ曰く”あれもこれも同じクラウスターラー”とすましていました。

その5

ある谷の最奥の村での話。我々の前に、それはまあ格好のよい青年が馬に乗って現れました。この青年、我々のベースキャンプにも訪れて来ました。その時は鉄砲を担いでいました。彼はガイドと立ち話をしていましたが、やがて何処とも無く去っていきました。暫くして銃声が二発聞こえ、やがて格好の良い青年が、野鳥を二羽ぶら下げて帰ってきました。二発で二羽とは大した腕前です。鳥は鳩とコジュケイを足して二で割ったような鳥で、後で食べたらかなりのものでした。名前は聞いてもややこしい発音なので、邪魔くさいからお互いチキンバードと呼び合っていました。彼はこの二羽を我々に提供して返っていきました。彼は村の村長さんのご子息とかで、帰途ポーターとトラブルになったときも、中に立ってうまく纏めてくれました。そして翌年、

彼の話題が出て、消息を訪ねたところ、今臭い飯を食っている、とのこと。訳は彼の村は人口50人、隣村が52人、これでは勢力が均衡しない、で隣村の二人を減らした、ということでした。あれだけ格好よければ、二人くらい生み増やすくらい訳もないのに、趣味と実益を兼ねる絶好の機会なのに、考え方がちがうのですかね。

その6

イスラマバードのホテルでのこと。遠征から帰ってホテルに着いて、明日の帰国を控えてリュックの中身を整理すべく、部屋中にまき散らしたまま、朝食に出かけました。帰ってきて、部屋を空けようとしたら、内鍵がかかっていました。中に誰かいるようです。泥棒！一瞬身構えたのですが、すぐに中から応答があり、二人の青年が顔を出しました。おまえは誰だ！とお互いに言い合いましたが、小生部屋の鍵を出して、”この部屋は206号室だろう、おまえ達の見せろ”と言ったところ、彼らの持っていたのは216号室のものでした。彼らは平謝りに謝って、荷物を小脇に抱えて飛び出していきましたが。収まらないのはこちらの方。ホテルの支配人を呼んで、なぜ彼らが部屋を間違えたのか、なぜ違う部屋の鍵が使えたのか、万が一鍵が使えたとしても、部屋の中を見れば、人が居る位のこと一目瞭然、盗人ではないのか。いくらパキスターニが呑気でも納得いかん、警察を呼んでこい、となり、結局半日かけて解決、ホテルが小生達に詫び状を書くということで決着が着きました。彼らが部屋を間違えたのは単なるミス、鍵が使えたのは206号も216号室も同じ鍵だ

ったため。また部屋の散らかっていたのは、友達を訪ねて来、その友達が散らかしたまま外出していたと思ったからとか。それにしても、ホテルもずさんすぎる。金が無くて同じ鍵をいくつか使うなら、間違いの起こらないように、せめて間違えようのない部屋番どう

しとか、完全に離れた部屋同士とかにできないものでしょうかね。

後日談として。詫び状は帰国後一週間して届きました。そして今年二年ぶりで訪ねたら一昨年と同じ形の鍵を渡されました。

甲南中学校山岳部夏山合宿2001年報告

合宿開催地 長野県 穂高岳涸沢より奥穂高岳（標高3,190[㍎]）登山

甲南中学校山岳部顧問 神戸謙司

合宿参加者

山内寛之（中3） 土居義明（中3）
北川祐也（中3） 神澤太一（中3）
花野勝幸 神戸謙司（引率教員）以上6名

行動記録

8月7日（火）

入山日 徳沢まで（晴れのち曇り、一時雨）

7:00 大阪駅中央コンコース集合

7:33 新大阪より（ひかり210号）乗車

8:27 名古屋駅着

9:00 名古屋より（しなの7号）乗車

11:00 松本駅着

11:25 松本電鉄新島々行き 乗車

12:05 上高地行きバスに乗車

13:15 上高地着

13:19 上高地より徳沢に向け歩き出すが雨が降り出す

14:25 途中で雨具に着替えて、明神着

14:45 明神を出発

15:48 雨も上がり、梓川沿いの河原で一休みして徳沢に到着

16:25 テント設営完了

18:00 夕食終わり（ごはん・焼肉・中華

スープ・カルピス）

21:00 消灯・就寝

8月7日入山日の記録

電車とバスを乗り継いだ後、約20キロの荷物を担いで、徳沢に着いた。距離にして8キロ、みんなよく歩けた。去年の立山合宿の反省点を生かし、雨具をすぐに取り出して、着替える事もできた。大きな荷物を担いでの歩き始めには、注意が必要。荷物のパッキングをバランスよくするとよい。上高地の標高は約1,500メートル。徳沢・横尾の辺りで1,600メートル。テント設営時に雨が上がってよかった。足を捻挫した神澤はパテックスをはる。

8月8日（水）

徳沢より涸沢（晴れのち曇り）

6:00 起床・朝食準備（しょうゆラーメン・コーヒー）

7:10 朝食終わり

7:55 テント撤収完了

8:50 横尾に到着。横尾大橋と屏風岩を背景に写真を撮る

9:15 涸沢に向けて出発

9:40 横尾岩小屋跡を通過
 10:15 本谷橋に到着。前穂高岳北尾根の末端、
 屏風岩からの伏流水がある
 10:45 涼しい木陰が名残惜しいが、出発
 12:50 途中20分の休憩を入れて、涸沢キャ
 ンプ地着
 13:50 水場を確認し、ゆっくり休んだ後、テ
 ント設営完了
 16:00 夕食準備 (ごはん・カレー・海藻サ
 ラダ・カルピス)
 17:00 夕食終わり
 21:00 消灯・就寝

8月8日 徳沢～涸沢の記録

テント泊では、荷物の整理をしないと自分の
 寝る場所が狭くなり、寝苦しい。必要のない物
 はテントの入り口付近で、フライシートの間に
 置く。テントの撤収はてきぱきとやり、早かつ
 った。横尾までは前日と同じように森林の中、梓
 川沿いに行く。横尾大橋をわたって、左に大き
 な屏風岩を眺めつつ、少しずつ上っていく。



木立の中なのでそれほど暑くはないが、皆帽
 子をかぶる。一人ずつ渡った本谷橋より涸沢へ
 の登りは暑く、辛かった。それでも雪溪が出て
 くるころには、渡る風が涼しく、心地よい。涸
 沢は標高2,300メートルなので、700メートル
 登った。

8月9日 (木)

涸沢沈殿 (雨のち曇り)

6:00 起床するが雨なのでまた寝る
 7:00 起床・朝食準備 (うどん・ココア)
 8:00 朝食終わり
 8:30 雨の中、花野先生下山される
 12:00 レーションを食べながらトランプを
 して過す
 13:00 雨が上がり、ホットケーキを焼く
 16:00 夕食準備 (釜飯ごはん・コーンシ
 チュー)
 18:30 夕食終わり
 21:00 消灯・就寝

8月9日 涸沢沈殿の記録

1日中、寝て、食べて、トランプをした。
 夜には晴れた。

8月10日 (金)

奥穂高岳登山行動記録 (曇り時々雨のち晴れ)

5:20 起床・朝食準備 (塩ラーメン・コー
 ヒー)
 6:10 朝食終わり
 6:38 キャンプ地発
 7:40 ザイテングラート上で休憩、霧雨とな
 る
 8:22 白出の科尔に着く 穂高岳山荘で休む
 8:54 奥穂高岳に向かって出発
 9:30 奥穂高岳 (標高3,190メートル)
 に登頂
 9:35 写真を撮って、下山開始
 10:30 白出の科尔着。穂高岳山荘でホット
 レモンを飲む
 11:10 出発する
 12:35 ザイテングラート下部取り付け点着
 13:23 パノラマコースを経てテントサイト
 着
 16:00 夕食準備 (雑炊・海藻サラダ・ココア)
 17:00 夕食終わり
 21:30 消灯・就寝

8月10日 奥穂高岳登山の記録

早朝、雨は降っていなかった。いけるところまで行こうということで、出発した。標高が高くなるにつれ、雨となり穂高岳山荘で、一息入れる。小降りになったが、稜線上の風はきつかった。雨具のフードをすっぽりとかぶり、一步一步、歩みを進めた。せっかくたどり着いた頂上だったが、霧に包まれ景色は望めなかった。写真を撮り、早々に下山を開始した。冷え切った身体を穂高岳山荘であたため、ザイテングラートをゆっくりと下る。雨も止み、涸沢ヒュッテや、テントが見えた。パノラマコースに分岐する雪渓をわたり、ベースに帰った。



8月11日（土）

下山日（曇りのち晴れ）

- 5:00 起床・朝食準備
- 5:50 朝食終わり
- 7:20 テント撤収・出発
- 8:23 本谷橋着 つり橋をわたり写真を撮る
- 8:55 出発
- 9:32 横尾岩小屋跡を通過
- 9:53 横尾到着
- 11:03 徳沢到着
- 12:03 明神到着
- 13:03 上高地に到着
- 14:50 新島々行きバスに乗り

15:22 松本行き電車に乗車

15:54 松本駅に到着。銭湯に行った後、弁当・土産など買う

18:45 名古屋行き特急に乗車 東海地方の集中豪雨のため、恵那で1時間停車

23:28 大阪駅に到着

23:45 阪急梅田より、阪急電車に乗り各自帰宅

8月11日 下山日の記録

涸沢から上高地、距離にして約20キロ、長かった。疲れた。皆よくがんばって歩いた。計画では、松本発5時35分の特急に乗るはずであったが、忙しかったので遅らせた。松本の銭湯「おかめの湯」がなくなっていて、「菊の湯」に浸かった。名古屋の手前、春日井付近で、集中豪雨があり1時間以上の電車の遅れがあった。大阪に着いたのは23時を回っていたため、保護者に連絡を取り、阪急の最寄駅まで迎えに出るにいただくことにした。

8月17日（金）お盆休みを終えての練習。

8月20日（月）夏山合宿反省会。

- ・荷物パッキングをバランスよくする。
- ・重荷を担いでの歩き出しにとくに注意する。
- ・水は充分に携帯する。
 - ・意思確認のため、安全のためにも、大きく返事をする。
- ・鎖場の鎖に頼りすぎてはいけない。
- ・涸沢のテント場ではトイレまでの距離があったので、設営場所を考慮する。
- ・靴擦れは早め早めの処置をする。

最後に、8月11日下山日に、電車が遅れ帰宅が遅くなりました。保護者の皆様にはたいへんご心配をおかけしました。お詫び申し上げます。

大台ヶ原 東の川 中の滝登攀記

日時： 2001年9月23～24日

参加： 池内・塩崎・浪川・大森・山本(恵)・田中と池内の友人安野(探検部OB)
良知(WV4回)・片岡(WV1回) 山本の友人検見川を加えた10名

テクニカルノート

池内友宏

アプローチは、シオカラ谷に行く石段途中で沢を渡る所立ち入り禁止看板のあるところを西に折れて千石尾根の稜線南面をトラバース。笹が途切れ栗畑の様になっている所を南斜面にルンゼを目指す。今回は踏み後を辿って行き過ぎ、中の滝の落ち口にまで行ってしまった。これぞルンゼと言うような美しいルンゼをしばらく下って左の踏み跡へ入る。これはかなりしっかりしていた。ところどころ鎖を使って歩いていくと、中の滝の真下に到着。(道を知っていれば1時間ちょっと?)

1P 池内リード ルート図はトラバース状に左に上がるものが多いがブッシュ帯を強引に直上する。その後左上しカンテを回り込むと声は通らず。ランニングはブッシュのみ。岩にテープひっかけピレーでFIX

2P 安野リード ハーケンが見当たらず岩にシュリングを引っ掛けて支点にする、残置テープシュリングがかかっていた岩とフレンズで、アンカーを作りFIX。後続を待たずに次のルート工作にかかる。

3P 池内リード フレンズ2箇所使用。あいかわらず残置ハーケンはない。大テラスにつくと頼りないハーケンが一発あったのでそれと岩とでアンカーを作る。安野さんが上がってくるとザイルを抱えて、4P目の取付まで歩く。引きずってきた1本のザイルをセット。大テラスで、タバコを3本ほど吸ったころ山本さんが到着。引きずってきたザイルを持ってきてもらって、4P目スタート。



4P 池内リード 垂直のクラックからコーナーでここが核心部。出だしが厳しかったのでフレンズを置いといてもらうように言う。20メートルくらい登ったところだろうか、足場のかなり安定したところで事件は起こった。手をかけた一抱えほどもある石が、傾いてきたのであ

わてて押し戻したが倒れてくる。たいした大きさではないと思ってのんびりかまえていたが、これ以上耐えることができななり安野さんに落石することを伝え、手を離し横に飛びのく。するとうまい具合に岩の間に挟まり2メートルほど下で止まってくれた。踏んでみても割合安定しているので一安心するが、なんと！ザイルが挟まっている。安定しているとはいえ今自分が落とした石なので信用できず、苦労して引き抜く。新品ザイルが2回目で早くもだめになった。そこからザイルがいっぱいになるまで直上（8畳テラスをとばす）。なんと！安野さんは、そのチョックストーン気味になった岩を抱きかかえるようにして登ってくるわ、田中さんはその岩に触らずにこようとして両足をつっていた。支点は、フレンズ、ハーケン、フレンズで3箇所。安野さんが引きずってきたザイルをF I Xセット。ほかにも浮石多数。今度リードする人はフレンズでの人工が無難でしょうか、フリー5級ぐらい？（大股開きでスタンス縦方向ばかり）

5P 安野リード フレンズを2箇所使い、小テラスへ。池内がスタートするもバックロープが岩の間に挟まり下から登ってくる片岡にはずしてもらうまで待った。ルートは終了点下で右に巻くと大変難しく、リードは怖そうだった。当初滝の中段は3Pの予定だったがザイルをいっぱい伸ばしたためむりやり2Pで行くことが出来たが。ここはかなりアンカーを作る場所を探した。

上段は登っても良かったが木登り中心なのとさらに時間もあまり無いので、右の断壁を横切るガリーをつめて千石尾根へ出る。

8名分の団装としてザイル5本、カラビナ26枚、60cmシュリング15本、120cmシュリング5本、フレンズ4個（大き目）、ジャンピングセット、ハンマー2個、ハーケン8本。アッセンダー4本

ガリー登攀を予想しフレンズはいい感じだったが、逆にフェースではハーケンの利く場所が

少なくノーピン、60cmシュリングとカラビナは半分くらいでも足りていたと思う。120cmシュリングはアンカーとして使っていたのでなかなか下から上がってこずにちょうどいい数であった。



行 動： 大森雅宏

前日大台ヶ原の駐車場に集合。大台散策組の塩崎さん、検見川さんの見送りを受け8名で翌朝6時半から行動を開始。下降路の確認に手間取り、中の滝への取り付きは9時頃。下降路の途中から望む快晴の中の滝は圧巻で、フクデンさんの若いころなら、差し詰め「その美しい姿に登攀の意欲が湧き上るのを覚えた」となるだろうが、今回の40・50名のメンバーからは「200メートルはあるデ。あんなん登れるんか。むりちゃう？」といささか弱気な意見もあった。トップは池内講師と友人安野にまかせ残りはフィックスザイルにユマールをセットして進む。

1P 手がかりの少ない斜面から左上し、かぶり気味の凹角を立ち木を使い体を開いて乗り越し、息を切らせて30メートルと少し。

2P 岩に正対する基本の動作の多い中にちょっとオポジションなど加え、ナカナカの高度感を味わいつつの40メートル。

3P 右からかぶる側壁に頭を抑えられながら左

上し、丸く外傾したホールドをなんとかだまして、ようやく登った40メートル。



この先、緩くなった傾斜の階段状をノーザイルで40メートル進み、下から1/3の大テラスに出たのが11時20分。もう2ピッチ進んで、中段の大テラスのタイムリミットを12時と考えていたが、このままでは無理。検討の結果、ユマーリングで登る人数をここまでの6名から3名に減らし、残りは別のルートで上部を目指す事にした。別ルートに進んだのは浪川・大森・

山本。この変更とメンバー構成については「技術的な問題やないで。人数が多すぎて時間が足りんからや。この点ははっきりさせとかんと」と浪川さんのご意見がありましたので、この件トクに記録します。(浪川さんOK?)

さて、別ルートを取った3人は、猛烈な薙こぎの末2時半に帰着。

ルートをそのまま滝に取ったメンバーは、4P 核心部 浮石の詰まった垂直に近いクラック50メートル、5P 50メートルを経て上段のテラスへ。この上は右側の樹林帯にルートを求め3時半に帰着。人数が多くて変則の行動でしたが滝は素晴らしい眺めと手ごたえでなかなか好印象でした。



鈴ガ沢東股遡行記

日時：平成13年10月13日 晴れ

メンバー：森本全彦(S39年) 武田雄三(S39年) 塩崎将美(S41年) 浪川純吉(S42年) 大森雅宏(S53年) 川野幸彦(S56年) 山本恵昭(S56年) 松山弘和(S61年) 池内友宏(現役)

鈴ガ沢東股遡行記 その1 森本全彦

10/12夜

9名のおじんと若者が目的地鈴ガ沢に迷い

ながらも集結する。13日2時頃であった。

元気なる若者たち夜明けの4時頃まで酒盛り。

10/13

6:10 起床 武田、塩崎の兩人御岳の田の原駐車場に遡行終了用のための車を置きに行く。

8:40 鈴が沢橋9名出発。林道を40分歩く。一人の馬鹿が、道草をして入渓ポイントの三沢橋で20分待たされる。

9:40 鈴が沢に入渓。曇り空であったが明るい沢である。出足で森本仰向けにドボン。皆の厄払い。滑床と斜瀑の連続。

10:20 三段の大滝(30mほど)に出くわす。一番の難所であった。ザイルを出して高巻きをする。



12:40 洞窟の在る所まで2ピッチ。ここにて昼食。この間滑床と小滝と斜瀑の連続。水量も少なく美しい沢である。小さな釜もあったりで夏に訪れて水遊びなんかしたくなる沢である。1ピッチ行ったところで沢の終局を迎え大きなゴーロに遭遇し、右岸が大がれと

成っている。

13:50 少し迷うが三本ある沢の右側の沢に登る。水も無い涸沢である。高巻きを交えて一気に高度を上げる。疲れもピークに達してるせいか、バテバテの登りであった。

15:20 一番手浪川ドン吉が田の原駐車場下の車路に。それから遅れる事1時間16:20最後の森本完登。おじん組森本、武田、塩崎、励ましてくれた若手山本、池内等は、迎える車を待つ。本当に美しく素晴らしい沢であった。

来年も又皆で行きましょう。

鈴が沢東股遡行記 その2 塩崎将美

王 滝 村

集合場所に予定した王滝村、村の中がこんなに複雑で解りにくいとは想像だにしませんでした。まず神戸/岐阜組の4台の車で村に突入、先頭はどんどん林道を登り出す、この林道は目的の鈴が沢の一本東の林道と気が付き狭い道でユーターン村の中へ、この辺りから車ごとに判断が違いバラケだす。村の中は車一台がやっと走れる狭い道が縦横に、走れど走れど目的の「おんたけ荘」を見つけられない。塩崎の車は、それではと村役場の標識はあちこちにあるのでそこを目指すも標識どおり走っても見つからず、あれここ通ったんとちゃうかと同じ所をぐるぐる、なんと何回も前を走っているのに役場が想像するほどの建物でなく小さな建物で気が付かない。行き止まりの道に突っ込んだり、どんどん村から離れたり、ついに松本から参加の川野君に携帯でSOS、迎えに来てもらいやっと合流。

約1時間のロス。

ド ボ ン

全身ずぶ濡れのドボンは森本カンさん、武田雄さんの二人、カンさんは入渓して最初の渡渉で飛び石の上を数歩歩いてドボン、振返ると浅い水の中に尻餅を付きもがいてました。雄さんは私も緊張した釜の上のスラブの嫌なヘツリ、2mほど落ち水中へ、流され出発点に逆戻り、私は1回しか見ていませんが同じ所で2回ドボンしたようです。見ているほうは思わずニヤニヤするほど面白かったのですが数歩水の中を歩くと足がジンジンする冷たい水、さぞ冷たく寒かったことでしょう。お二人の名誉の為付け加えますがカンさんは沢靴がオニウ、靴を信頼しすぎた為、雄さんは沢靴を忘れ(致命的ミス?)普通の登山靴で逆行した為のドボンで決して技術的ミスではありません。

最悪の高巻き

3段の滝は遠くから50mをこす滝に見えますが近づくと5m, 7m, 20mの3段に分かれて落ちています。なかなか見事な滝でした。この高巻きはザイルを出しましたが、ずるずる滑る足元、浮石だらけで落石がビュンビュン、結構な高度感、ブッシュを握るとトゲトゲで手の痛いこと、最後は手のひらから血が噴出すしまつ。最悪の高巻きでした。

御岳はさすがに大きい

ルート図では約5時間で抜けられると書いてあるのを信じたのが間違い。核心部は予定通り歩けましたが、そこから田の原に抜ける

のが苦勞しました。核心部を抜け大休止の後、自分がゆっくり登りたい為に、時間の節約を理由にパーティーを二組に分け、浪川君と元気な若手を先行させ車の回収/迎えの車を取りに行ってもらう事に。これで私が上に着いたところには迎えの車が待っているヤレヤレ安心と私がゆっくり登っていると何と先行組が戻ってきます。最後の30mの直瀧が悪いのでルート変更との事、せっかく登ったのに下るとシブシブ引き返し左岸の谷へ1ピッチ、又もや先行組が滝に阻まれたと引き返して来ます。ここから左の尾根のわずかな踏み跡をたよりに高巻き、藪こぎ有り、岩登り有りで体力消耗、やっと滝の上に。ここから涸れ沢を登りますが滝が出る度に猛烈な藪こぎ、やっとガードレールが見えましたがはるか彼方、見上げる程の高度差、ガックリ。私のピッチはとたんに落ち、若手に「歩かな着きませんよ」といつか聞いた様なせりふで励まされ、それでも休み休み、バテバテでやっとの事でドライブウェイにたどり着きました。

東 股

王滝川の支流である鈴ガ沢東股、全体の印象は南に面し明るい開けた谷でした。30mを越す滝在り斜瀑在り、小さな滝は数限りなく、両側のスラブも素晴らしく釜も大小多くあり、美しいナメ床が連続し、核心部はほとんどゴーロ状になる事無く素晴らしい谷でした。トイ状の滝も在り、夏ならウォータースライダーを思いきり楽しめそうです、勿論泳ぎが楽しめそうな釜も多くあります。1ヵ所水量の多いトイ状の流れがトンネルに吸込まれ自然の橋を掛け橋の下には大きな釜がある奇妙な

自然の造形も目にしました。この橋の上流にドボンするとどう言う事になるのでしょうか、人の体がうまく橋の下を潜れるのでしょうか？

この谷で唯一の残念な所は、大きな滝がどれも御岳特有の逆層でオーバーハング、見るからに悪く直登できそうも無く高巻きを強いられる点でした。

最後のバテバテが無ければ再び訪れたくなる最高の山行でした。

リーダー不在(私の反省)

年齢差 35 才のパーティー、決定的なリーダーがいません。参加メンバーは各自自分で判断できるメンバー。自身の判断が先行しがちです。核心部終了後の高巻き途中、両側がスパッと切れ込んだ 5-6m の岩登り、せつかくフィックスザイルを張ってくれたのに私のハーネスはリュックの中、めんどくさくて自身の判断でセルフを取らずに登りました。山では何が起こるかわかりません。リーダー命令の無いパーティー。誰かがザイルの必要を言えば皆がザイルで安全を確保、誰かがヘルメットの必要を言えば全員がヘルメットを着用する。自身の判断よりパーティー全体の判断を優先し安全登山を心がけねばと反省しきりです。これから同じようなメンバーで登りたいと思っていますが、リーダー不在と言う問題は付いてまわりそうです。参加者がこの点を十分意識せねばと思います。特に私の様に年齢の高い参加者は若いメンバーの声より自身の判断を優先しがちです。安全優先で楽しい山登りを続けたいものです。

感想 その1

川野幸彦

鈴が沢ではいろいろとお世話になりありがとうございました。久しぶりに山岳部の人たちと登山が出来て楽しかったです。それにしても、大先輩方のパワーと粘りには恐れ入りました。私もあと 20 年経って、同じようなことが出来るのか。とてもいい目標が出来ました。あの後、私は疲労でえらい目にあいました。

また来年も行きたいです。いい所を探しておきます。

感想 その2

池内友宏

こぶし大の落石を武田さんに当てるという失態をおかし、また、ルートファインディングは山本さんよりぜんぜんダメでした。寒すぎて多数の「すべり」ポイントを素通りしたのが心残りです。



参加のメンバー

山本 塩崎 浪川 松山 大森
川野 森本 武田 池内

編集後記

越田さんの山岳会通信から、南里さん（南里さんの渡仏時期は渋谷さん）、そして柏さんと引き継がれた「山嶽寮」の編集を今回から担当する事になりました。今までの一人体制から倍の人数で、山本（真）さんが編集長で原稿依頼、大森がパソコンで編集作業と受け持ちを分担、まあ「営業」と「現場」みたいなものではないでしょうか。

よくわからないまま取り掛かった編集は、なんと言っても原稿に助けられました。山本編集長のおかげに、鷲尾さん、小川さん、茂木さん、鈴木さん、芦田さん、締め切りよりずっと早く原稿をお寄せいただきお礼申し上げます。6月の締め切りを過ぎ7月に入ってまだ間に合うかと声を掛けてくださった会員諸氏にも感謝いたします。8月ル・パレブーク登頂から帰国されたばかりの米山さんから、今年の号に間に合ったらとワープロファイルと写真を送っていただきました。帽子を脱いだ手でバイタリティーに拍手です。

前編集長の柏敏明さんからは、アドバイスをいただき柏秀樹さんのカット集をお預かりしました。これからは表紙などに活用してゆきたいと思っています。

塩崎さんが管理に当たっておられるホームページに寄せられた記事も大切な原稿になりました。普段ホームページをご覧の方には二番煎じになりますが、印刷物は趣が異なりますし、なにより全会員がご覧ではないだろうと再録しました。これがきっかけでホームページを覗いてみようかという方が増えればと思います。ホームページ中の「掲示板」は会員相互の連絡に重宝で、会員の近況はじめ山行のことや飲み会のこと、部室にたむろしていた頃のように情報が耳に入ってきます。

茂木さんは原稿をお寄せいただいたほか、津田さん、朝山さんへの原稿依頼をお願いした上に、ご経験をもとに、横書き時の数字表記についてなどのご意見を戴きました。これは編集を始めるとどの原稿にもでてくる問題で、例えば「四捨五入」が正しいのか「4捨5入」が正しいのか。手元の国語表記の資料には「4捨5入」が「正」とでていましたがなにか不自然です。今のところはもとの原稿と、辞書と、ワープロソフトと、担当者の感覚などで処理しています。不統一はご容赦ください。西暦、和暦は原稿の記載によりました。

校正は一部武田会長のお手を煩わせました。残りの部分は編集担当の自己チェックでエラーゼロをめざしましたがきつと洩れはいくつもあると思います。この点も不統一に併せてご容赦ください。

話は不統一で続きます。見出しなどの文字サイズ、改行のピッチなどレイアウトにも不統一が残りました。

今回、印刷用の原稿は編集担当がパソコンに入力して作成しましたが、全てについてルールを決めてから作業にかめることが出来ず「現場合わせ」が沢山でした。プロの仕事ではありませんので見栄えの悪い点はご容赦ください。原稿をパソコンに入力して印刷用のスタイルにまとめてから、印刷、製本を発注しますと、経費がかなり廉価に収まります。会費の収納率のアップは皆様のご理解と会計山本君にお任せするとして、経費については無理がない範囲でなるべく圧縮したいと思います。

ともあれ今年の「山嶽寮」はお寄せいただいた原稿と皆様のご協力で発行となりました。

「営業」「現場」ともどもお礼申し上げます。次号もよろしくお願いいたします。

原稿宛先 山嶽寮編集担当
電話/ファクシミリ

大森雅宏
Eメール

山 嶽 寮 第 57 号
発行 2002 年（平成 14 年）9 月
編集人 山本真博 印刷 カツヤマ印刷